

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

ウイ

食
と
環
境
と
い
っ
ち

逐次刊行物

昭和 63. 9. 21

国立 婦人教育会館
婦人教育情報センター



1988 **10**

国立婦人教育会館図書

和

104193

四季のうた



被岸花

きり絵と文 金子静枝

曼珠沙華ともいうが、これは梵語で赤い花と
いう意味らしい。田のあぜに咲くこの花を見
ると、ちょっと暗い郷愁を感じる。

巻頭詩

「風景・秋」

ジョルジュ・ルオー

フランス近代風景画展

その絵を描いたとき

画家は「神」を考えていたのではないかと思います

空があり 木があり 雲があり

画面中央に一本の道

道に登場する人二人

むき合う 白い一人はキリストではないかと思ひます

わたしは それとはちがいますが

似た風景の中に立っていたことがあります

子どものとき

風景・秋

台風のと

風景は澄んで白くさっぱりしてしまい

筆太の黒い輪郭を持つて

空も 木も 雲も

呼びかけたいようなつかしきであらわれたとき

一本の道があり

その道に母と立っていて

母といっしょに いつまでもいつまでも

風に洗われていたいと思っていました

一九八八年五月 東京新宿 伊勢丹美術館

羽生 槇子

新しい家庭科



特集 食と環境といのち

- インタビュー●曾田蕭子さん(インタビュアー半田たつ子) ————— 4
- いのちと連鎖すること ●一条ふみ 12
- スパゲティと放射能 ●西村良平 16
- いのちをいとおしむ「食」を ●中沢孝江 20
- 「田舎文化」に誇りを持とう ●田村より子 24

発言

- われら百姓一年生 ●仁ノ平尚子 村松通久 30
- 命をかけたメッセージ ●櫛川 謙 32
- 食物環境としての海 ●轡田邦夫 34
- 小さな森の宿の願い ●山崎昭二・都世子 36

●学習の主人公たち ————— 38

我が家の朝ごはん / 東京都江戸川区立新田小学校六年生

新しい家庭科を創るために

- 小学校では / 林間学校の体験と夏休みの課題 ●岩瀬志津子 42
- 中学校では / 保育一私の場合 (三年共学) ●常陸れい 47
- 高等学校では / 「いのち」について考える(2) ●浅井由利子 52

◆こだま

- 「強者の論理」をめぐって ●平井雷太 / 西内みなみ 57
- 「教委に女性進出を」に答えて ●前橋弘子 ————— 60



連載

巻頭詩/「風景・秋」	羽生楨子	1
海の輝く日/冬道麻子さんのこと	佐藤通雅	62
今、子どもたちの世界は/「カンけり」	塚越敏雄	64
経済の目/高齢化社会の負担と国民所得の増加	福島澄香	66
ダブル・ポケット/パムとダンの場合	國信潤子	68
歴史の窓/春香伝	岡百合子	71
ワンポイント 近代日本女子教育史/第一次及び第二次 「女子学生亡国論」	秋枝蕭子	72
KNOW HOW 共学家庭科/子育て その4	湯沢静江	73
女、そして男/フィリピンでかわした会話	田川建三	74
不思議の国ニッポン/警察	クレイトン・ナフ	75
青春ZIGZAG/「ヒロシマという名の少年」を作った 菅田良哉さん	稲邑恭子	76
もうちょんぼ、がんばらいやー/「夏、帰郷、ふるさと」	梶野良平	77
はなにつき/くず 蘆屋道満大内鑑	藤尾知子	78
よそおい	内山裕子	79
波/'88年夏——私のテーマをこそ	半田たつ子	80

○今月の読書から 82 ○わたくしからあなたに 84 ○Weの読者会だより 87
 ○Weになんでも言おう なんでも聞こう 88 ○イキイグるうぶ 90 ○泉 91
 ○十字路 92 ○あんでな 94 ○編集室からあなたに 19

Interview

人とのつきあいは
お料理に似ているかも
しれませんね

曾田 蕭子さん

二十年前、二十代だった曾田さんが東京から大阪へ引越した時は、夫婦二人だった。十五年後、夫君が職場のエレベーター事故で急死。彼の両親の嘆きは深い。曾田さんは東京に職を見つけて、再び引越す。三人の子育て期、互いに育て合ったすてきな仲間と別れて。

この日々をみごとに書ききった新刊に魅せられ、私の願う家庭科がここにある、と思った。曾田さんは、Weの読者でもある。「かたる会」の活動で知った曾田さんに、'83年一月号（テーマ「男と女の新しいかわり」）で書いていただいたこともある。静かな情熱を秘めた曾田さんの言葉、聞いて下さい。



● インタビューア

半田 たつ子

一九三八年、東京都に生まれる。大学は薬学部に入學したが、その後、物理学を専攻。
大阪・枚方で地域の人たちと「かたる会」を作り暮らしの中で学び合う。
この春『子育ても料理も科学も遊んじゃおう』（太郎次郎社）を出す。結婚・子育て・地域・暮らし・仕事…をしなやかに語って、好評。日本科学技術情報センター勤務。

「語る」ということ

——曾田さんのご新刊『子育ても料理も科学も遊んじやおう』を読んで、ほんとうにすてきな出会いを枚方でしていらつしやったんだなあって思いました。そして、それは、いい方たち、いい出会いを可能にするものを、曾田さんがお持ちだからだと思うんです。

曾田 うーん。いろいろなことに恵まれたんですね。若いときからすてきな人たちと出会い、一緒にいろんなことをしました。その中で私も変わったのでしょね。

——恵まれていらつしやるのは確かでも、働き盛りのおつれあいを、突然亡くされるといふ不幸もあって……。

曾田 彼とはやつぱり、物理のことも世の中のこと、子どもたちのことも、一番気楽に、長い間語ってきた、大事な一人でしたからね。

——その語るということですが、おもしろかったのは、曾田さんが「私たちは子育てのまっ最中、『かたる会』という定期的な井戸端会議をやつて、おしゃべりのもついい感じを満喫しました。いい感じを空気のように吸つて暮らしていたんです」。そのことを「ちやうど煮物のおすそわけのように」お伝えしたくて、文章にまとめたのがこの本だと述べていらつしやること、でした。

曾田 ええ、私たちがつくつた「かたる会」にも、友達と意見が違ふことはむろんあるんです。が、私たちは地域で暮らしを共にしているでしょ。だから普段からあの人は近所の子どもにやさしいとか、夫婦そろつてアクティブだとか、ほかに見えていふところがありますから、一時的には違つてもまた、出会うということがあったのですね。

いろいろな組織が分裂するっていうけど、私たちもこれがそうかなあつて思うこともありました。でもトータルにかかわりあつていふと、決定的に分かれちゃうということがないんですね。不思議ですね。

「つきあう」ということ

——もしかしたら枚方という土地柄で、しかも子どもさんが小さい時だったからできたおつきあいなのかな、つて思つたんです。今年の夏は、大阪でフォーラムを開くのですが、関西の方のほう元気があるように思いました。「枚方という土地柄」という言葉には、そんな思いが含まれているのですが、もう一つ、子どもが小さい時は、親も気取つたりしてはいられない。特に地域では、子どもを通して生活が丸ごと見えてしまうから、裸のおつきあいがごく自然にできるんですね。子どもが大きくなってから住む地域では、なかなか本音のつきあいができにくい、ということがあるように思いま

すが。

「運動」を共にするつきあい

曾田 そうですね。それはとても大きいと思いますよ。私は保育所を作る運動にも入れてもらってたので、なおさら親密になりました。私たち一家が、枚方の大きな新しい団地に引越していったその日に、保育所を作りましょう！ というピラをいただいたんです。引越したばかりのためらいみたいなものが全くなくて、仲間になりましたね。志が同じでしたから。

保育所運動は、前向きにばあっとつき進んでいかなければならないでしょ。一方、子どもたちにたつぷりとした暮らしを用意したい。だから時間のあるものが、お互いの子どもたちに夕食を食べさせたり、一緒に寝かせたり、即席の歌を歌ったり。子どもと保育所運動という二つの要素が、タテとヨコに織りあわされて、いつそう深いかかわりが生まれたんだと思います。

「創る」ことで響き合う

——この本の中には、実にたくさんさんのテーマが含まれていますね。女が生きていること、食べもののこと、働くこと、夫と妻、親と子、地域、仲間……などなど。「生きる」というこ

とに向き合っていらっしやるから、きつと読者からは豊かな反応が返ったことでしょうね。

曾田 これまで、自然科学の本を翻訳したことはあるのですが、自分の本を出すのは初めてです。幼い子どもをかかえた人、働き続けている人、地域にネットワークを作ろうとしている人、さまざまなたちが、「私のことが書かれている」と受けとめて下さったのはうれしかったですね。生活の場では、保育所とか、食べもののこととか、一つのことについて、いつながりができて、それを一生懸命やっていると、夫婦のことや子どもとのことなども、一緒にうまくいくということがありますね。自分の命と味わい深く生きていけるようになるといふか……。もし、そういうことがないとしたら、あまりにも問題山積みの世の中ですから……。

——一つ一つ撃破していたのでは、到底寿命が足りない。曾田 自分をどこかに置いておいて、一すじに何かりっぱなことをする、というのが今までの男の人のやり方で、それがたたえられていたけれど、そうでないやり方があると思うんです。私を含めて、女は「自分がいま生き返りたい」んです。

——ご本の中でも、男の人ならこうする、というところが何箇所もあって、おもしろく共感を持ちました。その特徴的なのが、パリ留学のチャンスで「かたる会」の合宿のために

自ら潰すというところで、ああ惜しいなあつと胸が痛んだのですが……。

曾田 そうですか。本人はそれほど惜しいと思っていないんですよ。パリで物理を勉強するというのは、私にとってすごく心ときめくことです。でも、つき放して考えれば、西欧文明が用意してくれた、専門家の一種の閉ざされた世界の中に入っていくということです。私にとってすてきであっても、今生きている人たちにとっては、何ってことない。一方、地域での保育所運動や「かたる会」の活動は、暮らしのまん中で、はじめの一步から自分たちで創るものですよ。そうしてできたものって、命があるように、いろいろなものと響き合って呼応し、ほつといても広がりが生まれますね。そんな何かを流産させる危険をかかえてまで、パリにボンと行くっていうのは、あまり心が動かなかったからなんですね。

——ご本人は、たいしたことじゃないって思っていられしやるのに、周りが惜しいと思うのは、やっぱり「婦人問題」なのでしょうね。曾田さん個人の選択というより、女の人の学問的能力・キャリアを積むチャンスが一つ失われた、と見てしまうのですから。

曾田 でも、その分「かたる会」というチャンスが生まれたと考えてみて下さいませんか。「かたる会」って、たくさ

んの人のチャンスですから、その分すてきでしょ。

理論が力を持つには

曾田 「女の時代」とか言われて、いろいろな方が理論的にすぐれた本を出したりしていられしやっても、それが限られた人だけのものなら惜しい。過去にその人が精一杯努力したのに、どこかでどうなったのかということがわからないと、人に訴える力はない。「かたる会」でわかったんですけど、論理や理屈って、それだけで拒否する人が多いんですね。今まで女たちは、理屈で黙らせられた、という体験があまりに多いから。

かといって、理屈はいらない、とは私は思わないので、そのあたりが、どのように組み込まれて、人間の力になるのかって思いますね。物理では理論をやっていたので、私は理屈をこねるのっておもしろいんです。でも、それが浮いていたのではみんなの生きる力にならない。どういう時に組み込まれたらいいのか、一方受け手はどういう拒否権を発動するのかが、かなり重要なですね。

曾田さんの現在

——曾田さんは、日本科学技術情報センターで、こういうお仕事をしていられしやるのですか。

曾田 夫が亡くなりました時、教育盛りの子どもが三人いましたから、お金がいる。教員免許をとってなかったので、大学の聴講を始めて資格をとりました。そして今は、科学技術に関する論文を、誰にでも利用できる形にファイルする、それを量産して売るといふ形の仕事をしています。何か私の個性にはまじめすぎちゃって……。でも、だれかとおしゃべりをする世界や書く世界を持っていて、仕事の場とそこを行ったり来たりできればいいんじゃないかと思ひ直しました。

——突然、おつれあいの死に遭われて、立ち上がるまでについ分大変だったと思うのに、ご本にはほとんど書いていらつしやいせんね。

曾田 自分でも不思議だと思ひますが、当時はいろいろなことが押し寄せてきて、精一杯それに向かつていましたから、これを立ち直りというなら、すぐ立ち直りました。でも二、三年たつてから、フツと淋しく思つたりしました。彼がいたらかんなことも語り合えるのにつて。でも、子どもが三人いる、仲間がいる、そしてこの本を書くということが支えてました。また、三人の子どもが、それぞれ難しい年代にさしかかつて、大人一人に子ども三人という時、ああ、もう一人大人がいてくれたなら、と痛切に思ひましたけれど、一方ではとにかく一步を進めることが肝心だつて思ひが常にあつたんです。

父は三月に亡くなりましたが、三人の親たちは、この本を書いたことをとても喜んでくれました。

——亡くなられたおつれあいが、きつと一番喜ばれたのでしようね。薙子よかつたね、がんばつたね、つて。

曾田 そうかもしれませんね。

いい思ひをしたからお返しを

——お話をうかがつていて、曾田さんはすぐ物事を肯定的にとらえられる方だと思ひますが、それはお小さい時の育てられ方でしょうか。

曾田 そうかもしれませんね。恵まれていたのでしょうね。それと、いわゆる「女らしい生き方」からはみ出した以上、それより生き生きとした毎日をつくりたかつたからでしょう。不安になることもあるけれど……。つまるところ話は簡単。やらなきゃならないときめたことを自分らしくやるだけ……。ですよね。夫が生きているときから、子どもを寝かしつけておいて地域の会に行くとか、何かをしなからもう一つのことと同時にやつていく。これもそれも、一緒にやつていくほうが面白いわよつて感じてきたんですね。そのほうが響き合うと思ひんです。

彼の死も、一幕が終わつたら、それで二人の生活は終わりにやなくて、二幕目が開くつて感じて過ごしてきました。彼

が何かの意味で生きてるような気がします。この本を書いていたこともよかつたんでしょね。いい思いをしたから、お返しをする、という気持ちでした。

大きい世界と小さい世界

曾田 小さい時、父が寝物語によくお話をしてくれましたね。そのことが心に響いていて、物理のようなことをやりながら、一方ではセンチメンタルな意味でない、優しさというものを人々がつなげていけたらと思うようになりました。そのことから、大きい世界で、人を振り向かせるようなことをするより、小さい世界でいい出会いがあれば、そこからつけやきばでない素晴らしい創造が生まれると思っていましたね。大きい世界からもすてきなものをもらいながら。

人間の生き方でも、一人の女の人が小さい子どもを育てているから、じつと家の中のことだけをしているほうがいい、といった時に、その人と生き方は違っても、違いを違いとして認め合うほうが楽しい、と思ってきました。楽しいことの中からはきつと生きるエネルギーが生まれます。

食を暮らすことの中でとらえる

——「食と環境といのち」というのが、この号のテーマなのですが、食べるということを、環境とか生きるとかいいう大

きな問題の中でとらえたいというのが狙いなんです。消費者運動をしていらつしやる方が、安全な食物を得ることに一生懸命だけれど、その人の暮らしぶり、生き方にどうつながるのだろうかと思うこともあるんです。

曾田 槌田劬さんの「使い捨て時代を考える会」に共鳴して、槌田さんのお話を聞く会に参加したことがあるんですね。そうすると、集まった人の半分位は「かたる会」の人たちだったりして、そこから泥のついたままの野菜を共同購入したりしました。団地の前で、仲間とともに野菜を分けて、100グラムいくらで、250グラムだから：なんてやっていると、子どもたちが周りに寄ってきて、計算して、階段かけ上がって、届けてくれたりしたんです。「ほめられた」って、子どもたちはそれは得意でしたよ。

あるとき、ポスターに大きなトマトの絵を描いて「トマトはトマトらしく、わたしたちはわたしたちらしく」って書いてたんですね。そしたら子どもたちが、トマトらしく色を塗ってくれるんですね。ちょうどほればれするようなトマトが「使いつて時代を考える会」から届いたばかりのときでした。このポスターは何のポスターだと思いいになりますか？

Weでも、コンピューターを特集してましたけれど、私たちも枚方市役所にコンピューターを入れる問題について、反対運動をした、そのときのポスターなのです。「国民総背番号

制」は反対だ。精一杯自分らしさを発揮しあって生きていこうという思いを、そのみごとにトマトにこめたのです。

こういう運動は、いかにも運動家ってタイプの若い人が中心になっていたりすると、主婦はちよつと署名できないと思つたりするのですけれど、私が「団地に住んでいる曾田です。いつもお世話になっています」という感じで、「コンピューターが好きでも、くらしのこういう所に入れるのは反対だ、つていうのはありますね」と話したら、署名して下さる人も多かったですよ。

——家庭科で「食物」を学ぶというと、栄養学・食品学・調理学のやさしいものを教わるという感じになって、どうも生きること・くらすこととつながらないんです。「かたる会」で食べものの共同購入をして、子どもたちを面白がらせながら巻き込んでいくというところに、大事なヒントがありますね。子どもたちの生活から切り離されたところに学校があつて、学校教育の中の家庭科として「食」が扱われる、その限界をどうやって越えるか、という問題ですね。

家庭科の男女共修運動は、制度をかちとりました。ところが、いよいよ具体的にその実質を創ろうとする時、仕事も地域も問わず、お互いの生活が見えない人間同士では、何かもどかしいんです。ことが家庭科であるだけに。

私は曾田さんのご本の中の「ある人が『私は大根の葉っぱ

をこんなふうにつけものにするの』といえば、それは彼女のていねいな生き方を断片的に表現したことにならないだろうか？ 大根の葉はただの大根の葉ではないはずだ。そのことをとおして彼女は、彼女自身を語っているのではないだろうか」というところが大好きで、家庭科の運動はそんな感じでやりたいんです。

感動とともに学ぶ

曾田 「かたる会」のある人が、「うちの子は、家庭科が好きだから、きつと理科も得意だと思つて」と言ってくれたのがうれしかったんです。家庭科で学ぶことと理科で学ぶことは呼応するのが本当じゃないかしら。大人でも、頭で学んだこと、暮らすこと、この両方の世界をいつたり来たりする、ということが、とても大切だと思つてですね。「かたる会」ではいつのまにか、一人一人がこういう感性を持つようになりました。余裕ができたというか。信頼つてすごいですね。

男の人たちが、60年代・70年代の大きな時代のうねりの中を生きてきたのに、いまその感性が逼塞してしまっているような気がするんですね。「かたる会」の仲間でも「うちの夫は全然ダメ」っていうから、「そんなことないでしょ。会わせてよ」って用事を作つて夜帰宅されたところ出かけて行って、ついでみたいに居間で話し込んでみると、ほんとにいい

方たちなんですよ。男の人たちも、本当は、仲間に入った方が生き生きするんですね。

人といつきあいをしていると、個人の側に想像力とか、さまざまの力がついてくる。情感の豊かな学習とか、感動とともに学ぶということをなかだちにしてつきあえたらすてきですね。

家庭科から始まるもの

——曾田さんのご本から、はっと気づかせられたのはそのことです。学校がおかしくなり、教育に絶望する中で、私が家庭科には何かがある、何かができる、と思ってきたことを曾田さんのご本は、語って下さっているんです。

曾田 人とのつきあいは、お料理に似ているかもしれないね。私たちは、相手によっておのずと違う働きかけをしていますものね。同じじやがいもを材料としていても、この人にはどんなお料理が向くかをイメージするのが家庭科でしょ？ カレーライスを作る時は、じやがいもをどのように切って、いつ鍋に入れるのか、別の料理を作る時は？ このような材料と組みあわせたこの料理では？ と。それを人とのつきあいにもあてはめていく。それは決してオーバーではなく宇宙のシナリオにも通じることではないかしら。

「家庭科は学習だから論理的に教えないければ」という考えが

あるでしょ？ それはわかります。でも論理の魅力って何なんでしょう？ 私にはこう思えて仕方がないのです。違っていたら言って下さい。論理の魅力って、その中にどれだけの実感や願いやワクワクすることがこめられるかにかかっている、と。

論理って、私には「おはいんなさい」「はい、よろし」って歌いながらする、なわとびのようなものじゃないかって思うんです。なわは二人が向かい合ってそろえて大きく回せば誰がやっても回せます。二十年前だって今だって沖縄でだって北海道でだって回せます。同じようにやれば同じように回せます。そういう意味で普遍的であり、論理に似ています。

こういうふうに戻っているなわに今まで数えきれないほどの子どもたちや元子どもたちがとんだでしょ？ ある子どもは目をキラキラさせてとんだ。また、口を結んでとんだ。笑いながらとんだ。おしやべりしながらとんだ。夕やけを見ながら、「これでサヨナラよ」と言ってとんだ。なわって舞台なのです。

理論をつくったり論理を展開したりするって、舞台をトンカチトンカチとつくるのに似ています。演じられるドラマがあるから舞台って命をもつんじゃないでしょうか。

——すてきな結論、ありがとうございます。

いのちと連鎖すること

午前四時頃から九時頃まで開かれる朝市へ隔日に出て立売りをし、毎週火曜日に有機農法協同組合の仲間たちと市民生協の広場で売る日々が続いている。前日はそこへ出る準備で終わる。

朝市、市民生協がすんだ翌日は残った作物たちへの手当てにほとんどの時間を費やしてしまう。もうちよつと布団の中にいて手足を充分にのばしていたい、とは思いますが、売れ残った作物たちが籠の中にじつと待っていると思うと、飛び起きて戸外の水で思いつき顔を洗い手足を洗いさっぱりとなつて、作物を籠から取り出す。にんにくが三粒残っていた。ていねいに皮をむいて醬油に入れておく。大根が二十本ほど。近所のお宅へ差し上げ、残りを漬物にし、お味噌汁の実と煮つけと大根おろしに。薬物でおひたしをつくり、トマト、す

一条ふみ

もも、アンズを砂糖づけにする。ハードになると食物を口に入れるのさえ難しくなる日常のために、備えられるものを氣持をこめて作っておける唯一の時間でもある。

「やあ、今日は！ 久し振りだとも元氣そうで何よりだア。俺、今日はぜつひ、話っこしてみたくて来たのす。居でくれでえがった」。浅黒く日焼けした伍郎ちゃんが、薬物のひと葉ひと葉をそろえているそばに、どつかと坐った。

「俺、百姓を十年間休むべど考えました。俺本氣です。家族にも言うべと決心してます」。

野菜畑五反歩、水田一町五反、トモロコシ畑と牧草地二町歩。牛十五頭。年老いてはいるもののまだまだ働いて助けてくれる両親と伍郎ちゃん夫婦、かわいい子どもが三人いる。真面目に国の農政に忠実に、農業協同組合の示す指導に



従って農業をやればやるほどに、それこそ、いつの間にか借金が降り積もる雪のように、音もなく巨額に積っている。手いっぱい身いっぱい働いて子どもたちが眠いのを待っている夕餉の食卓につくのはいつも八時過ぎる。

仔牛が誕生した時のうれしき、喜び、すすすくのびてさわやかに風に吹かれる牧草を育て、良いおっぱいを出させよう、化学肥料やダイオキシンの入った除草剤、農薬を使わぬ食物を毎日家族と食べられる幸せ、そうした話が弾んでいるところへガヤガヤ、ドヤドヤと農協の職員たちが夜の訪問である。農協の共済保険への強力な勧誘が、加入しないうちは続くのだ。去年、負債のある農民に向かって農協の職員が共済保険をかけて自殺して支払うように、と言ったことで、人権擁護委員会へ助けを求めたがどうにもならなかった話が伝わってくるほどだ。伍郎ちゃんも、このままの農業をひた押しに続けていけば、いつの日にか、それも遠くない日に借金のかたに農耕地を農協に取上げられてしまう。

「俺は、農協の借金は農業以外の働きで返すべど思ってる。土方でもなんでもして働くす。その方法で農地を守るべど考えました。十年ぐらいは家族の者だちが暮らして生ぎでぐぶんすか作らね。そのうちに、今の変わり身の早さで進めば十年間のうちに日本の農業もどうにかなるべ。それまで俺は頑張って農地を守る……」伍郎ちゃんの声が心に食いこむ。

今から十年前に水田の補助整備事業があったばかり、その後十年かかって、ようやく元の地力に回復させ、収穫もやや元通りになった。また同じ水田に補助整備事業が行われるので、反対した四人の農民たちのうち三人までが一夜にして賛成に回り、一人だけが反対を続けている。学校では反対している家の子どもだというのでいじめられている。村の葬儀などで村人が集まれば、昨日まで反対であった人たちからさえ、「おめさんたちは、この村にいらねんだ。どこさが出でいぐんだな」と言われる始末だ。

反対であった三人がどうして賛成に回ったのか。三人のハウスの土はもう作物を育てる力を失っていた。最後まで反対している農民の農耕地は川べりにあって、永年の洪水による堆積で土質が良く、化学肥料など使用しなくても、家族六人が暮らせる現金を、根菜類を作って得ていた。その土を三人のハウスへ入れてやることを条件に切り崩したのだ。最後まで反対しつづけた農民の家では、土を取られてしまい、生活費にあてた根菜類を作ることが出来ない。そして十年間かかって回復させた水田の土ははぎ取られ、コンクリートの混じった土が運び込まれ捨てられている。

「よく友人や親類にも言われます。村を出て他郷で暮らすか、最後まで反対し通すか。その二つにひとつしかないのだ、って。今も隣へ声をかけても答えてもらえないのです。

全く孤立無援です。農民同士でなぜこんなにならなければならぬのでしょうか。それも補助整備事業をやったつてひとつも良いことなどないのに……。いったい誰のためになんのために繰返すのでしょうか。水田から取れる米の質が悪くなるばかりです。何処から運んでくる土なんだか……。土をつかんでみると人間の命を養う作物を育てられるなんてとても思えません。いろいろ辛いことばかり多いのですが、私たちはこの村で頑張つて生きます。ほうれん草の種だってもう家で何十年か親の代からとつた種を蒔いて育てています。もう、こんな小さい面積しか蒔くところがなくなりましたけれど、ずっと食べてくれる人たちが待つていてくれます。量も前の何十分の一ですけれど作っていきます。そのうちに川原の畑も肥沃になってくれるでしょう。何十年とかかることでしょうか。それでも子どもたちが耕す頃には……と思つてます。父さんには生活費が皆無になつてしまつた分、ガソリンスタンドで働いてもらつてます。百姓がガソリンスタンド働きか、つて残念がるのですが、今は致し方ありません……」。一人反対している農民は固く唇をかみしめてうつむいた。眼にはいっぱい涙が溢れていた。

この頃太陽がおかしく見える。朝市で見る太陽は渋つた天に朱色にほつかりと浮いている。「あや、はあ、こんたお日さま拝んだごどね。今年は凶作なのだべ」つて、朝市へリ

ヤカーや乳母車を引いて野菜売りに来てゐる八十近い老婆たちが言つてゐる。朝市からもどると間もなく市家さんが小脇にノートをかかえてにこにこしながら車から降りて来た。

「は、農協ど闘うすかねえ。今、署名とつて歩いた帰りだのす。市家さんが農耕地を拡大する時、農協から数年前に借入した金を、すぐさま返済出来なかつたら、農耕地全部取上げる、というのだ。保証人五人は一人ずつ農協に呼び出され、「早く市家の農地を始末させろ。そうすればお前たちは楽になれる」と言われる。四百戸ほどある村で借金の始末のために数十戸村から消えた。親しい者たちも五人も村を出てしまつた。「俺、保証人さ、何すて農協の言いなりになるのよ。農協は前例どおりにやれつて言うども、俺は前例どおりにして農地を失う気などない。借金は別の方法で返すよ、つて言つてやつた。おめだちは、今は俺のごどだと思つてるごつたども、明日は我が身なのだ。なんとか頑張つて百姓続げていけるようにしねば」。

市家さんはノートを示して、農協に耕地を取り上げられないように署名を集めると言つた。「まだまだこつたになつても一揆は起きね。兼業でも食えるがらな。兼々業なんて、すつただもの、百姓だつて言えるつてが。この件が落ついだら俺は化学肥料だの農薬、除草剤ひとつも使わね農業やつて見せる。この頃のテレビ何がつていえば食う」ことだものなす。

それに料理法だのって、そつたなごどばり。こつたに土が汚なぐなつた世の中これがら人はどうやって生きてぐもんだが。海だつて水が汚れるの原因の半分は合成洗剤だずでねすか。それでも人は洗たくするだしな。魚も今に食えなくなるの解つていでもなす。それをやるのは人間だもの。俺ら百姓をぶつつぶすのもまた人間の偉い人だちだ。食糧を作る人間どもを滅ぼしていぐのだ。人が人を滅ぼし地球も滅ぼしてぐ今の状態をこのまんまにしておいでよいもんだが。俺は死にたくもないし、滅ぼされたぐもねがら頑張る」。

農民の生きた歴史は厳しく辛酸だった。だが、日本の農業の構造はぶ厚く相当しつかりしたものだった。そこには循環と還元の世界が絶えずあつて根本のところでは生命の再生への働きかけがずつしりと重くあつた。

日本の農業が、敗戦国とは言えアメリカ型農業一辺倒へ走らざるを得なかつた理由は大きく政治的なものもあるにせよ、日本の風土と土壌に培われてきた日本農業の循環と還元の断ち切られる世界となり果てて、そこからは金以外のものは何も生れてこない——その金すら満足に得られない——農業になつてしまつた。今それを必死で子どもたちへバトンタッチしようとしている。農業への拒否、女たちが農家の嫁になることへの拒否。その延長線上に結婚への拒否が静かに農家にだけでなく広まっていくなぜなのだろう？

人間の最大の喜びと幸せであるいのちを育むすが、ますます困難な状況になつていく。伍郎ちゃんたちの農民の日常は、決してふくらむような生命育みの状態ではない。生命を産み出した水と大地を、人間たちはまるで目の敵のように死に絶えさせようとしている。大地を息絶えさせて水耕栽培とかの技術を駆使してみたところで、そこにあるのはおびただしい化学薬品に支えられた作物である。

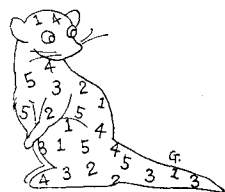
「これいだけたいけれど……」、老婦人は生々とした青菜を手にするが諦めたようにそつと置く。「今の人達と暮らすには食事が違いますもの……」。こんな会話もある。「今日は卵は何ケースあるの、大根は？　じゃがいもは？　みんなちようだいっ。子どもたちがとつても野菜を食べるようになつたのよ。ありがと」「これどうやって食べるの……おばあちゃんに料理してやりたい」「大根の葉っぱもぎとつてちようだい。いらない」「あら、それじゃ私に下さい。みんな。これ栄養があつてとつてもおいしんだから……」。

日本農業は窒息死寸前、でも一脈の蘇生の道を求めて、化学肥料、除草剤、農薬を使用していない作物を手渡しに、午前四時からの朝市へ。左の窓高く月を仰ぎ見ながら、きらめく暁の明星に気持ちを洗われながら、温かい味噌つけおにぎりを膝に今日も急ぐ。

(いちじょう　ふみ・生き残り北方農業実践研究所)

スパゲティと放射能

西村良平



テーブルの上におかれたスパゲティの袋。これをめぐつて、カミさんと言い争いになってしまいました。

「なんで、こんなもの、買ってきたんだ」

「だって、安かったんだから。あなたが食べなくなつて、子どもたちはドンドン食べるわよ。それ以上、太りたくないなら、食べなくていいのよ」

「太るなんていつてない。放射能のことをいつてるんだ。チエルノブイリ原発の放射能がスパゲティに入っているんだ」

「じゃあ、どうしろつていうの。このスパゲティ、お店に返すの。それとも、捨てるの。もう、勝手にしてよ」

さて、どうしよう。私はスパゲティの袋を見つめました。

その一 お店に返す。そのときは、「放射能汚染だ、安全性だ」と説明が必要だ。店員が「放射能だっていう証拠はある

んですか」と逆襲してきたらどうしよう。返品できたとしても、また、大安売りの棚におかれて、買っていく人がいる。

その二 捨てる。じつは、私は戦後の飢えの時代に都会で育っているのを食べものを捨てられない人間なのだ。

その三 ネコのごはんにする。食い意地のはったネコのタマに食べさせる。でも、これを察知したタマが、いや、娘がネコの代理として、大ゲンカを売ってくるにちがいない。

その四 私が食べる。このスパゲティだって、食べられるんだと思ひ直してみる。おなじものを、みんなが安売りで買つて、食べている。それに、いままですって、私たちは、放射能を食べたり、飲んだりしてきている。チエルノブイリ原発の事故のあと、日本にも、死の灰は降ってきた。政府が「安全」といつていた野菜も、牛乳も、事故があつた原発の周辺

ほどではないにしても、しっかり、放射能で汚染されていたことがあとからでたデータでわかった。でも、放射能はどんなにわずかでも、たまたま、なにかのかげんでガンの原因になる可能性は、もっているというから気になる。

■スパゲティの放射能汚染を知るには

では、このスパゲティ、ほんとうに汚染されているのでしょうか。輸入食品の安全性をテーマにした港の倉庫と検査所の見学会に参加しました。東京・品川のお頭にある大きな倉庫のなかには、イタリアからのスパゲティが入った大きなダンボールがいくつも積みあげられ、そのうちの数個が開けられて、「収去済・東京検査所」という紙がはられていました。「厚生省の規制がはじまったのは、⁸⁶年十一月からです」

厚生省の検査所の担当者が説明してくれました。チェルノブイリ原発事故がおきたのは⁸⁶年四月ですから、検査の開始は、その約半年後だったのです。

「輸入されてくる食品の検査は全量ではなく、ヨーロッパからのものを中心に抜き取り検査をして、厚生省の決めた値を超える放射能が見つかったものは、積みもどしにしています。そのあとは、それとおなじ品目でヨーロッパからのものは、すべてが検査対象食品に。そして、を送りだした国からのもので高い汚染が考えられる食品も、すべて、検査対象に

するようなかたちです」

これまで、ハーゼルナッツ・アーモンドといったナッツ類、月桂樹葉・セージ葉・タイムといったスパイス類、ハーブ茶、さらには、牛の胃、トナカイの肉などから厚生省が決めた値を超える放射能が出たと発表されています。

「スパゲティは全部、検査しているのですか」

と見学者から質問が出ました。

「イタリアからのアーモンドに基準を超える放射能があることがわかって、イタリアが検査対象の地域になったのです。そこからのものは、すべて検査されることになりました。イタリアからのスパゲティは、すべて検査対象です」

厚生省は、食品１キロあたりの放射性物質（セシウム）が370ベクレルという暫定基準値を超えたものにかぎって発表してきました。スパゲティのように、それ以下のものでも、検査はしているのですが、厚生省は「放射能の数字だけが出ると、その食品がすべてあぶないと思われるから」と、これまで、公表に慎重でした。それでも、ようやく、なんらかの形で、公表に踏み切るとはいつています。

じつは、このスパゲティの汚染のデータは、すでに、国内の研究者や市民団体が独自に測定をして、発表してきています。いくつか品名を紹介しますと（セシウム・ベクレル/kg）

デュアル・パスタ 60／ブイトーニ 49／58／デルヴェル

デ 26／デルフィーノ 22／ペズロ 60／スピガドル 44

52／コープ 34／リカルディ 28 127

——一九八七年、京都大学、荻野氏・河野氏による

ブイトーニ 46／バリラ 55／リカルディ 27／レンジ

29／デルヴェルデ 57

——一九八七年、放射能汚染食品測定室による

■スパゲティはどこからきたのか

スパゲティはイタリアだけからくるのでしょうか。『日本貿易月表』（日本関税協会）によると、輸入量の順で、イタリア、アメリカ、トルコ、ベルギー、イギリス、カナダ、アイルランド、フランス、スウェーデン、西ドイツ、オーストリアからきていますが、その九割以上がイタリア産です。

では、国産はというと、純粋に国産のものはないのです。国内のメーカーは、輸入されたデュラム小麦を原料に使っているのです。これを粉にしたのが、強力粉より、さらに、粘りがでる「超」強力粉。日本では、生産されていません。

以前、日本では、パンに使う強力粉を使ったり混ぜたりしたウドンとスパゲティの中間のようなものが「スパゲティ」といわれていました。ところが、「オシヤレで人気」のイタリア料理店やスパゲティ専門店で、シャキッと歯ごたえのいいデュラム小麦百パーセントの本場イタリア産のスパゲティ

がでるようになると、国内メーカーもそれに対抗して、本場タイプの原料に切り替えていきました。そして、いまでは「和風スパゲティ」に使われるもの以外は、ほとんどがデュラム小麦だけが原料の本場タイプになったといえます。

では、国内製造のスパゲティ用のデュラム小麦はどこからきているのでしょうか。『日本貿易月表』を見ると、アメリカ、カナダから輸入されていて、イタリアはじめ、ヨーロッパからはきていません。『世界の食べもの』（朝日新聞社）を読むと、アメリカのデュラム小麦の栽培は、イタリアから渡った移民がアメリカとイタリアとの戦争で、スパゲティを本国から輸入できなくなったことをきっかけに盛んになり、世界有数の生産・輸出国になったことがわかります。

いま、食べものを考えるときにキーワードには「安全性」や「国際化」があると思います。少し、レベルはちがうかも知れませんが、「ほんもの」というものもあるのでしょうか。スパゲティは、原料から加工まで本場でつくられた「ほんもの」が原発事故の放射能で汚染されたのです。

日本でも、放射能による汚染がとくに問題となるのは、ビニールハウスではなく、露地でつくられた野菜、輸入の穀物飼料だけではなく、牧草も食べていた牛のミルクでした。「ほんもの」のよさによりやけ気がつき、それを大事にしようというときに、チェルノブイリ原発事故はおきたのです。

そして、私たちが望む「ほんもの」ほど、原発事故の被害を受けたといえるでしょう。

世界には、原発が四百十もあるのです。建設中、そして、計画が進んでいるものを合わせると六百四十一。スパゲティの国、イタリアでは、'87年十一月に国民投票で原発に「ノー」を表明し、国内の原発を順次とめていくといえます。

しばらく忘れていた「あのスパゲティ」のことを思い出しました。カミさんをつかまえて、

「あれ、どうした。スパゲティ。放射能が入っているんじゃないかっていった」

「たしか、戸棚に入れたはずですよ」

あちこち戸棚を開けて捜しましたが、出てきません。わが家のブラックホールがのびこんでしまったのでしょうか。いずれ思いがけないときに、どこからかでてくるのでしょうか。「あのスパゲティ」をどうするか。そう簡単に答えをだせそうにもありませんが、もつと自分たちの食べているものについて知ることから原発をどうするかを考えていけるのではないのでしょうか。

(にしむらりようへい・わたらい茶から放射能汚染の問題を考える会・会員)



編集室からあなたに

◆原稿募集

12月号“マスコミと文化の変容”1月号“くらしの論理を創る”2・3月号“上すべりの国際化”に、あなたのご発言をお寄せ下さい。2000字程度、メ切りは12月号なら9月末日というように3か月前の月末にします。あなたの方のWeに、あなたのご意見をぜひ反映させて下さい。ハガキも歓迎します。載せてほしくない時は“私信”とお書き添え下さい。

◆「Weの会」について

「Weの会」は、雑誌Weとともに歩む読者の方たちの会です。Weの読者がイコール「Weの会」会員ではありません。Weの会便り(年間12回)のコピー・郵送料として1200円、切手でお払い下さればOKです。春の公開ゼミナール、夏のフォーラム、秋のつどいなどをウイ書房と共催で開いてきました。今年は関西のWe

の会の方が大活躍でした。分科会“わたしの言いたいこと—在日朝鮮人として、女として—”の黄貞順さんの話をテープおこして冊子にしたい、との意見が出ています。このような企てがWeの会から生まれることを、今後も期待しています。「Weの会」がもっと活性化するためにトコトン話し合う時を持ちたいと思います。遠方の方は、ぜひご意見をお寄せ下さい。

◆来年のフォーラムは熊本・阿蘇で!

能勢のフォーラムの最後に、「来年は阿蘇で、今から預金しておいて下さい」の声があがり、帰熊後桑畑さん・立山さんが下見に行かれて、阿蘇かんぼ保養センターに、仮予約をして下さいました。細かい費用の計算などもすでに届いて、火の国の女の情熱を感じます。テーマ、開きたい分科会、運営方法など、あなたのアイデアを待っています。フォーラムは、お客さんでなく、運営にかかわってこそ楽しい—これは実行委員の方の実感です。

いのちをいとおしむ「食」を

中 沢 孝 江



私は、神奈川県公立中学校から、肢体不自由児たちの養護学校に転勤し、そして勉強めいたものがしなくなりました。昨秋、一念発起して横浜国立大学の大学院、家庭科教育専攻を受験し、なんとか合格しました。

神奈川県には、現職の教員を大学院に身分保障して通わせてくれる制度があるのですが、残念ながらそれに当たらず、考えた末、思い切って退職し、この春から学生になっております。十月号のテーマを見て心が動き、手が動き、文をまとめました。私のくらしの中でとらえた「食と環境といのち」です。

「オレ、朝からカップラーメン一杯しか食っていねえんだ」土曜の放課後、校門のそばですれ違った中学生の会話だ。昼

食時に、「先生、カップめん持ってくるからお湯くれない？」などと、真顔で聞く生徒もいる。彼らのお弁当のおかずは、ウインナーソーセージ、冷凍食品のフライ、それに卵焼きが中心だ。もつとも、職員も学期末に成績つけ等で夜遅くまで残って仕事をしていると、職員室のどこから、プーンとインスタントめんのいい匂いが漂ってくる。

食物Ⅱで食品添加物のところをいつも力説するのだが、なかなかすぐには生徒の実生活に反映されない。ともすると、「先生、そんなことしたら会社がつぶれてしまつて、お父さんが働けなくなるじゃない」と非難めいた表情をする。あるとき、一人の生徒が「うちは、先生の言うとおりの食生活をしていきます。特にお父さんがインスタントものを嫌がつて、何でもちゃんと作るの」と言う。父親の職業を聞くと、産婦

人科医だった。「奇形児が驚くほど生まれている」そうだ。

私が食品公害についてアレコレ話をすると、「先生の言うことを聞いていると、食べるものなくなっちゃう」と生徒たちは言う。そして、「先生は何を食べてるの?」とくる。私とて、厳密に守り通しているわけではないが、できるだけ気をつけてはいるのよと言いながら、持参の玄米弁当を見せる。「エーツ、なにコレ」「へんな色」とびっくりした顔をしている。お弁当箱を見せながら教室を一周すると、生徒のアキレ顔が、ニコニコに変わってくる。苦笑しているのだ。しかし、そのうち、「コーヒーを飲むとき、パウダークリームは乳脂肪のと植物性のとどちらがよいのか」とか、「生レバーは食べないほうがいいと言ったけど、どうしてかもっと詳しく聞いてくるように、お母さんが言っているのだけだ」とか言いながらやってくる。家庭で話題になっているらしい。

夏休みにカルチャーセンターで、薬草の話を聞いてきた。校庭の土手に生えているドクダミやヨモギを、準備室にぶら下げて干していると、清掃にやってきた生徒がそれを見つけて、魔女工房のようだと言って笑う。しばらくして、その笑った生徒がアマチャズルを持ってきた。家の所有地に生えていて、お母さんが凝っているという。私のことを話したらし

く、乾燥したものをたくさん持ってきてくれた。買えばたいへんな金額だ。その母親は、かなりのめりこんでいるように、説明の本まで貸してくれた。さっそく職員室のストープで煎じて飲むと、青臭さの中にちよっぴり甘い味があった。以来、職員室で薬草ブームが起きた。

こんなに科学や医学が進歩していても、生命のしくみについては、まだ完全にはわかっていない。生命は可能な限り生き続けようとする底力のようなものを持っているように思う。私たちは、本来は体にとってよいものとよくないものとを、嗅ぎ分ける本能のようなものをもっているのではないだろうか。それが、ストレスの多い現代社会の中で麻痺させられてしまっているにちがいないと思うのだ。

生徒の親の中に、無農薬野菜の農法に切り替えた人がいた。その野菜はすべて、食生活を考える市民運動のグループに頒けられることになっているのだが、先生方も是非にと言ってくれたので、職員の中で希望者を募り、仲間に入れてもらうことにした。週一回、無農薬・有機栽培の野菜が、どろつきのまま配達される。形はよくないがどれをとってもおいしい。特にプリンスメロンは最高だった。そしてまた、にんじんのおいしいこと。生のまま噛みしめると甘味がジーンと口の中に伝わり、これぞ土の味。にんじんごときに感激した

りして笑われてしまうが、本当なのだ。誰れかがテレビで、「私の健康法は、毎朝、りんごにんじんの生ジュースを飲むことです」と言っていたが、これで作ったら、もっとおいしいにちがいない。売っているにんじんは、妙に太っていて、水っぽくって、不自然だ。なんとなく、人間もそれに似てきている。

畑を見にきてくださいというので、連れ立って行ってみた。キャベツ畑だった。大きなキャベツがパリツとなっていてるものと思つて足を踏み入れて驚いた。畑にレースが敷いてあるのだ。キャベツの葉のレース。青虫に葉をすっかり食べられて葉脈だけ残り、レースになってしまっているのだった。おいしいものは虫も好むというわけだ。キャベツ畑は、青虫とチョウチョの樂園になっていた。「近所の畑の持ち主から文句が出るのですよ。虫が寄つてくるといつて」とがっかりしながらも、「私たちは農業のプロですから、土がなじむまではしかたないし、また、虫が出にくいようにレタスを近くに植える方法をこの次は考えているんです」と笑いなから言つた。とはいえ、昔からの農家ばかりの地域の中にあつて、ただ一軒だけそういう農業を続ける努力はたいへんなものであらう。

その後私は転勤した。野菜を頒けてもらえなくなるのは心残りだったのだが。

しかし求めれば得られるもので、ショッピング新聞の一隅に、「主婦たちが自立のために始めたレストラン」の記事をみつけた。玄米定食を売りものになっている。新しい職場の近くだったので、さっそく行つてみることにした。以前は喫茶店だった様子で、小じんまりした店内に、三、四人の主婦たちが切り盛りしていた。はじめのうちは野菜も有機栽培のもので使っていたそうだが、それでは商売として成り立たなかつたと言つていた。しかし、その紹介で近くに自然食品のお店があることを知つた。学期はじめと学期末は給食がなくなる。そこで、職場で募つて主婦たちのお店から、お弁当を出前してもらうことにした。白米もあるが、だんだん玄米組が増えてきて、この頃は注文の半数が玄米だ。転勤してきた男性教師が、「我が家は玄米なんです。白米ではもの足りなくなりました」と言っている。

毎週土曜の午後、八王子の近くへ行く用事ができた。手みやげにケーキを買つてバスを待っていると、「無添加パンの店」という看板が目に入った。時間があつたので寄つてみると、おばさんが、私が目にするパンを片端から説明してくれる。「ブドウパンは食パンより砂糖が多く入っています」「フランスパンは、ほとんど砂糖が入っていません」「ソフトフランスパンは、やわらかくするために牛脂を入れているのですよ」「ウチのサラダパンは、ポテトサラダを入れてから焼

いています。そうしないと防腐剤を入れなければなりませんから」。…………そのうち、私がケーキを持っていることに気づくと、「ウチのケーキも食べてみて下さい。乳化剤は使っていないですよ。宣伝したいからどうぞ」と言って、おいしいそうなケーキを二個も箱に詰めてくれた。その後、たびたびお店に寄ってパンを買うのだが、いつもていねいに説明してくれる。そして誰れにでもそうしているらしく、私の顔を覚えていた様子はない。おばさんの話によると、子供のPTAの講演会で添加物の話があったらしい。それで今まで作っていたパンに疑問をもつようになり、本当に体によいパンづくりを考えるようになったそうだ。看板を見れば、その心意気がわかる。「ウチは、きょう売ってしまうだけのパンしか焼きません」。いつものことばで終わる。

「ヘルシー」ということばが、この頃流行語のようになっていたが、田舎（失礼）で、こんなふうに頑固なままでによしとするものを作っている人を見ると、本当にうれしくなる。これこそ本物のヘルシーだ。先日、山形へ出かけた折、通りすがりの露店で買った稲花もちとクルミゆべしがおいしかった。老舗で求めたものでもないのにと、山形出身の友人に話すと、「もち米が地のもので、添加物も入っていないからでしょう」ということだった。

食は人の生命にかかわることだから、そう急激な変化はないものなどと言っていられない。この一年ごとの変化はたいへんなものである。食べものが、すっかりファッション化されているのだから。○○○アイスクリームがナウイのよというので誘われてついに行ったが、私にはちっともおもしろなかった。

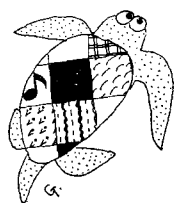
私の愛好するお店たちは、この頃少しずつだがお客が増えてきている。体によいものは、おいしいのだ。体が一番よく知っている。口コミで、ひとりまたひとりと知られていっているのだろう。小さいけれども、点と点は確かにふくらんでいっていると感じているのだが。

（なかざわ たかえ・大学院生）

「田舎文化」に誇りを持つ

四季折々の生活に豊かさを感じて

田村より子



私の生まれ育った所は山形からさらに北、あと僅かで秋田県になるうとする県北端です。東北の屋根と県境に連なる山の間に沈む片田舎にも、都市化の波が押し寄せて、食べる物も着る物もすべて都会とさほど変わらない生活をしていきます。固有の生活文化を持ち得た時代が去り、今や全国の隅々まで画一化された「豊かさ」で埋め尽くされてしまったかと思えます。

私が小学生だった頃、「田舎っぺ」は差別的な言葉、私にとっては屈辱と受け取られる言葉でした。「ズーズー弁」は恥ずかしい言葉なので共通語で話さないと教えられ、全校生が共通語を話す学校が県の模範校として褒めたたえられました。そのお陰で労なくして都会に溶け込み、学生生活をエンジョイできた私にとっては、「なまりがないね」が褒め言

言葉として聞こえ、卒業後故郷に帰り教壇に立った時、ひどくなまっている先輩諸氏を横目に、模範的言葉での授業を誇りとしたものでした。

夜は襲いかかるような暗黒の闇、その静けさは不気味で、ネオンが恋しく思えました。学生時代住んでいた梅ヶ丘から夕方新宿の方を見ると、重なる屋根の上に重くのしかかる空が、赤黄緑紫と不気味な層になり、黄金バットが「アハハハ」とマントを翻して現れそうな気がしました。その度に、赤トンボが夕映えに輝く故郷の空を思い感傷に浸ったものでした。が、その夕日も山の彼方に落ちてしまうと、とつぷりと暮れた森や林はやはり寂しく、あの黄金バットの空が懐しくなりました。「ないものねだり」とはよく言ったもので、勝手なものですね。

ともあれ、こうして、東京かぶれの私は、農業高校の分校の生活科の担任として教壇に立ちました。しかし大学で学んだピカピカの教育論をかざし、熱弁をふるっていても、現実を見ようとしない新米教師には生徒の心はつかめませんでした。借り物のブロックで積み上げた教育論や思い上がり、生徒たちの手を借りて崩す作業を一年間必死でやっていたことになりました。

そして二年目。ワラビ採り、田植え、きのこ採り、芋掘りや稲刈りと、生徒たちと額に汗して労働する中で、「川さざっこ（小魚）へめ（つかまえ）うぐべ」「うぐうぐ」と、私の言葉はすっかりズーズー弁になっていました。そこには、ネオンが恋しい私ではなく、生徒と一緒に堆肥をかつぎ、裏の川で鰯取りに興じる「おつちよこちよいで、面倒みきれない先生」がいたのです。生徒たちの姿が少しずつ見えてきた頃、家庭訪問の時ご馳走になった煮物や漬物の味に魅せられ、郷土料理を見直すきっかけを得ました。また、山菜採りやきのこ採りは「昔取った杵柄」で、私の方から誘っていました。「よし、こうなったら田舎のよさをいっぱい見付けて、まだ気付いていない人たちに気付いてもらおう」と、夢をふくらませました。

もう一つ、食を見直すきっかけは、私称「必殺遊び人」の夫との出会いでした。春は山菜、夏は鮎、秋はきのこ採り、

そして冬にはスキーと、北国、山国の生活を大いに楽しみまくっている様子は、正に必殺としか言いようがありません。さらにまた、夫の父母ときたら夫に輪をかけた山好き川好きで、四季折折の行事や食べ物を大切にしている人たちでした。こうした出会いが、山の暮らし、川の暮らし、雪の暮らしを見直すきっかけとなりました。そんな夫との出会いは、すてきというより吹き出したくなる話ばかりで、皆さんを喜ばせること受け合いますが、書かずにはしまっておくことにします。子供たちだけには優しくそつとドアを開けておこうと思うのですが、「お母さん、そつとではなくって無理矢理引っ張り込むでしょ」と美紀（長女）には怒鳴られそうです。

年頃になったのか、夫が出張で留守の時、子供たちは二人の馴れ初めをしきりに聞きたがります。そんな時はうんとスパイスを振りかけて話をします。そして、それは必ずといってよいほど「お父さんとお母さんが、こんな子が欲しいな、と思っていた子が生まれてよかったわ」と、三人の頭をなでてやることで終わります。共稼ぎで忙しい母と子の貴重な時間です。

いつも九時過ぎまではしゃいでいる子供たちが、今日はいやに静かです。歯磨きをテキパキとすませて、寝る準備の早いこと。「ムム」殺気を感じる間もなく、「お母さんお願い」、猫なで声呼びます。こずえ（二女）の声です。三人

はもうちゃんと寝る位置も決めているらしく、いたって平靜。これは、「お母さんの子供の頃の事を話して」の儀式なのです。同じ話を何度も何度もアンコールします。子供たちには方言で話すのですが、ここではほんやくしてお伝えしましょう。

〈稲刈り〉

すすき野に赤とんぼが乱舞する頃、稲穂の匂いが懐しくももの悲しく胸を突く。お母さん（私）はそんな秋が大好きでした。遠田の稲を刈ると、そこから家の小屋までリヤカーで運んでこなければなりません。山あいの沢田ですから田んぼは段段になっており、下の田で刈った稲は背負ってリヤカーのある道まで運びます。ニャンニャンいちゃんとニャンニャンあちゃん（猫がいたので子供たちは私の父母をこう呼びます）は、山のように背負ったけれども、お母さんは小さかったから、短いニンナ（荷縄）で小さい稲束をしよわせてもらって、何十回も坂を往復しました。途中に川があつて、そこに一本橋がかかっていた。橋の下は恐ろしいうず巻きなので、必死の思いで「えいっ」とひと思いにかけ渡ったものでした。だから、その橋の上でイナゴとはち合わせした時は、背筋が凍る思いでした。坂の途中でヘビを踏みそうになったり、前から欲しいと思っていたクロアゲハが目の前を飛

びかい、背中の荷をうらめしく思ったこともありました。

そんな辛い仕事も一服（おやつ）があるからこそ我慢もできるといふものです。一服には決まってるんごとふくれこいり（かき餅せんべい）が出ます。今でこそ「なんだ」と思いますが、当時は何よりの馳走でした。甘酢っぱい味と青くさい香りが口一杯に広がり、本当に「うまい」と思いました。さらに、大きなごま塩のおにぎりときゅうりの一本漬を手にかけて食べる昼食は最高に幸せ気分でした。

もう一つの楽しみは、夕日を背にリヤカーのてっぺんに乗れることです。父に押してもらいよじ登ると、巨人になって世界征服でもしたような気がして、「えへん」といばつてみたりしました。そして、父が引き母が押す、そんな父母のむつまじい姿がうれしくて、道がもともとと長ければよいのにと思いました。秋は稲の香と夕日と赤とんぼなしには語れません。

〈林〉

一人っ子のお母さんが「ただいま」と学校から帰ると、「もうー」と牛が迎ええてくれます。昔の農家は玄関の脇にマヤ（牛や馬屋）があつて、いつも決まってそう答えてくれるのです。そして、カバンを置くとすぐに裏山のシャバヤシ（平林）にかけていきました。今朝にまばらだったカノカ（ス

ギヒラタケ」が昼休み頃には真白く見え、学校が終わる頃には杉の根っ子一杯になったカノカが目には浮かんで、落ち付いて勉強もできませんでした。そして、シャバヤシに向かって走っている頃にはハギゴ（入れもの）に入りきれないほどのものとなり胸がドキドキしました。すると、林が「来るな、来るな」とぎわめいてきます。風も心なしかはむかつて吹いてくるのではないですか。あれほどのものを誰かに取られてでもしたらと思うと、「急げ、急げ」と心がせきます。

でも、林に入り、杉の切り株を見ると、雨が少なくともちよつと時期が早すぎたのか、カノカは申しわけ程度にへばりついているだけでした。その時、突然背後から「バーカ」という声が聞こえたのです。大きな栗の木と、その後ろに広がる杉の林の声でした。裏切られた心の傷は深く、それから暫くは絶交を切りました。でも、あの白く美しいカノカの姿が目にはちたつきだすと、またハギゴを下げてでかけてしまうのです。今度は同じ失敗を繰り返さないために、ゆっくり林の全景を眺め、あぜ道の草や花に愛想笑いをしながら進みます。すると、あれほどまでに拒否していた林から優しい風が吹き、容易に林に入ることができました。

生い茂った草むらに見えかくれする白い切り株、こっちの株、あっちの株、カノカの貝がらのような白い花卉が幾重にも重なり合つて見えるではありませんか。その森の精のよう

な気高さ。「持ち帰れば、ばあちゃん喜ぶべな」とせつせとその花卉をむしり取っていました。

カノカは油揚げやシラタキと一緒に油炒めして食べるとおいしく、家族の「これはうまい。よく取ってきたな」の声で大満足です。そして、残してきた小さいカノカをいつ取りに行こうかと考え、誰かに取られはしまいかと、また心配しだすのでした。

シャバヤシは小さい頃、お母さんの遊び場でした。きのこ採りや栗拾いだけではなく、おもしろい形の木がたくさんあるからです。こんもりした林の間に木漏れ日が差し、ちよつとした雲の動きで微妙に陰影が変化します。あたかも、林の魔王が動めいているかのようで、恐ろしくて震えあがつてしましますが、かと言って逃げ出すわけにもいきません。だつてせつかくの冒険のスリルを逃してしまからです。

栗林の奥は深々と杉林が広がり、倒木や切り株が面白い格好で眠っています。数十年もたつ切り株は苔むし、老人が腰を掛けている姿に似ています。そこで「おじん杉」と名付け、隣の三木股になっている「タコ助」と一緒にいろんな話をしました。あっちの木、こっちの木にかわいい名前や滑稽な名前を付けて遊ぶと、不思議にも林の恐怖心がとれて楽しい遊び場に変身してしまうのです。こうして時を忘れて遊んでいると、ザワザワと夕方の荒々しい風が吹き、林の魔王

が牙をむき出して襲いかかります。身震いして一目散にかけ出すのですが、林の道は長く、周りの草まで反逆して足をとります。林は、切り立つ山の美景や冷たさとは違って、平凡ですが、人を包み込む優しさを持ち、子供たちを恐怖心でいっぱいにしたり、スリルで心を魅了するのです。

〈春近き雪溶けの頃〉

一年の半分は雪の中の生活なので、子供たちは三月の声を聞くと威勢良く外にかけ出します。雪が時折り雨に変わり、どつさり積もった雪がぺっちゃんこになると、よく晴れた日の早朝は固雪渡りができるのです。朝日が昇って柔くなる前に、低い山からあつちの高い山へと自由に雪の上を歩き回ると、雪山の下で恨めしく見上げていた惨めさから一転して山の征服者になった気分です。山の頂上に立つ頃、澄み切った空気を突いて東の空に太陽が昇ります。堅く凍った雪の面がキラキラと虹色に光り、雪の精が舞っているかのようです。そんな山の上から起伏を見定めて一気に滑り降ります。滑ると言ってもソリでは危ないので、登る途中で折った杉の枝を尻に敷いて滑るのです。尻も痛くなく、ちよūdい速さなのです。こぶる御機嫌です。友達と競争が始まると、ジャンプして転んだり、横に逸れるので、あっちこちの山から子供たちの笑い声がこだまします。長く厳しい冬に耐えたご褒美

に、雪がくれた特上の遊びでした。

温かい日射しに雪が割れ、土が顔を出すと、その中に柔かい緑色の芽が吹き出て、思わず「こんにちは」と声を掛けそうになります。そして次第に黒い土が増えてくると、その緑の中に、子供たちは競ってヒロコ（アサズキ）やフキノトウを捜すのです。

雪は大地を覆い、草も虫も生き物すべてを優しく包んで、寒さからその命を守ってくれます。そして春、チヨロチヨロ流れ出た雪溶け水は、清らかに大地を流れ、土も草も「生きているんだな」と思う、そんな優しい気持ちにしてくれます。

人間が自然と豊かにかかわりながら暮らしていた、その暮らしの延長上に今の生活があることを、昔話という形を借りて理解させたいと思うのです。

私たちは今、「飽食の時代」と呼ばれるほど、一見豊かな食環境の中で暮らしています。食事形態や味覚が画一化され、嗜好本位の食事による健康破壊や食品添加物・農薬の安全性など、多くの問題を抱えています。家族そろって朝餉夕餉の食卓を囲むという、かつてはごく当たり前だった習慣がくずれました。家族バラバラな食事は、豊かさの中の貧困とも言える状況です。そうした中で、物のなかった時代と同じくらの栄養失調者と、欧米諸国に多く見られた糖尿

病、高血圧症、動脈硬化等の成人病が確実に増えています。そして、次の世代を担う子供たちの健康までむしばまれていく現実を見ると、改めて、「豊かさとは何か」を考えざるを得ません。

私はここ数年、高度経済成長のもたらした量的な豊かさの中で見失った「人間としての豊かな食卓」を、最上の風土に根ざした食文化の中から捜してみたいと思い、その研究に取り組んできました。しかし、そこで突き当たることは、食生活のみで論じてても、問題の解決にはつながらないということでした。漬物や煮物はダサイ田舎の食べ物、パンにコーヒ、ハンバーグにスパゲティはナウく格好良い食事と思っている若者も増えています。こうした若者や子供たちに郷土食や田舎のよさを語ってみても、なかなか心には届きません。

しかし、私は新幹線も高速道路もなく、大企業誘致が来ず人口密度が低くとも、自分たちの先人が残した生活文化の知恵を学び、田舎は田舎なりの生活文化を作り上げることができないのではないかと思うのです。資本におしつぶされない「本当の豊かさ」を作りたいのです。豊かな食卓は、そうした田舎文化の見直し、立て直しの中でこそ実現するのではないのでしょうか。

今、食物が食品ではなく本物の食べ物であった時代のこと

を話すと、子供たちには小言として受け取られがちです。だから、私は人間が童心にもどり、一番素直でいられる夜の闇の中で「昔話」として話しかけます。そして、日曜日はかつて遊び場であった林の中に、村中の子供たちを集めて連れてゆきます。自分たちが生まれ育った自然、歴史、文化のすべてを認め、そこに価値を見い出してこそ、今ある生活のよさも問題も見えてくるのだと思うからです。新しいものを取り入れながらも、食生活の商品化の波にのみ込まれずに、土地でとれたものを土地に合った食べ方を工夫しながら、豊かに食生活を営む力を次の世代に育てることは、今を生きる私たち大人の責任ではないのでしょうか。私は今、四季の移り変わりの中で、自然の美しさと自然の恵みに感謝しながら、四季折々の生活を楽しんでいます。

(たむら よりこ・山形県立新庄南高等学校)

発言



われら百姓一年生

仁ノ平尚子
村松通久

尚子―六年間の小学校教員、通久―十三年間のサラリーマン生活に終止符を打ち、今春五月、無農薬有機農業を始めた、長野県佐久にまいりました。現在は、実習中で、来春より独立の予定。約三カ月たった今、これまでとこれからを話し合ってみました。

くるまで

「私は、まず……くらしを変えたかった。とにかく、東京の空気や水はひどくて、毎日自分の体がむしばまれるようで」「そうだね。水は臭いし、味も変だし、外に出れば排気ガス、会社の中ではタバコ、生きるための基本的な自然環境が壊されていたね」

「それから、先生という仕事は楽しく充実していたけど、今の学校は、教師の主体性、自由を奪っていくし、その中で忙しさはむなしかった。そこから、逃げたんだろうけど」

「俺も、毎日二十坪ほどの会社の中で、一日のほとんどもをすごし、晴、雨、暑さ、寒さを感じなかったんだ。それはさみ

しいことだった。それに、会社だから、とにかくもうけなくちやいけない。それには、自分が売りたいくないものまで売らなきゃいけないこともあるし、分秒ささみで働かざるをえなかった。これでいいのかと思っただけ」

「そんな中で、自分たちの生活や働き方や環境のことを考えるをえなくなってきた、一番の生命の基本である食の問題へも関心が深まっていったのよね」

「うん、食品添加物のこととか、野菜や米がどういうふうに生産されるか気になってきたね」

「そこで、自然と共に生きる無農薬有機農業への思いがじわじわと心に広がってきたのね。この道に続く一人になりたいと思っただけ」

「ぐちっているだけでは、自分が情けなくなってきたんだ」

「私は、自分を変えたい、生き直したいという気持ちも強くあった。東京で土を、水を、生き物を知らずに、便利な時代に育ち、何か大切なものを落としてきたような気がずつとし

てたのね。失ったものを取りもどして、たくましく生きたい
と思ったなあ」

きてから

「初めは、とにかく疲れたなあ。急に五姉もやせて、夜はす
ぐにぐっすりだったし、朝はだるかったし」

「畑を歩くだけでも、ハアハアいつてたいへんだったね」

「堆肥まきが続いたから、有機農業ってこんなに力がいるも
のかと、まったく圧倒されたよ」

「だけど、ほんとうに小さな小さな種が作物になっていく過
程は、驚きであり、喜びであり、興奮してしまつたね」

「泥まみれ汗まみれになつても、背広にネクタイでスマー
トに働くよりも、ずっと自由で、働く喜びが実感できるなあ。
志を同じくする仲間との語り合いも楽しいね」

「だけど、農業や機械に頼つた近代農業を毎日目の前に見る
ことにもなつて、悲しくやりきれなくなるとなるね」

「朝は、となりのリンゴ園の消毒の音で目がさめるし、とな
りの畑の農薬散布のときは、走つて逃げたりして」

「合成洗剤で千曲川はよごれるし、ゴルフ場の開発ラッシュ
による環境破壊なども、こちらにきて痛感したね」

「田舎でも安心できないね。勉強や行動をしなくちゃね」

これから

「来年は、いよいよ独立。そろそろ準備しなくちゃ」

「借りる田畑も決まつてないのに、*“雷鳥ファーム”*なんて
いう命名だけしちゃつたね」

「雷鳥は、長野県の県鳥。ここ長野でやっていきたいと思
うからね。それと、平塚雷鳥さん。女や男の問題、生きること
をいろいろな人と考える場にしていきたいね」

「野菜やお米を、生き方と生き方のふれあいの中で、その間
をとりもつものとして考えたいよね、究極的にはね」

「だけど、体力をとんでも使うから、その差によって、二人の
間の分業が固定しがちなのは問題ね。私も、もう少し力をつ
けたいけど……」

「そのことを含めて、有機農業は、ほんとうにきびしいよ。
たいへんだとは聞いてたけど、あらためて痛感したね。はて
のない草むしり、五姉やせた堆肥まき、消費者との関係のむ
ずかしさ、経済的なきびしさ、力のない人は、とても大変な
こと、力の弱い女性が、どうしても雑事をし、男性に使われ
ているようにも感じ、やりがいを見いだせない問題。不安も
いっぱいだね。でも、やるだけやりたいな」

「一つの方向として、力に頼らない農法の研究が大切よね」

「うん、それから俺は、自然と人間、そして人と人との共生
を農業をつうじて学んでいきたいと思つてる」

「いろいろな人に、立ちよつてもらいたいね」

この亀井さんの映画作りは、それに共鳴した製作スタッフや支援者のカンパと無償労働に支えられて、三年の歳月をかけ『生物みなトモダチ・トリ・ムシ・サカナの子守歌』16m/m・カラー・2時間45分の長編記録映画となつて、一昨年暮実現しました。

「現代文明のさまざまな歪みと、それがどこからきたかというところ、それが映画の中心になるわけだ。人間以外の生物、例えばサケの生態を描きながら、生物一般の生きている目的を明らかにしてゆく……。それはどういうことかというところ、生物はすべて自然のなかに自然の一部として生きている。それは生命をリレーしていくかたちで自然のなかで生きている。現代文明というものは、人間が自然を破壊しながら人工の環境を作る方向に走ってきている。その不自然さが、もろもろの困った現象を引き起こしている。それを日常生活のなかから解明し、証言し、考えてゆこうとしているのがこの映画だ」。

この映画に描かれているどのシーンも、ごくありふれた日常性です。こんなことは何でもないだろう、ごくあたりまえのことだと思っているのが、実は、大変なことだと知らされたときのショック。私たちが日常のなかの「常識」として鵜呑みにしがちな考え方に、いまこそ疑問をもってみる必要を切々と語りかけてきます。

映画のラスト・シーンでは、恐竜の巨大な骨が泣きながら呼びかけます。

『人間よ！ 強くなりすぎてダメなんだ。大きくなりすぎてダメなんだ。よく見ておけ、このオレを！』。すべての生物との「競闘」ではなく「共存」を訴えます。

亀井さんは体調を崩しながらベッドで編集を仕上げましたが、完成後まもなく療養のかいなくこの世を去りました。享年78歳。まさに命をかけたメッセージとなりました。

この映画を見るに当たって、柳田国男の言を借りるなら、「水をふくんだ海綿ではだめだ」。現代の身についている一切の不要なものをすっきりして、ムダを取り除いてみてほしいと願います。

上映方法も産地直送の形を取り、地域の人たちのところへ直接持ち込んで上映したいと、亀井さんは言っていました。そして今、亀井さんの遺志が、全国各地で『生物みなトモダチ』の輪となつて広がっています。

(はせがわ けん・「生物みなトモダチ」製作委員会事務局)
＊映画についての問い合わせは左記をお願いします。

〒153 東京都目黒区青葉台3-18-10 カーサ青葉台706
日本ドキュメント・フィルム内
「生物みなトモダチ」製作委員会 ☎03-463-0950

発言

食物環境としての海

轡田邦夫



私の研究対象は、海洋内の物理現象（海流・波浪・津波等）の原理や法則を調べることであるので、我々の食生活の一翼を担う海洋生物の生態環境等の知識に関しては素人に近く、本企画の期待には充分お応えできないであろうことを、どうか予めご容赦願いたい。

私の研究分野の中で近年注目されている問題に、エル・ニーニョという現象がある。これは、最近日本のマスコミでもしばしば採り上げられているので、ああ、あれかと思われる方も少なくないと思う。エル・ニーニョ自体は、南米ペルー沖海域における海面付近の水温が、数年に一回、平年に比べて異常に高くなる現象をさしているが、付近の漁場異変や異常気象などを伴うにとどまらず、実をいうと我々の食生活にも影響を及ぼした経験がある。

昭和四七～四八年に日本で豆腐の値段が一時的に高騰したことがあったが、その原因はとりも直さずエル・ニーニョに端を発している。この過程は、「風と桶屋」の話に例えられ

ることがあるほどいささか複雑である。ペルー沖海域では、通常栄養分の富んだ深い所にある海水が湧き上がる（湧昇水という）ために、かたくちいわし（アンチヨビー）の好漁場となっているが、エル・ニーニョの発生した年には、この湧昇水の勢力が弱まるために、かたくちいわしの漁獲高が異常低下する。かたくちいわしは、我々の食料としても貴重であるが、この付近の海鳥の飼料としても貴重であるため、海鳥（鶉・かつおどり等）の数も減少する。ここで、豆腐のことに話をもどすと、豆腐の原料である大豆の大部分を、我国は米国からの輸入に頼っているが、一方、米国における大豆生産の肥料として、前述の海鳥の糞便が多く使われていたため、海鳥の減少は大豆の生産に打撃をもたらすに至った。換言すれば、エル・ニーニョの発生は、かたくちいわし・海鳥を通じて遠い我国の食卓に影響を与えていた訳である。

ここで、米国の大豆生産のことに關して過去形にしたが、その理由は現在の状況が上記とは多分に変遷してしまっただか

らである。昭和五七、五八年に発生したエル・ニーニョは、
ほぼ十年前のそれより規模の大きいものであったが、その前
後に豆腐あるいは大豆を基にする食品類に際だつた価格の上
昇は起こらなかった。これは、米国の大豆生産に化学肥料が
とつて代わつて使われ出したことによる。豆腐の値段がむや
みと高騰したりすることがなくなつたことは、我々にとつて
歓迎すべきことであるが、人為的な手段を用いて生産を維持
しようとする現代の生産業の一端を垣間見たともいえる。

ところで、エル・ニーニョが発生すると、日本の気候も異
常になるとか、日本近海の魚が不漁になるといつたことを耳
にした方も多いと思うが、率直に言つてこれに対して明確な
解答をすることは、現状では困難である。言い換えれば、来
年は冷害になるか、あるいは豊漁になるか不漁になるかを
完璧に予測することは、多種多様な不確定要素のために不可
能である。そのために、生産者は、生産の安定化を計るた
めに、種々の方策を施そうとしている。

この状況は、漁業・水産業も例外ではない。一昔前まで
は、俗に言う高級食品と見なされていた魚介類―マダイ・ハ
マチ・ウナギ・フグ等―が、最近家庭や旅先の食卓でお目
にかかれることが、それ程稀ではなくなつてきたが、これらの
恩恵は養殖技術の進歩に負う所が多い。魚たちの生態や気ま
ぐれな天候に左右されずに、安定して供給を確保できる最も

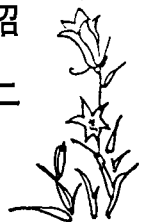
効率のよい手段として養殖が推奨されてきているのである。

しかしながら、我々消費者としては、この様な生産至上に
傾倒する一方で生じる弊害にも、注意しなければならない。

はまちの養殖が開始された当初は、付着生物からの防護と称
して多量の抗生物質が用いられたため、病魔に冒された養殖
はまちのみならず、奇形のものまで数多く存在した。現在で
は、抗生物質の使用自体は行われなくなつてはいるが、人工
的に短期間で生長させられた養殖魚が、我々の食卓に堂々と
登場している。本来は、広大な海を自由に泳ぎ回り、活発な
新陳代謝を繰り返しながら生長していくはずの魚たちが、短
期間のうちに多量の飼料によつて生長することを余儀なくさ
れている。この姿は、あたかも都会の雑踏の中で、エネルギー
を発散する機会を与えられずに、栄養だけは必要以上に与
えられて育つていく肥満児のそれであるといつても、過言で
はないであらう。

現在の水産業は、二百海里等の問題を抱えながら、様々な
技術革新を計りつつあると考えられるが、上記のような自然
の形態を半ば崩すことまでして行われることは、当然許容さ
れるべきではない。これに対して消費者ができることは、そ
れらが排斥されてしまうような環境を作ることであらう。そ
の方法の一つとして、一時期はやつた「究極」のメニューへ
の追求が、貴重な役割を果たすかも知れない。

発言



小さな森の宿の願い

山崎 昭二
都世子

車山高原に開いたペンションに、中勘助さんの名作「銀の匙」を名のらせていただきました。太平洋戦争末期、中さんが私の家の近くに疎開していらつしやったご縁から、奥様のお許しを得て、「ぎんのさじ」としたのです。毎月出す「ぎんのさじ通信」、その82年十月号は次のようなものでした。

「とりたての野菜（たとえキリヨウは悪くても）」

野菜は、ある農家と契約して、畑から直接とってきます。きゅうり、トマト、かぼちゃ、キャベツ、ピーマン、じゃがいも、とうもろこし、パセリ、レタス……などです。『トマトがとてもおいしかった』と言われると、少々遠くても畑へ取りに行く足が軽くなります。「見てくれ」よりも畑で熟したトマトの味がわかってもらえたことで産直を続ける意欲がわいてきます。契約栽培や産直の失敗談をよく耳にします。双方に相当深い理解がないと続かないものだと思っています。私たちの産直は本当の味のわかる人に支えられてこれからも続けられそうです。今は畑で野菜が十一月半ばの漬け込み

を待っています」。

私たちの産直の農家の家族はおばさんと市役所に勤めるおつれあいと、建築設計事務所に勤める息子さんの三人です。ふだんは、このおばさんひとりの、三ちゃんならぬ一ちゃん農業です。日曜日にはおつれあいも手伝いますが、ウィークデーはただ一人で主としてパセリの栽培をやっています。マルチシート（保温のためのうすいビニール膜）を敷いたり、ハウスのビニールをかけたたりするのは二人でないと能率が上がらないし、できないものもあるので、手伝い要員として私の出番になるのです。私が手伝うかわりに、私の必要とする野菜の種蒔き、苗の植えつけ、その他もろもろの管理を、おばさんの畑を借りて、おばさんの指導によって二人でやるのです。

最近では、この方法も軌道に乗ってきました。収穫は一日おきにしています。初めの頃、四、五日もあけて畑に行くとか、きゅうりなどは巨大になって、とるのに大変骨が折れま

した。大きな背負い簞に一ぱいになって畑の中で立往生することもありました。とらないでおけば木がいたむし、おばさんに申し訳なくて泣く泣く収穫したものでした。一日おきでなければならぬという結論に達したのは一昨年の夏からです。四、五年も経ってやっとそんなことに気づいたのです。とうもろこしなどは、とつてすぐ食べる方が味も落ちないので、今では、早朝五時に起き出して、軽四輪トラックを駆って畑に出かけることが多くなりました。畑まで二十kmもあるのですから、ぐずぐずしては朝食に間に合いません。それに有料道路の料金所が開いてしまつては、四百円の通行料だけ野菜が高いものになってしまうのです。

こんなやり方を七年やつてもまだまうまいかない面があります。お客様の多くなる夏休みに入るころ収穫できるといいのですが、なかなかそうはいきません。八百屋さんから買わなければならないものがたくさんあります。使う量に合わせて作ったつもりが足りなかったり、多すぎて近くのロッジに分けてまわったりすることもあります。

おばさんはパセリについては専門家でも、西瓜やメロンについては素人です。収穫量の調整もうまくないし、西瓜のたなおちや、ひびわれメロンがとれることもあります。そういう時は、半月型に切つてデザートに使うことができます、賽の目に切つて皿に盛ります。メロンが一時に出回った時には、

アルバイトの学生さんのデザートはメロン攻めになります。

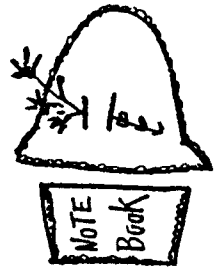
先日、昨年のとうもろこしの味が忘れられないと訪れた方がありましたが、まだとれていなくて残念がつて帰りました。

私たちのような産直をやりたいと、ある人が頼んだ時、おばさんは、「先生は（おばさんは、以前小学校教員であつた私をこう呼んでいます）とれたての野菜をお客様に出したくてやつてるだヨ、値段はかえつて高くつくかも知れねエヨ、安くできると思つてやつてもそりゃあ続かネエズラつて断つただヨ」と言つていました。

夏休みのシーズンが終わつてお客様が減つても、畑の作物は生産調整をしてくれません。今まで以上にとれ出すものもあります。昭和一けた生まれの悲しい性で、これを何とかしなければとシーズン中とは異なつた心配をすることになります。農家の主婦はこういうことへの対応を心得ています。とれて余つたとうもろこしは、ゆでて実をかきとつてから冷凍することを教えてくれました。袋に入れて少し凍った時にばらばらにほぐして後、本格的に凍結させれば少し使いたい時に都合がよいこと、解凍したとうもろこしのコンスープ以外の料理法も教えてくれました。シェフの技術だけでなく、農家のシェフの知恵にこそ学ぶべき多くが隠されているようです。私たちの産直を永續させるポイントがこの辺にあるのではないかと思うこのごろです。

我が家の朝ごはん

—東京都江戸川区立新田小学校六年生—



後藤榮美子

◆今日の朝ごはんは、ごはんとおしんこと、なつとうと、魚です。魚はかんづめで、おしんこは、昨日買ってあった物です。それでごはんは、朝たいた、ごはんでした。

いつもなら、みそしるもあつたけど今日はめずらしく無かったです。

ほとんどのパターンが、ごはんとおしんこと、無い時があまりないみそしるです。一番多いみそしるの具は、わかめが入っているみそしるです。おしんこは、はくさいや、きゅうりが主な物です。

あまり工夫は無いけれど、みそしるならあります。少し味のもとを入れるところです。あと、赤みそを加えることです。でも、赤みそは少ししか入れません。

自分は、手伝いはしないけど作る人はたい

へんだと思う。おかずとかはそうかんたんには、決まらないと考えたからです。

風間 大介

◆ぼくの家では毎朝ほとんど牛乳を飲みます。今日は、卵と牛乳とパンと、さくらんぼを食べました。けれどもお父さんは食事をしません。弟とぼくはいっしょに食べます。今日の朝ごはんは、とってもおいしかったです。

田中のぞみ

◆けさの家の朝ごはんは、おみそ汁と、白い御飯と、果物はスイカです。

おみそ汁には大根の千切りや、わかめが入っていました。このごろは白みそだけで、わたしは赤みそのほうが好きです。それで、おしんこがついてればいいなと思う。宮城のおばあさんの手づくりの梅ぼしや、なすや、きゅうりのぬかみそつけはおいしいから。

新居真由美

◆今日の朝ごはんは、シーチキンののりまきと、おしんこと、めだまやきとおちやでした。私は、今日の朝ごはんは、とっても、あわないしゆるいだと思います。シーチキンののりまきが自分の家では、いちばんじまんです。

でも私は、ともだちのおかあさんより、うちの、おかあさんのほうが、うまいと思いました。でも、おかあさんは、うちの仕事と家のあさごはんをつくるのは、たいへんだと思いました。

酒田 智一

◆今日のぼくの家の朝ごはんは、ごはんとおみそしるとふりかけだった。

ごはんはふつうのごはんのみそしるの中みはキャベツみたいたのだった。

ふりかけもふつうのやつだった。

あと、キンピラゴボーとゆうやつも食べた。キンピラゴボーとゆうやつの中みは、ゴボーとニンジンだ。

ぼくはニンジンはきらいなのでゴボーだけ食べた。それに、とうがらしをかけてあったのでからくておいしかった。

熊倉かより

◆我が家の朝御飯は、毎日が、質素である。うちは、御飯とうで、御飯は、にぎってあります。だからたべやすいです。それは、いいけど、おかずが、姉が高校生なので、毎朝、お弁当をもっていかなくては、ならないので、おかずがあるけど、今日は、母がねむくて、弁当をつくらないので、質素でした。みそ汁がないかわりに、こう茶をのみます。あと、玉子焼きと、魚、トロロいもと、冷やっこに、トマトでした。くだものに、リンゴがありました。いつも、テーブルにのっているのは、玉子と魚です。

私は別に、こまっていらないし、まあそれはそれでいいので、いいとおもいます。

鈴木 智之

◆ぼくの今日の朝ごはんの材料はトマト、レタス、こんぶ、米、ふりかけ、たまご、とり肉でした。その材料でサラダ、こんぶのつくだに、ごはん、玉子焼、鳥肉のからあげを食べました。ぼくの家のパターンは夕食のあまりか、パンです。

久保田優子

◆今日の朝ごはんのメニューは、目玉焼と、おしんこと、みそ汁とおもちでした。

みそしるの材料は、みそを少しいれてだしのもとのだしをいれてしばらくたててできあがりです。

家の自まんの料理は、目玉焼と、おみそしるです。家の料理が一番おいしいです。

高谷 誠

◆六月三十日のぼくの朝ごはんは、ごはん、みそ汁、目玉焼でした。

材料は、米とタマゴとみそとわかめとじゃがいもでした。

ぼくの家の中で一番りょうりがうまい人はお父さんです。

お父さんのうまい料理は、水とんです。お母さんのうまい料理は、かつどんです。

佐々木香織

◆私の家では、ごはん、みそしる、みりんぼし、たまごやきなどを食べて、朝学校へでかけます。

うちの料理では、とくにわるい所はありません。でも、少し多いなあ、と思うぐらい出すのでちょっと……。

家での朝食では、パンは、ほとんどでません。コーンフ레이크なんかもでるときがあります。あと家では牛乳は、ほとんど毎日です。前の日ののこりが、朝でたりもします。

後藤 浩子

◆うちの朝御飯は、いつもパターンがまっています。まず、ご飯、おかずは、ハム、ソーセージ、ベーコン玉子やきです。つぎに、パン。パンは食パンにチョコレート。あとはドーナツです。ドーナツは、いろいろな種類があります。のみ物は、麦茶。朝の物は、けっこう甘い物、しつこい物が多いので、麦茶はさっぱりしていいです。

今日は、ドーナツで、一こです。

もっとあったのですが、朝はあまり食よくがないのでいつもパン類は、一こです。

今日は、ドーナツでした。いつもは、御飯です。この時に、玉子やきは、姉は、しょっぱいのがいいのですが私は、甘いのがいいので母は、甘いのにしてくれます。

たまにきのうの、のこりのみそ汁が出ます。につまっておいしいです。

二宮 貴之

◆今日の朝食はみそ汁、ひややっこ、とうもろこし、トマト、たまご焼きでした。

主食はとうもろこしでごはんのかわりでした。みそ汁の具はわかめでしょう味料はハイミーとみそです。ほとんどいつものパターンは、ごはんのみそ汁といろいろなおかずです。

今日も同じパターンでした。

ひややつこは朝ひさしぶりに食べました。

土屋 麻美

◆今日の朝ごはんのメニューは、パンとたまごやきとフルーツです。

パンは、バターといちごジャムをつけて食べます。たまご焼きは、そのまま焼くのではなくたまごの中に、にんじん、キャベツなどいろいろ工夫をして、野菜が入っていた。

フルーツは、いつもだしてくれますがときどき、家にないときなど、あつたりするときだしてくれないときがある。

そういうときもあつたりする。

岩楯 悟樹

◆きょうのぼくの家のあさごはんは、パン、メダマやき、タマゴヤキ、ベントウの、のこりの、ナゲット、リンゴ、あとのみものの、牛乳でした。あとおつゆでした。

パンは、食パンでマーガリンをぬって食べました。メダマやきは、しょうゆをかけて、タマゴやきは、たまごをやいているときいつもサトウをいれています。

ナゲットとリンゴは、べんとうの、のこりのみものの、牛乳は、あたたためてのみます。あとおつゆの中には、ねぎに、タマゴに、シ

イタケです。

ちよつときようは、タマゴのたべすぎだと思いましたが、こんどは、そんなにたべないようにしたいです。

赤迫きょう子

◆私の家の朝食は、食パンにバターをぬってその上からハチミツをかけて食べたのと、レタスとキュウリとニンジンとトマトとレバーの入ったサラダに、ごまドレッシングをかけて食べたのと、プリンとメロンのデザートでした。のみものは牛乳でした。

向藤原 朗

◆僕の家の朝食は、ほとんどパンが主食です。あと毎朝みそ汁が出ます。そして今日のおかずは、野菜いためと、春巻と、チキンナゲットと、ほうれんそうのおひたしでした。みそ汁の具は、大根と油あげと、なすで、野菜のための具は、キャベツ、肉、ニンジンでした。

太田満梨子

◆今日の私の家の朝食は、ごはんとおでんとさくらんぼです。おでんは、きのうの夕食ののこりです。おでんの材料は、大根、はんぺん、とりのステック、タマゴ、しらたき、ツミレ、ボールです。この中で私の好きな物は

はんぺんとしらたきです。とってもおいしかったです。

村井 宗一

◆ぼくさんの朝ごはんは、黒さとうパン二つと、みそ汁と、ベーコンエッグと野菜のためだった。

ちよつと多かったけどおいしかった。

野菜のための中には、にんじんとお肉と、玉ねぎだった。みそ汁の味は、わかめと、たまねぎだった。

最後にスイカを食べた。

小川 紀子

◆今日は、ねぼうをしてしまったので、かんとんに食べられる、パン（バターロール）とたまごやきとかでした。

わたしの家では、ほとんど朝食は、ごはんですが、わたしと、おねえちゃんとかは、パンを食べたりもします。

今日は、おきるのがおそかったので、かぞくといっしょに朝ごはんを食べなかつたのでみんなは、なにを食べたのかなあと思います。わたしには、こういう時が、たくさんあります。

わたしの家の朝ごはんは、やたらとでるものという、たまごやきとか、みそ汁かなあ。

わたしの家は、まえまで、朝食といえは、ごはんだったのに、いつからパンも、食べるようになったのかなあと、思います。

鈴木かおり

◆今日の朝ごはんは、ごはん、おみそしる、具は、にら、とうふ、油あげです。

おかずは、なつ豆の中にねぎが入ってる。さつまあげと野菜の正油のための中に入っているのは、さつまあげ、もやし、にら、にんじんです。

つけ物は、だいこんのぬかずけです。

我が家のじまは、いつもつけ物ができます。

仲野 賢治

◆今日の朝ごはんは、フレンチトースト、サラダ、そしてフルーツにビワ、のみ物に牛にゅうでした。ふだんは昨日の夜やいてない牛肉や残ったスープなどかんたんにすますけど、けさはなにもなく、ごはんもまったくなかったのでパンを食べました。うちの朝ごはんは、特に工夫は、ないけれど、いそがしいのでかんだんというのが特ちようです。

亀沢真喜男

◆ぼくの家の朝食は、みそ汁とごはん。おかずは、肉のみそづけでした。
材料は、みそと水とぶた肉でした。

田邊 佳子

◆今日の朝ごはんの献立は、カレーライスとサラダと、牛乳でした。カレーライスの材料は、ジャガイモ、人参、おにく、玉ねぎ、コンソメ、カレーのルウ、サラダの材料は、キヤベツ、レタス、きゅうりです。

工夫や自慢とかは、とくにありません。でも、人の家では入れないような物を、時々入れることがあります。たとえば、カレーにフルーツをいれて作るとか、あと、フライドチキンに、粉チーズをふりかけたりします。これが、工夫かな!? じゃあやっぱり、自慢はないな。

茂木 裕子

◆我が家の朝ごはんは、パンとこうちやでした。いつもはごはんのみそしるだけど今日はパンとこうちやでした。でもすつごくおいしかったです。

お母さんがよる、はたらいているので、私自分できく時もあります。でもやっぱりお母さんの方がじょうずで早くておいしいです。

渡辺 一裕

◆今日の朝ごはんは、トマトとたまごとお茶づけとみそ汁を食べてきた。

ざいりようは、お茶と茶づけのやつとめぼしだった。みそ汁の材料はみそととうふと、だいこんとジャガイモでした。

中野 愛美

◆私の家の朝食は、ごはんのみそしる、みそしるのだしは、味の素で具はあさりです。

おかずは、煮魚と野菜サラダです。サラダの中味は、ハム、レタス、トマト、かいわれ大根でした。

吉田 祐子

◆今日は、ごはん、味噌汁と、ゆでたまごと、ひじきと、かつおのつくだにでした。

味噌汁のざいりようはかつおぶしと昆布とにぼしをだしにしています。

具はジャガイモととうふで、やくみにねぎが入っていました。

うちは、種類はたくさんあるけど、量は少ないので、毎朝、これくらい食べています。

とくちようはみそ汁で、だしをたくさんとっていることです。

お母さんはめんどくさいといいながらも、三しゅるいのだしをとってくれます。

むぎ茶は、二日に一回ぐらいわかします。ほとんど、手づくりで、とてもおいしいです。

新しい家庭科を

創るために

小学校では

林間学校の体験と

夏休みの課題

岩瀬志津子

一、六年生の林間学校

泉丘小の林間学校は、五年生が大阪府の北部の能勢町にある府立野外活動センターで一泊二日、六年生は兵庫県の関宮町の山間にある鉢伏高原はちふせで二泊三日で行われていました。

しかしこれは、今年限りで、来年からは、六年の鉢伏が同じ日程で五年生になり、六年は新たに、滋賀県の伊吹山の施設と契約して、二泊三日にすることに決まっています。

実施する時期も、一学期末の多忙な時から、夏休みに入ってからできるということも考えて、抽選で決められてしまう野外活動センターをとり止めました。この他に豊中市の野外

活動センターもあるのですが、規制が厳しく、あまり歓迎されていないようです。

さて、私は昨年は五年生、今年は六年生の付添いでしたので、二年間同じ子どもたちと付き合いました。

昨年の府立の野外活動センターは、二日とも雨で、プログラムは全部屋内でしなければなりませんでした。ボランティアの若い人たちがすべてのプログラムにリーダーとなって関わってくれ、担任は、宿舎（大型テント）での生活を指導するのがほとんどでした。テント場の敷地は広く、丘陵地なのでテント間を見まわるのが相当の労働でした。

それに、一泊二日といっても、一日目は午後三時に開所式があつてから翌日の昼食までで、午後一時にはバスで出発というあわただしさです。その時間には、いつも次の団体が到着するので、バスの発着所は大混雑をしていました。こんなあわただしい野外活動センターも敬遠せざるを得なくなりました。

今年の六年生の鉢伏高原は、七月六・七・八日、すばらしい好天に恵まれました。梅雨中のはずが、八日には梅雨明け宣言までありました。

鉢伏高原は八百×千二百メートルのスキー場のグレンデになつていて、宿泊施設も多く、夏は林間学校用として都会の学校を勧誘しているところです。高い木は少ないが、広々と

して展望がよくきいて、起伏の多い能勢のテント場とは、また違った雰囲気的林間でした。

泉丘小では、急を要する行事にはいつも、子どもの実行委員会を作り、しおり作成をはじめ、プログラムの構成や運営に自主的に関わるようにしています。これを指導する担任の先生方の苦勞は大変ですが、各クラスの実行委員が中心となって役割を決め、運営するには意義があると思います。

内容の主なものをあげますと

第一日。オリエンテーリング（高原のポイント探し）

。キャンプファイヤー

第二日。登山（鉢伏山約六キロメートル縦走）

。魚つかみ（人工池のあまごつかみ）

。飯盒炊さん（バーベキューで夕食）

。きもだめし、星の観察

第三日。もちつき

。班行動（グラススキー、散歩等）

この中で、私は特に飯盒炊さんでの体験を家庭科の授業につなげていきたいと思いました。

林間にくる前、鍋でご飯をたき、おにぎり作りの実習を済ませてきましたが、飯盒で炊くことは、ほとんどの子がはじめてでした。年によっては学校の裏庭にあるかまどで、練習さ

せて行くこともありましたが、六月中旬に一学期の授業をすませなくてははいけませんので、それどころではありませんでした。

まず、火を焚きつけることからの挑戦です。平らな地面に鉄板の長方形の枠だけのかまどで、消さずに火を燃やし続けるといいうのは、私も難しく、自信がありません。田舎で、焚火を頼まれて、なんとか燃やし続けた経験はあっても、せまいかまどで焚くのはじめてでした。

渡された材料は、木、古い割箸、古新聞、油の浸み込ませた、わらの切れはしとマッチです。わら、古新聞、割箸は、勢いよく炎がですが、薪にはなかなか燃え移りません。そのうち、薪が地面について、空間がつぶれて火が消えてしまいます。私も一度失敗し、煙に涙しながら、つけ直しをするという情けない状況になりました。

子どもたちの方というと、勢いよくもえている班もあるが、何度も、自称おにいさんという宿の人にきてもらい、焚く材料をもらい直している班もあり、それは煙にむせる涙ながらの光景でした。

飯盒のご飯がたけたかどうかは、ふたの上に、木の棒をおいてみて、振動が伝わってこなくなつた時でわかるといっておにいさんの説明に感心して、ともかくもかまどから下ろして、さて逆さまにするのも、こわごわ、大変な難作業でした。

●新しい家庭科を創るために／小学校では

次はそのかまどの上にアルミホイルで包んだ鉄板を置いて、鉄板焼ふうのバーベキュー料理です。ご飯で勢いよく燃えた木は消えずそのまま肉や野菜をのせたので、今度は焦げてきます。

こんなことは子どもたちにとっても、ほとんどはじめての経験でしょう。かまどの火や鉄板の上の肉には気をとられても野菜はそのまま放っておくし、そんなことにもおかまいなしにご飯をかき込んでいる子もあり、私も見てまわるのに疲れて、自分のかまどに帰ってきました。校長が米をとき炊いてくれたご飯には芯がありました。ぜいたくは言えないけど、肉はハラミ肉でロース肉でないのも残念でした。悪戦苦闘のうちに饗宴は終わり、キャンプ場は暮れていきました。

学校にもどって、次の週の家庭科の時間は、「林間の飯盒炊さんをふり返って」の授業をしました。

●ご飯をたぐのに気をつけることとその反省

1 米を水につけること

米を洗ってすぐ炊いたので芯があったのではないかな

2 水かげん

三カップの米を飯盒の二カップと四カップの印の間にしたので、水が少なめになり芯があったのでは

ないか

3 火かげん

空気が入るように薪をおかないと、よく燃えない火がよわいと時間がかかり、やわらかいご飯になる（でもおいしかった）

勢いよくもえて早くたけたけど、かたかった

4 むらすこと

ふたの方を下にして逆さにするのがあつかった

こんな話し合いの後、子どもたちに感想を書いてもらいました。

はんごうすいさんをして——子どもの感想と反省——

M・S (男)

。むずかしかったことは、燃やすことだった。それは、なわがもえているあいだ、木が燃えなかったので、きえそうだった。一、木をかわかすといって入れすぎた。二、火をいじりすぎたから、三、空気がとらなかつた。でもおにいさんがやってくれたできた。そして、バーベキューのとき、きえないでよかった。水かげんは、水を入れたけど、しるしがないのできとうに入れたからしんばいだった。

M・N (男)

ぼくは米をあらって水を入れるとうばんだったので、ちゃんと水が入っているかなと思っていました。水をはかっているのは、すごくむずかしかったです。米の味もかたさもちようどよかった。しかしできあがるまで、時間がかかった。はんごうをあらう時、米がべとべとしてなかなかとれなかった。

K・J (男)

火をつけるとき、最初の方だけついて、あとは火が小さくなったりして、ごはんがぜんぜんたけませんでした。ぼくたちは火をつけようとしたけど、よけいに火が小さくなって、しまいました。わりばしももうなくなっていました。おじさんに火をつけてもらってやっとごはんがたけました。そのときは、もう食べているところもありました。肉や野菜を焼くときはこげたものもありました。でもすごくおいしかったです。

H・M (女)

わたしははんごうすいさんをみていたことはあったけど、自分でやったのはじめてでした。火がでてきてふたがカタカタあいていたときは、やり方が悪いんじゃないかと思いました。でもふくらたけてやわらかくておいしかったです。バーベキューはちよつと火が強すぎてはじめての野菜がこげて、たべれなくなっていました。あとは順番に焼けて食

べれたので、よかったです。むずかしかったのはやっぱり火かげんです。こげてしまっていたいへんでした。

子どもたちの作文を見て、生活をしているとはいえない子どもたちの実態に驚いていますが、今の環境では当然と思えてきます。要するに、もっと生活経験をさせる環境設定をしてやる必要があります。林間学校も一週間ぐらい、食料だけ置いて生活させてみる方がいいと思います。テレビで都会の子が山間の生活を体験している様子を見ました。河原でバーベキューをして、用意された材料で焼くのはおとなであつて、子どもは食べるだけでした。この程度の生活体験学習が多いのに疑問がわきます。

二、夏休みは家の仕事をしよう

五年生のはじめに、「家庭の仕事」という単元があり、少しの時期ですが、仕事の実行記録を提出させています。

その後も続けてするよう話し、期末にどんな仕事をしているか簡単に書いているのを見ると、新聞とりとか、くつならべとかが大半です。六年生でもあまりかわりません。子どもたちは、これでも仕事したと思っているようです。

毎年、夏休みの課題として、家の仕事をすることをすすめて

●新しい家庭科を創るために／小学校では

きました。林間での子どもの様子から、今年は、もう少し一歩進めて家の仕事でも特に食べることに關する家の仕事と、身のまわりを清潔にする仕事を最低一つずつ選んでみよう、と話してみました。

1、食べることに關する仕事

飯盒炊さんの反省の時に、人間が生きるために必要なことは、食べることを自分でできることだという話をし、食べることに關わる仕事をしてみようとするめました。

子どもたちが選んだ仕事の内容は、

1、食器洗い 2、食事の片付け 3、食事の用意

で、男女共変わりなく、3の食事の用意の内容も、朝食の用意から野菜洗い、米洗い等です。今の子はおとなに邪魔扱いされないで、させてもらえるかが心配です。昔の「男子厨房に入らず」は、今は「子ども入れず」になっているようです。

2、身のまわりを清潔にする仕事

林間では、部屋の荷物の整理整頓のできない子が目につきました。特に、男子の部屋は、リュックやかばんから出されたものが、部屋に散乱していました。広い部屋だったので、ふとんは中心部に敷いたのでしょう。翌日も同じ状態でした。

遂に声を大きくして強制的に片付けさせてしまうことになる

りました。男の子で、自分の部屋を掃除している子はほとんどいません。夏休みの仕事の二つ目は、身のまわりをきれいにする仕事をえらぶようにすすめました。

選んだ仕事の多い順は

1、ふろそうじ 2、せんたくものの片付け 3、へやのそうじであまり期待はできませんが、その結果が楽しみです。

この他に課題として、五年は、野菜サラダ、六年は、みそ汁を、家で一人、または家の人と一緒に作ってみて記録することと、自由作品の制作一点を出しました。

家庭科だけでこれだけあったら、他の教科と合わせたら、子どもの負担が大きいのではという心配は、担任の先生と話して合って理解していただいています。

ある母親から、家の仕事は子どもの時にさせなくても、女の子はおとなになればやらざるを得なくなるし、自分もそうして今やっている由の感想がきましたが、男も女も子どもの時からやってこそ、自立したおとなになれると信じるし、親と子のコミュニケーションの一つに家事の役割もあることを伝えました。家の人の感想を読むのも楽しみで、この課題を今年で九年間出し続けています。

(豊中市立泉丘小学校)

新しい家庭科を

創るために

中学校では

保育 私の場合

(三年共学)

常陸 れい

8・9月号で「保育学習——共に生きる」を根津さんが担当してくれました。根津さんは同じ八王子の中学校に勤務し、新しい家庭科を創るための学習会のメンバーでもあるので私と意を同じくする同志です。ねらいや授業の流れは共通する部分が多いのですが、昨年からとりあげた内容で私の場合を紹介します。

保育学習の流れの中で「胎児の発育上の障害」の部分を視聴覚教材を大いに利用し、かなりの時間をかけるのですが、その中の「放射能汚染」の項で原発を取り上げました。

内容や取り扱った資料、生徒の反応については4・5・6月号で浅井由利子さんが『「原発」と食物汚染』で取り上げ

てくれましたので、これもかなり共通する部分が多く、重複しますのでくわしく述べませんが、私の保育学習の自主テキストを紹介します。このテキストは保育学習に入る前に印刷し、生徒が各自とじこみ、提出用課題も授業中のノート記入、その他資料も全部このテキストにファイルし、これ一冊で授業をすすめています。

一、「保育」テキスト（資料は省略、項目のみ）

1、保育を学習するにあたって

次の三点を、君たちに訴えたい

。君が生きてきた15年間をみつめ、育ててくれた人たちの愛情を知らう

。子どもをとりまく社会環境について考え、また「生命は地球よりも重い」ことを考えよう

。自分の生き方や将来も考える機会としよう

2、課題

(1) 子どもに関する記事を切り抜き、レポート用紙四く五枚程度にまとめる

① 記事中、自分が心を感じた箇所に線を引く

② 自分の考察をくわえる

内容について

。子どもと衣・食・住に関すること

。子どもと教育・文化に関するこ
と

。子どもと事故・健康・病気に関
すること

。子どもをとりまく環境・社会問
題・福祉関係

。その他

(2)わたしの生育史(ア・イのどちら
かを選ぶ)

ア家族に様子を聞きまとめる

。生まれる以前のこと

。生まれた時の様子、父母の心配、

うれしかったこと、困ったこと

。小学校入学以前 苦労など

。小学校のころ

。家族に生育史を聞いたあとの感想

イ子どもの頃の記憶と今の自分の考察

3、子どもについて

VTR「赤ちゃん」(NHK)を見る

A・ミルンの詩(周郷博訳)「六つになった」を味わう

4、胎児の発育上の障害

六つに なった

一つの ときは、
なにもかも はじめてだった。

二つの ときは、
ぼくは まるっきり しんまいだった。

三つの とき、
ぼくは やっと ぼくに なった。

四つの とき、
ぼくは 大きく なりたかった。

五つの ときには、
なにから なにまで おもしろかった。

いまは 六つで、
ぼくは ありったけ おりこうです。
だから、いつでも 六つでいたいと
ぼくは おもいます。

A・ミルン 周郷 博訳
('おはなしだいすき' 童心社刊より)

ア増える先天障害

胎児のうちに死んでしまう子は、一九五二年を1とする
と、二十年後の一九七二年には5.5倍にもなっている。(図1
参照) たて軸は死産児に対する先天障害児の割合を示す)
イ原因として考えられること

① 遺伝と突然変異

。血友病・ダウン症候群

② 母親の病気、その他

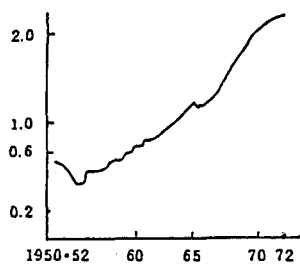


図1 死産児先天障害

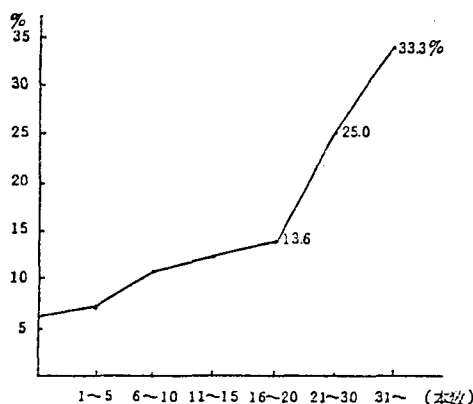


図2 喫煙と未熟児分娩率

。極度の栄養不足、食糧不足
 。母体の喫煙(図2参照 両図とも、先天四肢障害児父母の会編『先天異常問題の本』平山雄他による) 飲酒
 。糖尿病 心臓病
 。ストレス
 。ウィルス感染
 。薬害によるもの
 サリドマイド(VTR『とびたとう20歳の青春』を見

る) かぜ薬などの抗ヒスタミン剤
 ③ 公害等居住したために被るもの
 。有機水銀・水俣病
 。塩化ビフェニール(カネミ油症)
 。P・C・B
 。農薬、家畜の発情促進剤
 。枯れ葉剤
 。大気汚染(排気ガス、工場)

④ 放射能
 。レントゲン
 。大気中の放射能
 。体外ひばく・体内ひばく
 食物の放射能汚染
 チェルノブイリ原発事故(『ノンちゃんの原因のほんとうの話』を読む)
 ⑤ 食品添加物、農薬(VTR『とべ大五郎』を見る)
 ⑥ 妊娠・分娩の異状
 ⑦ 映画『生命創造』をみる

●新しい家庭科を創るために／中学校では

二、「保育」でなぜ原発を取り上げるか

授業で原発を取り上げたきっかけは「子供に関する新聞記事の切り抜きをし、自分の考察を加える」という課題の中で、チエルノブイリの原発事故を取り上げた生徒がいて、「社会科で日本の原子力発電所については学習したものの、それが私たちのくらしとどうかかわり、影響など具体的に何がどうなのか、今いろいろ話題になっているのはどうしてなのか、自分たちの健康とどう結びつくのかなど知りたい」という感想があつたことからでした。

原発については正直全く無知とっていいほどの私でしたが、幸い同じ職場に中学生のための反核・反原発副読本『ノンちゃん』の原発のほんとうの話』を作り、全国教研でも注目を浴びた幸地正憲さんが転任してきました。彼は原発と教育研究会のメンバーでしたので、反核・反原発の講座や研究会、現地見学、反原発集会などへの参加の誘いやその他原発に関する本の紹介、写真、スライド、パンフレット、『風が吹くとき』の映画等すべての情報を提供してくれました。それらによって、直接目にふれ、耳で聞き、いろいろな人たちとの出会いによって私自身もふくらみ、より確かに物が見えるようになったと感じます。幸地さんとの出会いは私にとって大

きな幸運であり、その行動力には刺激され強い影響を受けました。

学校の図書に『ノンちゃん』の原発のほんとうの話』は授業で使えるように一クラス分を購入してもらい、生徒に読ませました。扱った時期が一、二月でしたので、三年生にとつてちょうど受験を目前に控え、受験勉強のみで必死になっている時でした。はたして生徒がどのような反応を示すか、それ以前に素直に本を読んでもくれるかどうか心配でした。三教科・五教科の受験にかかわる自己本位の勉強だけにとらわれ、「家庭科よりも……」という思いが生徒の内面にひそんでいないかと懸念しましたが、どうも取り越し苦労のようでした。生徒は受験以外の活字に飢えていたようで、いやそれにも増して原発についての実態に驚き、真実を知りたい欲望にひきこまれていきました。読み始めてからは私が口をはさむ事さえも許さないというような、張りつめた静けさで、教室はただ頁をめくるかすかな音のみでした。終わりのチャイムで本を閉じた時は、フーッ！と大きなため息が生徒の間から出ました。

三、生徒の感想文から

『ノンちゃん』の原発のほんとうの話』を読んで

三年 川住 明生

ぼくは、あのような本は今まで読む機会がありませんでした。とてもわかりやすく書かれていた。原発というあのチエルノブイリ原発を思い出す。五月三日に日本にもやってきた死の灰。あまりに恐ろしくて書けないけれど、東海村、若狭湾沿岸、福島以外にもたくさん開発され、無駄に余った電気の上のせをしている危険なものは、即刻排除した方がいい。ぼくたちの知らない所で事故が起こり、しかもほとんど知らされないとは恐ろしい。まして原発内で働くほとんどの人々が、高額な金につられ、地獄のような生活を送り、病氣（ガン、白血病等）になっても秘密厳守で金でもない。これはあまりにも悲しすぎて何も言えなくなつた。

とにかく、ぼくは断片的に原子力とつくものに対する知識をもっていたが、平和利用の原発にまで問題が起こる。例えば、都会人は自分の所に原発を置くのはいやなのに田舎だとよく、必要だという。これはエゴ以外の何物でもないと思うのだ。

結局、原子力と人間の共存にはまだまだ時間がかかることがこの本によつてわかつた。

そして、これから先の未来に生きるわれわれがこの問題について考えていかなければならないと思う。

この一年間、保育という授業を受けた。この教科は、将来自分たちに最も深く関係するものだった。あまりよくのめなかつたけれど、それなりにいろんなことを学んだ。生命の尊さを学ぶ教科だったのか。生きることのむずかしさ。そんなことを改めて知らされた。多少不まじめなところもあったけれど、教科書のかわりにプリントを、そしてビデオを重視した教え方は良かったと思つた。

最後に、今まで本当にありがとうございました。

生徒のこうした感想文が、私にとって何よりの励みになります。

※「ノンちゃん原発のほんとうの話」（新泉社）九五〇円
生徒用副読本として、廉価判八〇〇円は、反核・反原発副読本編集委員会扱。

申し込み先 八王子市八幡町十四―十三 八王子市教職員組合 幸地正憲宛

（八王子市立檜原中学校）

新しい家庭科を

創るために

高等学校では

「いのち」について

考える (2)

浅井由利子

腸閉塞の合併症をもつダウン症の赤ちゃんが生まれた。すぐ手術をしなければ、やがて確実に死んでしまう。手術をするか、しないか。つまり、障害児を生かすか、殺すか。もし、そういう選択を迫られたとしたら、私たちはどうするだろうか。生徒たちの意見と『生命かがやく日のために』（共同通信社）より抜粋したいいくつかの意見を資料にして、六人ずつのグループで話し合うことにした。

初めは、「まだ、母親にもなっていない私達が考えられるわけがない」「話し合っても、しかたない。時間の無駄」という雰囲気があった。

私は、生徒の間をまわりながら、「自分がその赤ちゃんだ

ったら、生きていたくないと思う?」「小学校や中学校で、障害をもつ子と過ごした経験はない? その時の様子をきかせて」と話しかけてみた。障害児と接した経験をもつ生徒はかなり多い。

「よだれをだらーとたらすし、やつぱり、いい気持ちはしなかったよ」

「担任の先生が、青春してていやだった。その子のことばかり。こっちはシラけてた」

「そうかなあ、うちは、先生も良かったよ」

「その子にやさしくしたら、先生が喜ぶから、やさしくしてあげてたんとちがうかなあ」

生徒から、「その子（ダウン症）は、おとなになって、ひとりで生きていけるのか」という質問があった。生徒にとつては、親が死んでもからも、人に迷惑をかけず生きていけるかどうか、「手術をする・しない」の判断材料になるようだ。「ダウン症の子は、からだも弱く、育てるのが大変らしい。発達のスピードは、少しゆっくりかもしれないけれど、身のまわりのことも、少しずつできるようになり、仕事をしている人もいる」と答えたが、もうひとつ、納得できないようだった。よく考えてみると、今の私たちも、たったひとりで人とかかわりをもたず生きているわけではない。自立しているつもりでも、実は、いろんな人に支えられているというこ

とに気がつく。それに、これからもずっと、他人に迷惑をかけずに、ひとりで生きていくと自信をもつて言える人は誰もいないのではないか。病気や事故で、障害者になるかもしれないし、年をとって、寝たきりの状態になるかもしれない。そんなことも話してみたが、「それは、そうだけど……」まだよくわからないという感じだった。人間が生きる価値を、自立できるかどうかという点だけで、判断しようとするところに問題があるように思った。

グループ討論の後、各グループから、話し合ったことを報告してもらった。印象に残った発言を紹介していきたい。

M 資料に「みんなという時の楽しそうな笑顔」って書いてあるけど、笑っているのは、幸せだから笑っているかどうかはわからないと思う。障害も身体だけなら、健常児と共に、うれしいとか悲しいとか感じると思うが、脳に障害がある子は、うれしいから笑ったりということはないんじゃないか。感情に障害がある人は、生きている方が幸せとか、一概にいけないと思う。

この発言をきいて、脳性マヒというものを誤解していることがわかったが、ここでは、口をはさまず、次のグループの報告をきくことにした。

O さっきの資料の意見を書いたのは私です。脳に障害があ

るから、感情がないというのは理解できない。中三の時同じクラスだった脳性マヒの子と、卒業してから、同窓会で集まり、教室の前に来た時、その子は笑いだした。

今までとは全然ちがう、印象に残る笑い方で。その時、みんなと一緒に勉強してきたことがよかったんじゃないかと実感した。私は、同じクラスだから、世話をするというのではなく、一緒になんでもやっていこうと、一緒に行動してきたから、そうでなかった子より、真剣に考えられる。もっと、みんなも真剣に考えてほしい。

彼女は、声をつまらせ、泣きながら訴えた。教室はしんと静まりかえった。

報告がすべて終わった後、脳性マヒについて説明し、生徒の討論をきいて、私を感じたことも付け加え、この話し合いについては、これで終わろうと思った。

ところが、Mは「先生は私の言いたいことをわかってくれない」と言う。授業終了のチャイムがなったので、それから、廊下で話を続けた。「脳の障害」について、私の説明不足のため、納得しきれないようだ。また、もっと話し合いを続けたかったのに、中途半端なまま、教師の意見を押しつけるような形になったことに対して、不満を述べた。まわりで、このやりとりをきいていた生徒たちは、「Mさんは、

●新しい家庭科を創るために／高等学校では

そんな事言ってるんじゃないのに。先生の物わがりの悪さにイライラする」「どうして、先生はこんな授業をするの。この授業の目的はいったい何ですか。こんなことやらなかつたら、誰も傷つかずにすんだのに」と言った。私は、頭がクラクラしてきた。どう答えたのか、くわしく覚えてはいないけれど、人間らしい生活とは何かを考えたいのだ。障害者を差別し、排除しようとするのではなく、共に生きていくことの大切さを考えたいのだ、ということを書いたように思う。M

とは、放課後、家庭科準備室で、長時間話し（というより、私は聞くことの方が多かったが）、彼女は、すっかりした顔つきで帰っていった。

また、別のクラスでは、こんな発言もあった。

T 障害児と一緒に過ごして、いいことばかりじゃない。

「あんな人、おらんかったら、普通に勉強できんのに。

他のクラスがうらやましい」と言っている人もいたし、私もそう思った。私は、学級委員をしていて、授業中でも、勝手に出ていく子を追っかけていかねばならなかった。授業の半分ぐらい、受けられないこともあった。修学旅行の時も、その子の世話を先生に頼まれ、ずっと面倒をみなくちゃいけないので、私は楽しめなくて、すごくいやだった。その子にあった、その子のもつ

ているものを伸ばしてやれる養護学校があるのだから、そこに入れてあげる方がいいと思う。

「はつきり言って、障害児の存在は、迷惑だった」ときっぱり、言いきる。私は、とてもショックをうけ、とまどった。どう対応すべきかわからなかった。とにかく、次のグループを指名し、報告をきくのが精一杯だった。なぜ、そんなにうろたえてしまったのだろう。

このテーマのまとめとして書いてもらったレポートを読んだ時、Tのレポートには、こんなことが書いてあった。

「中学一年の時、障害児A子に、階段の最上段からつきおとされたことがあり、それから障害児と一緒にいるのは迷惑だとは思えなくなつた」「そんな思いで必死に発表した後、先生は、非難いっぱいの目でチラッとみて、あとは見向きもしなかった」「先生は自分の考えと同じものしか受け入れてくれない」「『生命かがやく日のために』も読んだが、赤ちゃんを助けたいと言っている人は、所詮、きれいごとを言っているにすぎない」としか、うけとれなかった」「先生は私が納得できるように、『障害児とともに生きる意味』を説明できますか」

ひとつひとつの言葉が、私の胸にグサツと突きささり、反省させられ、考えさせられた。

生徒たちひとりひとり、今までいろいろな経験をし、さまざまな感じ方、考えをもっているのは、あたりまえのことなのに、「小・中学校で、障害児とかかわりをもってきた生徒は、共に生きることに、そんなに否定的な意見をもつはずがない」と思いこんでいたのではないだろうか。意識していなかったけれど、「こうあるべき」というものを、生徒に押しつけようとしていたのではないか。きれいごとではなく、本音を、と言いながら、私には、その本音をしっかりと受けとめるだけの力がなかった。情けないことだが、認めざるをえない。彼女には、私が悪かったことをあやまり、私なりに考えたことを書いて、渡した。彼女が、それを読み、どう感じたかその後、やりとりもなく、わからない。

私は、この期間、精神的にぐったり疲れ、落ちこんだ。こんなにしんどい思いをするのなら、こんな授業、やらなければよかったも思った。そんな時、Mと同じクラスのHのレポートを読んで、再び考えこんでしまった。Hには、知恵遅れの兄がおり、自分の中に、矛盾した考えがあることを素直に書いていた。そして、「家庭科の時間に、皆が本音をズバズバ言うので、はつきり言って、精神的にめちゃくちゃつらかったです」というのを読んで、こんな思いで授業をうけている生徒がいたことを、私は、どれほど考えていたのだから、と自分自身を責めた。やっぱり、こんな重いテーマを取り上げるべきではなかったのではないか。

他にも、生徒のレポートを読み、考えさせられることがたくさんあった。

中学の時、一人でトイレに行くことができないCちゃんと同じクラスだったKは、「たまたま先生がいなくて、Cちゃんを私と友達とでトイレへ連れていった。ちょうどその時、Cちゃんは生理があつて、ナプキンをかえるのがいやだな、と正直言つて思った。ところが、友達はイヤな顔ひとつせず、パツパとやつてしまった。その時、何かすごくショックをうけ、今まで、だれよりもCちゃんのことを考えているつもりだった自分が、ただかっこつけているだけだと気づいた。『お世話』と『体当たりの付きあい』とはちがうことがわかった」

これを読んで、そうか、と思った。ただ一緒に過ごすだけではだめなんだ。相手と対等につきあうことが大事なんだと思った。頭の中だけで理解しようとしてもだめだし、「面倒をみてあげる」という姿勢では、いつまでたつても、理解できないのだから。私には、小・中学校で障害児と共に過ごした経験はない。体験して初めてわかることがあるような気がする。障害児と共に過ごしてきて、私なんかより、ずっと深

いところで、共に生きることの意味をつかんでいる生徒を、すごいなと思うし、うらやましくも感じる。これから、私にできること、しなければならぬことは、実際に、障害者とかかわりをもつことではないかと思った。その時に、初めて今の私に見えていないものが、少しずつ見えてくるのではないだろうか。

小・中学校で、知恵遅れのNちゃんと過ごしたYは、「学年が進むにしたがって、Nちゃんとかかわらなくなり、高校受験の頃は、他人のことなどかまっていられない、という気持ちになってしまった。今、Nちゃんと会うたび、そんな自分の変化を思い知らされるようでつらい。Nちゃんに謝りたい」と書いています。

他にも、中学校までは、障害児が身近にいて、いろいろ考へ、かわかることもできたけど、高校に入ると、自分の生活が忙しくなり、かわる機会（中学卒業後、サークルをつくって、障害児と共にすごす機会をつくっている）があっても行けなくて、どんどん無関心になっていく自分がつらいと書いている生徒たちもいた。

地元集中運動には反発しながらも、障害児とのかかわりがなくなっていくことについては、すっきりしないものを感じていることが、レポートを読んでいてわかる。自分の内なる

差別をはっきり認めるところまではいかないけれど。

「障害者がふつうに生きられる社会をつくっていくことは健常者にとっても過ごしやすい社会だ」こう言った生徒もいる。言葉だけでなく、本当にこんな社会をつくってほしいなと思う。

ファーストフード店でアルバイトをしているという生徒は車いすのお客さんと接して、セルフサービスのコーヒーマシンのポットが、車いすの人にはとれない高さのカウンターの上に置いてあることに気づき、相手の立場になって、どうしたらいいのか考えている。自分の身近にある問題に気づき、考えていこうとするところが、とてもうれしかった。

私にとって、落ちこみ、反省することばかりの授業だったが、印象に残った授業である。生徒たちの「生徒の本音にふれることができ、先生はラッキーな先生だ」「指名もされないのに、どんどん意見が出た一時間が印象的、来年も、しんどくてもこんな授業をしてほしい」「こんなにまじめに、こういう問題にとりくんでは初めて。授業が終わってから議論を続けた」という感想を読んで、少しはほっとした。生徒に、問題を投げかけるといことは、私も生徒から問題を投げ返され、考えさせられることなのだと、生徒たちから教えられたような気がする。

（大阪府立茨木高校）



「強者の論理」をめぐって

◆西内みなみ様

Weの増刊号(88年夏)送っていただき、どうもありがとうございます。さっそく読んだのですが、どうしてもふにおちない点があったため、手紙を差し上げようと思った次第です。春の公開ゼミナールを受けての「座談会」の席上で、稲島さんがこんな発言(増刊号の24頁)をしていました。

「わたしのグループは10名で、わたしの知っているWeの会のメンバーが非常に多かった。これは、問題だったなど、後から思いました。まず最初に、西内みなみさんから『平井さんの話は強者の論理だ』という爆弾発言がで

て、それに対する反応がみんなからわつと出るとよかったと後から思っただけです。その後すぐに西内さんが『学校っていうのは弱者のために学ぶ機会を制度的に保障するものだから、そういうふうには切り捨てていいものか』という話をされたわけです」

当日、パネラー一人当たりの持ち時間は15分。そんなこともあつて、私は参加者に「フリースクール運動の落とし穴」というタイトルの原稿を配付し、話は「卒業式・ガン告知・子育て」というテーマでしたのです。その時、読み上げた詞は次の通りでした。

卒業式のうそ

(1) 努力の結果／卒業できるというのはうそだ

なんの努力をしなくても／時間がたてば／誰でも卒業できるのだ

(2) 誰からも信頼される人間をめざせ？

信頼されるかどうかは結果であり／めざすものではないのだ

やりたいことをやればいいのだ／信頼されるために／やりたくないことをやるからいけないのだ

(3) 目標をたててそれをめざせ？

そんなことをするから／目標程度のことしかできないのだ

目標をはるかに越える結果は／目標主義からは生まれない

引き出される潜在能力は／自分の予想をはるかに越えているからだ

これは息子の卒業式に参加して、校長のあいさつを聞いているうちに浮かんできたものです。さらに卒業式そのものを疑い始めました。

卒業式

(1) 同じ歳であれば／同じ日に同時に入学させて同じ日に同時に卒業させる

だから競争になるのは当然なのだ／入学式と卒業式のない教育制度こそ／競争と無縁の教育制度なのだ

(2) 自分から進んで学習している者に／勝手に区切りをつけられて／卒業させられてはたまらないのだ

学校に入れるのも／学校から出されるのも／人まかせでは／自分から進んで学習する者が／育つわけがないのだ

(3) 入学と卒業という／2回の晴れがましい場を作るだけで／すべてが免罪になる
日常の暗い日々を／祭りで発散させたように

／儀式が事実を隠す

卒業式の前日、保育園に息子を送る時間を確認するために、テレビをつけるとNHKの「おはようジャーナル」でガン告知の問題を取り上げていました。ガン患者のことを考えてと言いながら、ガン告知をしない人の話を聞いてみると、子どものことを考えるふりをして子どもを傷つけていることに鈍感な人によく似ていると思いこんな詞にしました。

ガン告知

(1) 突然の死に対して生きるため／いつ死んでも悔いが残らないように／日々を精一杯生きていくのだ

死が告知されたなら／もっと計画的に生きられるだろうに……

(2) ガンの告知をこの人にはできる／この人にはできないと一体だれに決められるというのだ／誰でも事実と直面する権利があるのだから／ガンの告知をこの人にはできる／この人にはできないという問題ではなく誰にでも単なる事実として／私情を交えず告知すべきなのだ

(3) あなたのことを考えて事実をあなたに伝えなかった／といううそで固められた世界の

中で／死を迎えることほど哀れなことはない知れば動揺すると見くびられたまま死を迎える／人間として軽んじられたまま死を迎えるあなたのことを考えて事実をあなたに伝えなかった／というやさしい人々の中で／死を迎えることほど哀れなことはないのだ

(4) ガンを告知されれば誰でも動揺する／落ち込んでいいではないか／取り乱してもいいではないか

そんな事実と直面したくないばかりに／自分の都合で／患者のことを考えるフリをして告知しなかったのだ／患者と死を共有するためには告知するしかないのだ

(5) ガンを告知しない人の苦しみも理解してほしいという

自分が面倒なことに巻き込まれたくないばかりに／かわいそうな患者の苦悩を一心に背負ったような顔をして／人の死に対して高見の見物を決め込んでいくだけなのだ

死を人と共有できる／滅多にないチャンスを放棄しているだけなのだ

(6) こんな人と死を共有したくないと思えば／黙っていればいい／この人と死ぬ前に再び出会いたいと思えば／話せばいい／ガンの告知を通じて見えてくるのは／告知する者にと

って告知される者が／どんな存在であったかということだけだ

告知の問題は／ガンになって始まるのではないからだ

春の公開ゼミナールの当日、私は以上の詞を紹介しながら話したので、私の言いたかったことはこれらの詞に集約されていると思います。この内容に関して西内さんは「これは強者の論理だ」と言い切った。これは西内さんがそう感じたことなのですから、このことに関して、「これは強者の論理ではない」と反論する気はありません。もちろん、私はそうは思っていないが。ただ、西内さんがなぜそう思ったかに興味を持ったのです。

西内さんが「これは強者の論理だ」と言った席に、私はいなかったのですが、こんな詞が浮かんだのですが、西内さん自身は強者であるのか弱者であるのか、どんな立場で話されたのかが一番気になりました。

強者の論理

(1) それは強者の論理という言い方こそ／強者の論理なのだ
だれが弱者でだれが強者なのか／自分は弱者なのか強者なのか

まず自分の立場を表明せずに／それは強者の論理という言い方こそ／強者の論理なのだ

(2) ○○の立場に立つことなど／できないのだ／できないくせにその立場に立つから／そこに差別が起こる／立たれたほうにしてみれば／余計な御世話なのだ

○○の立場がわかった顔をして／わかったふうなことを話して

でも違うのだ／あなたは弱者にも／子どもにも／障害者にも／留学生にも／老人にも／ないからだ

○○の立場に立ってという言い方そのものが

◆平井雷太様

夏の増刊号の編集に協力していただき、また、増刊号への反響を寄せていただいたてありがとうございます。平井さんからの質問状に答えることで、なぜ、春の公開ゼミナールのグループ討論の場で、「強者の論理」という言葉を私は口にしたのか、私も自分自身に問い直す機会にさせていただきます。

春の公開ゼミナールの当日、増刊号に編集した順でパネラーの方が発言されました。

風邪を押して発言してくださった水上さんは、とつとつとした語り口で、今、教師の置

／強者の論理だからだ

西内さんの話がきっかけで、○○の立場に立つことがどんな意味を持つことなのかを考えることができました。どうもありがとうございます。西内さんとの感じ方と私の違いをはっきりさせる作業を続けることで見えないものもつとはっきり見えてくるような気がしています。

なにをさして強者の論理とおっしゃったのかの説明よろしくお願い致します。

(平井雷太)

かれている状況、そして子どもと教師の間にある被支配・支配の構造、その構造の中で教師が身に付けていく「権威主義」について述べられました。学校という場で子どもと教師が対等でないように、家庭という場で、親子が対等だというのは幻想だと思いました。明らかにそこには力関係があり、強者・弱者の関係があります。自分は「親」であることによって、我が子に対しては、強者なんだと改めて考えさせられることの多かったことを記憶しています。

二人目のパネラーである李さんの発言は強

烈でした。この日を迎える前から親しくしていた李さんの、激しく日本人を糾弾する言葉に打ちのめされるようでした。私のこれまでの、在日の人たちとの出会いを振り返って、無神経・無関心であった自分自身を認めざるをえない発言でした。日本社会が持つ差別・被差別のある構造において、強者の位置に私は身を置いていると思いました。「わたしは被害者です」と、私の前に立ち現れた李さんに対して、私は何をできるのだろうか…。

そう考えたとき、三人目のパネラーである平井さんの発言が聞こえてきました。平井さんは「私の言いたかったことはこれらの詞に集約されていると思います」と言われますが、私にはそれよりも、平井さんが当日まず述べられた、息子さんについての話がとても印象的でした。いつ学校に行かなくなってもいように独自の教材を息子さんのために作られたこと、そしてその教材を生かしたのが現在経営しているらっしやる塾であること、ところが息子さんは喜んで学校に行き、私立中学を受験するために「四谷大塚」という進学塾に通われたこと、そして結果的にはこの秋からアメリカの学校に進学されることを紹介され、息子さんからの手紙を読まれました。

日本社会や学校の持つ構造的な歪みに、喘ぎ苦しむお二人の発言を聞いたあとの私の心には、残念ながらこのお話も平井さんの詞も少しも響かなかったのです。ましてグループ討論では、平井さんの話を受けて「卒業式」について話されませんでしたので、稲邑さんの言葉を借りれば『平井さんの話は強者の論理だ』という爆弾発言」が、思わず口をついて出てしまったのだと思います。

We'88四月号でも書きましたが、教育や学校について考えるとき、私もまず我が子の顔が浮かびます。親として平井さんのような選択肢はありませんから、地域の学校に行く我が子の教師が、少しでも「権威主義」から遠い方であればいいなど祈るような気持ちです。

私も自宅で中・高生たちの学習の手伝いをしていきます。それで得た収入で生活費を得ることに多少の後めたさを覚えながら、彼女たちと精一杯付き合っています。また今、癌研の付属の看護学院で教壇に立ちながら、看護学生と一緒に多くのことを学んでいます。中学を出て見習いとして働きながら看護婦の資格を取り、さらに正看護婦の資格を取るために、働きながら学んでいる人たちが東京以外の地域の出身者が大多数です。我が家に来

る子たちの話を聞いたり、看護学生が書いてくれた自己紹介やレポートを読むと、今の教育制度が「教育を受ける権利」を保障しているなんてウソだなと思います。親にお金やその気が無ければ、どんなに子どもが高校教育を受けたいと言ったって、受けられないのですから。権利を保障する制度のない競争社会は、弱肉強食の社会です。

前述したように、当日、私は水上さんと李さんのお話を聞きながら、自分自身をお話の中での関係においては強者の立場であると感

「教委に女性進出を」に答えて

◆吉村光男様

「教育行政への住民参加をねがって」へのご提言、ありがとうございます。現行法の一部改正運動「①教育委員のうち半数以上を女性とする。②一名追加(補充)の任命は男女交互とする」案、わかりやすくアピールしやすいと思います。

女性教育委員は、全国で五・八%(一九八六年五月、文部省調べ)ときわめて少ない現状です。女性ならいいというわけではないこ

じていました。そして勝手に平井さんもその関係においては私と同じ立場であると思いい、その平井さんのお話やとうとうと述べられる詞が、ある構造の中で、自分自身が強者であることに気づかず、すべてのことが当然の権利であるかのように振る舞っている自分自身を見るように感じていたのだと思います。たぶんそういう自分自身をさして、「これは、強者の論理」だと言ったのだと思うのです。

(西内みなみ)

とを前提としても、もっとふえていいと思います。東京・国分寺では「女性教育委員を実現させる会」が運動に取り組んでいます。

国連の婦人年以降、政策決定の場への女性の進出は、世界の趨勢となり、国内でもあちこちの自治体で「男女共同社会の建設をめざして」などの標題で行動計画が策定されています。その気運にあいまって、住民の側から、主体的に運動を起こす時機かと思っています。

これまでの女性は、男以上の努力をして男並みに扱われ、男まさりの女性でなくては男性と同等に遇されないといった歴史があったと思いますが、これからは、両性のよさを生

かしながらの共生でありたいと思います。

母が生きた時代からみれば、女性の権利については社会的に認められてきたといえるでしょう。しかし、現状でいいわけではありませんが、娘や孫の時代に、いまよりよくなるようにと。それは男性が置かれている状況をよくすることにもなると思います。女や年寄り、子どもが被差別者の社会では、男性もまた生きにくく、追い込まれているのでは

大阪・能勢で開催された、We夏季フォーラムに、現地の実行委員として参加して下さった岩瀬志津子さん。過密なスケジュールにもかかわらず、インタビューのお願いも、快くOKして下さいました。

今回、岩瀬さんの個人的なおつきあいから実現した、オリバー・エリザベスさん宅への訪問に、私も便乗させていただきましたが、今も感動がさめやらずにいます。オリバーさんとの出会いについて道々お話ししながら、能勢の自然をすっかり満喫しました。「八年前、オリバーさんのお話を聞く機会があつて、とても印象的だったんです。近いということもあつて、おたず

ないでしょう。教育委員公選運動は、失われた権利の回復の運動だと思います。ひとりひとりが、意思表示の手段を奪われたと主張し、とりもどそうとすることだと思います。

教育委員会法（公選）が公布されて四十年の今年、第五回教育委員の「準公選をすすめるための全国交流集会」が東京・三鷹で開かれます。十一月十二日・十三日を予定しています。実行委員会が準備に取り組んでいます。

ねしてみたんです。それ以来、行って仕事を手伝ったり。

（この報告は、冬増刊号をお楽しみに）

能勢に比較的近い豊中市にお住まい。今の

〈新しい家庭科を創る ために・小学校では〉の

岩瀬 志津子 さん



泉丘小学校は、今年十年目とか。「おみそ作り」も、年を重ねた実践で、結びの「食べにいらつしやいませんか」には、思わず引き寄せられてしまいました。PTAも職場も、いっし

吉村さんのような行動をしている方は少ないと思います。勇気のいることだと思いますが、どうぞがんばってください。

吉村さんのように男女共生を求める男性がふえてくれることに期待をかけています。（教育委員の準公選をすすめるための全国連絡会・前橋弘子）

吉村さんのように男女共生を求める男性がふえてくれることに期待をかけています。（教育委員の準公選をすすめるための全国連絡会・前橋弘子）

よに、全校でおみそ作りをする学校って、なんてすばらしい！

「あんまり、ほめなくてください！ PTAの方たちと、石けんづくり、合成洗剤の問題、性教育など、いっしょに取り組んできました。今年はおやつづくりをしましょうなんて、声がかかってくるんです。私も自分の勉強にもなるので、声がかかると、うれいすね」

趣味は、ハイキング。堺ハイキングクラブ所属。昨年の夏は台湾の玉山（三千米級）に行つてこられた由。

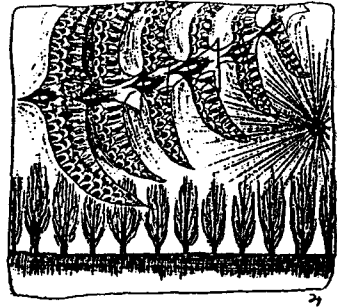
岩瀬さんのお話も、今回のフォーラムテーマ「ゆたかさを防ぐー人が人と向きあうところ」で、とても生き生きと印象づけられた一コマでした。（青木）

海の輝く日

冬道麻子さんのこと

佐藤通雅

(カットも)



今年もまた一袋の新茶が送られてきました。お茶好きの妻と私は、さっそく白湯を注ぎ、そのまろやかな味を舌の上に乗せて楽しみました。

冬道麻子さん。短歌雑誌「塔」に加わっていた冬道さんが歌集『遠きはばたき』を出したのは一九八四年のことです。批評特集をしたので書いてくれないかという依頼が、やがて舞いこんできました。一瞬、ためらいを覚えました。なぜならこれまで冬道さんのことは、全く知りませんでした。私は教師をやっているかたわら、もの書きのはしくれなものですから、雑誌やら本やらが毎日五冊平均送られてきます。その一つ一つに札状も書けないし、まして全部読むこともできないので、とても心苦しい思いがしています。しかし、もし

書評など依頼されただけ書こうという方針でしました。無理にも時間を割いて読めば、第一自分の勉強になりますし、第二に思わぬ結びつきができたりします。考えてみればこの「We」とのつきあいだって、原稿依頼に端を発したのです。個人編集誌「路上」の発行者としての自分が、半田たつ子さんに依頼したのです。私の方は半田さんをいくつかの書物を通して知っていましたが、逆に私のことは全く知らなかったにちがいありません。にもかかわらず書いてくれました。もし断っていたら、新しい結びつきに発展することはなかったでしょう。そういうことを経験的に知っているものですから、依頼はできるだけ受けていこうとしてきたわけです。おかげで月に平均して五つ、長期休業には十ぐらいたまわって、薄っぺらな能力をしぼり出しつつ四苦八苦している状態です。

冬道さんの歌集も、高く積み上げたまま読む機会を逸していた一冊でした。しかし頁を開いていくにつれ、その美しく剛い詠み方に魅せられていきました。

鉄路刻み近づく音は貨車ならん窓なきものを安らぎて待つ

海面にせりあがらんと濃密にかさなる水の下にまた水
オルガンは空気吸いつつ鳴るゆえに幼き日より苦しく聞
きぬ

郭公の雛の口腔赤きゆえ林はひと目ひと目ふくらむ

ゆうかぜに吹かれ歩めば白花にやさしく肩の翼押さるる
すぐれた歌はまだまだいっぱいあります。ものを見る眼の
たしかさはいったいどこから来るのだろうか、生の一つ一つ
をいとおしむような感受性はどこから来るのだろうか――。
未知の歌人との出会いを喜びながら、私は何回も自問したの
です。そこで半ばで作品を止め、あとがきを読んでみました。
た。

まさに胸をつかれる思いがしました。九歳頃、発病を自覚
します。病気とは進行性筋ジストロフィーです。しかしその
ことを親に訴えません。「発病の自覚から二十一歳まで、つま
り十二年あまりの日々を、私は肉親にひたすらこの病気を隠
して生きた」。治療法の見つからない難病、天折……それく
らいなら親に知らせず、悲しませずやっていこうと決意した
のです。九歳といえはまだ少女期です。さらに思春期があり
ますが、一貫して病気を自分で引き受ける、自分だけで引き
受けるというふうにして来たのです。が、ついに耐え切れな
くなります。「二十一歳の時、疲れ果てて父母の胸にとびこ
み、十二年余りの異常な日々に終止符を打った。私は極度の
緊張から解放され治癒したごとく天にも上らんばかりの日々
にあったが、父母の嘆きを見る度に隠し続けた罪の深さを改
めて思った」。

美しく剛い魂とは、こうした体験から生まれたものだった
のです。私は再び作品に返り、一首一首の重さと対面しまし
た。

おのが死期さととりて群れより去りゆきし象のこころを幾
年も追う

身に深く薔薇の花咲く思いありうつすらとつく体力のあ
り

憂き節をとりとめもなく聞きおればこの世は途方もなく
広きかな

難病や身障に対する関わり方（思想といってもよい）を、
私たちはまだ確実に手に入れていません。しかし、ここから
退いてはいけないぞという線はすでにあります。その一つは
同情やあわれみ（あるいはあわれみを乞うこと）は、かえつ
て垣根を高くするだけだということです。第二は健常者のと
らえている世界は一面的なものであって、もっと別の視線の
層があるということです。現に『遠きはばたき』一卷は安易
な同情を拒んでいますし、その作品世界は視線の層に厚みを
加えています。そんな思いを書評に綴りました。以来のつき
あいです。現在は病臥したままですが、創作欲は衰えていま
せん。

冬道さん、今年もおいしいお茶をありがとう。

今、子どもたちの世界は

「カンけり」

塚越 敏雄

「先生、カンけりやろ」

三年生のコウ君が、そう言ってきたのは、昼休みのことでした。実は、二、三人の決まった友だちとしか遊ばない子どもたちに、何日か前に挑発をしておいたのです。

「学校へ来ての一番の楽しみが友だちと会って遊ぶことだつて言うわりに、みんなあんまり遊んでないんだね。休み時間中、ぶらぶら歩いているだけだつたり、一人で本を読んでいた……」
「オレなんか、いっつもドツヂボールやつてるよ」

元気なテツヤ君が反論してきます。
「ドツヂボールもいいんだけど、ほか

におもしろい遊びは知らないの。ぼくなんか小さい頃は、学校から帰ると家になんかいなかったね。すぐ表に出て、『○○やるもの、この指とまれ』って近所の友だちを集めるんだよ。それであくればやつたり、カンけりやつたり、ビー玉やつたり、石けりやつたり、母艦水雷やつたり……。実におもしろかったな。もう、夢中になって遊ぶもんだから、気がつくとも真暗。それに、服は、どろだらけ。家に帰ると、『暗くなつたのがわからなかったの』って、お母さんからよく叱られたもんだよ。それでもおもしろいもんだから、次の日も同じように遊びに行つてね……」

聞いている子どもたちも、やりたいなという顔をして、こちらを見つめています。

「なんで、みんなは外で遊ばないの」

「だって、家に帰ると、みんなピアノや習字なんかで忙しいんだもん」

「それだったら、学校で遊べば。今度みんなで、カンけりでもやろうか」

ウワーツという歓声が教室中に響きわたります。

さつそく次の日、子どもたちが「カンけりしよう」と言ってきました。でも、断りました。カンを持つてこなかったからです。自分たちで遊ぶ道具を自分たちで準備してくるのは、あたりまえのことです。

その次の日には、ある子がカンを持って「カンけりしよう」と言ってきました。でも、断りました。一緒に遊ぶ仲間を集めていなかったからです。仲間を集めることは、遊びを成立させるためにはならない条件です。

そんなことを繰り返して、ようやくコウ君が登場したのです。フミちゃんも私の方に寄ってきました。

「カンも、ちゃんと用意してきました」子どもたちも三十人近くいます。私の方は前日の寝不足のため体が重かったのですが、そんな言い訳は許されないような、子どもたちの迫力でした。

子どもたちの中には、一度もカンけりをしたことのない子もいました。それに、したことがあるといっても、三十人近くするのは初めての経験です。そこで、大勢でやってもおもしろさを失わないようなルールに変えました。

思いきりカンをけります。カラカラと転がる音がします。花壇の茂みにかくれ、カンをけるチャンスをねらっている子もいます。花壇のわきの砂利の上に、はいつくばって隠れている子もいます。オニが捜しに来そうもない体育館の裏に行つて、おしゃべりしている子もいます。私の近くにまといつ

てくる子もいます。オニに見つかриはしないかとドキドキしている子もいます。オニになりたくてなりたくてたまらない子もいます。

それぞれがそれぞれの楽しみ方をしているわけです。

そんな私たちの様子を見ていた一、二年生くらいの子が、「入れて」と言ってきました。「うん、いいよ」と答えながら、私が小さい頃よくやっていた遊びの多くは、「来るものを拒まない」「ものだったことに気づきました」。

人数が増えても遊びのおもしろさが失われぬものが多かったのです。それに、技術的にじょうずでなければ加われないものばかりではありませんでした。ですから、いろいろな子が参加でき、楽しめる枠が広がったのです。

しばらくの間、子どもたちは、空きカン一つに夢中になって走り回っていました。私は、徐々に子どもたちの遊びの輪から消えていくようにしてい

ました。遊んでいる途中でいなくなったり、「後から行くから遊んでね」と言ったり、「今日は忙しいから自分たちで遊んでね」と断わったり……。

子どもたちの遊びは基本的には子どもたちが組織し動かしていくものだと考えているからです。ですから、大人の出る場は、あるがままではできなくなつてしまつた遊び集団を、子どもたち自身が組織していくための、手伝い程度にとどめるべきだと思ふのです。

カンけりによつてみんなが遊ぶことの楽しさを味わつた子どもたちに、私は他の遊びも知らせていきました。そんな中で、私がいなくても「中休みにSケンやろう」と大声で呼びかける子が出てきました。みんなを集めて敵に勝つための作戦を立てている姿も見られるようになりました。「子どもたちが動いている」「そんな手応えが、運動場でも教室でも感じられるようになっていきました」。

経済の目

生活サイドから見た経済

高齢化社会の負担と
国民所得の増加

福島澄香

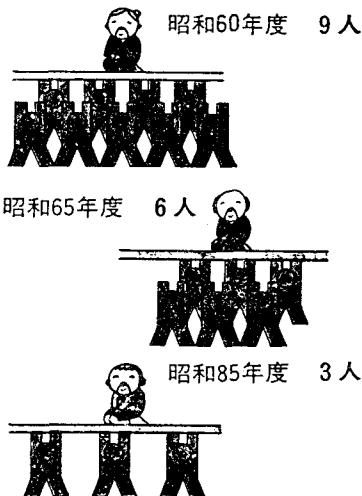
学校の廊下に貼り出された政府のポスターには、どうにも
気になるところがある。

ポスターの中心には下の図が描かれ、一九八五年には九人の年金加入者で負担し、九〇年には六人、二〇一〇年には三人で支えることになるという。生徒たちに「どう思う」と問えば「高齢化社会になって私たちの負担が重くなることでしよう」と誰もが答える。さらに問えば「保険料が高くなる」「そのため今より生活が苦しくなる」という。

政府は、なぜ、このような暗いイメージを与える図を描くのか。

高齢化社会といっても技術革新が進み、GNPや一人当りの労働生産性、国民所得が急増している時代である。そんな

老齢年金—受給者と被保険者
(厚生年金保険)



ことで国家財政の規模も年々大きくなり、税金の自然増収も昨年は六兆円、今年は十兆円で一九九〇年までには赤字国債の発行も無くなるという。

表1の各国の「一人当りの国民所得」をみてほしい。

戦後の一九五〇年と一九八七年の現在を比較すると、どの国も戦後の技術革新によって一人当りの国民所得が増えている。世界平均で二倍。日本は約七倍の急増である。これは、高度成長期だけでなく一九八六年と八七年の一年間をみても大変な増加ぶりである。これはハイテクを中心とした技術革新による労働生産性向上の結果である。政府も今後の経済成長率を四%以上の伸びとみていることを考えれば、当然一人当りの国民所得は急増してゆくはずである。

国民の労働の成果である国民所得が、どう配分されるかは別として、赤ちゃんから寝たきり老人を含めて一人当りの平均国民所得の急増は、21世紀の高齢化社会を支える経済的基盤として現在の社会福祉水準どうか、国民の願う豊かな高齢社会を実現するのに充分、余力のあることを意味する。

日本は人口高齢化速度だけでなく、これを扶養するための労働生産性の上昇速度もまた国際的にみてずば抜けて高いこ

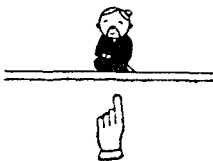
表1 一人当りの国民所得

	1913	1920	1929	1938	1950	1986	1987
世界平均	550	485	615	630	780	1525	1550
米 国	2325	2425	2900	2700	4275	6675	6825
日 本	700	725	960	1125	850	5775	5900
イギリス	1700	1800	1835	2075	2300	4200	4300
西ドイツ	1700	1050	1675	2450	2000	5825	5975
イタリア	1050	1050	1220	1220	1275	3800	3850
ソ 連	350	120	365	640	1100	3750	3900
中 国	125	130	135	135	130	475	500
発展途上諸国	180	180	180	185	225	400	415
東欧社会主義諸国 (ソ連を除く)	550	550	800	850	1235	4100	4150

とを忘れてはならない。一九五〇～七九年の二十四年間の国民一人当り実質GNPの年当りの成長率は七・三％で他の先進諸国に比べて高いことを示している。そのことは、世界的低成長期に移ってからでも変わらない。たとえば一九七九～八五年の国民一人当り実質GNPの一年当りの成長率は日本の三・五％に対して、アメリカは二％、西ドイツは一・七％、イギリスは一・三％であった。この傾向はこれからも当分は変わりそうもないという。

日本の経済的成長や国民一人当り平均としての所得増加を一部の人たちの資本の蓄積だけでなく、福祉など国民に還元すべきではないだろうか。老年人口の増加だけを強調して「高齢化社会」国民一人当りの労働生産性や国民所得の増加をみないのは片手落ちであろう。

右の図は、人口構成だけを考え、わざと経済成長を無視したもので、支える人の立場から見れば、支える老人の人数が年ごとに増えて経済的負担が大きくなるように思えるが、技術革新にもとづく経済成長を見込めば、図とは逆に支えられる老人の人数が減る。どうしても支えられる老人数が人口構成上増えるというならば、老人を支える一人一人の負担が極端に減らなければおかしいことになる。





ダブルポケット

子潤信國

アメリカの共働き夫婦は今

⑪ パムとダンの場合

幼い子供のいる共働き夫婦のいくつかの例を紹介してきたがそのどれもが、経済的收入という点では男性側が現在、あるいは将来、上になることが確実な事例であった。男女の経済力の差が、女性の家事労働分担に何らかの影響を与えているということは否めない。女達の職業進出の浸透と共に、子供のいる有識女性のほとんどが、二人分の仕事を一手に引き受けるようになってきているのはアメリカも同様である。市場労働で八時間、そして帰宅してから家庭内労働で三時間程というのは多くの母親の二重労働時間割である。その背景には、男性はより高い収入を得ており、かつ昇給

のペースが安定しているので、帰宅後、より多くの自由時間をもつて当然である、という無言の了解が共働き夫婦の心の中にあるようだ。女性の賃金の低さ故に帰宅後の家事がより多く妻にかかるのを女の側もしかたないと考えてしまう。つまり職場での同じ八時間の労働の価値が男女間で異なるならば、価値の低い労働者の方がより長い時間働かねばならない、という経済の論理が、語らずとも、家庭内労働にも適用されてしまっている。このためにアメリカの共働き夫婦の間でも、やはり妻の側に実際の家事分担も、また家族への精神的配慮もより多くかかってしまっている。

では、この母親へのより多くの家庭内役割の過重は、経済要因のみのためなのだろうか。これから紹介する事例がこの問いへの一つの答を示してくれる。

◎

パム（ペメラ）とダン（ダニエル）の場合

妻。パムの背景

年令Ⅱ35歳、人種Ⅱアメリカ人・白人、子供Ⅱ二人（六歳女児、三歳男児）、職業Ⅱ企業管理職、収入Ⅱ月収三千ドル（一ドル二百円換算・調査時期一九八二年）、最終学歴Ⅱビジネスアソシエイト（経営学）修士、姉妹等Ⅱ姉二人
夫ダンの背景

年令Ⅱ35歳、人種Ⅱ日系アメリカ人、職業Ⅱ弁護士（自分

の事務所あり)、収入Ⅱ月収千六百ドル、最終学歴Ⅱ法学部
大学院修了、兄妹等Ⅱ第一人(病死)

事例概略

妻パムは大学院時代に結婚し、妻が働きつつ夫が弁護士資格をとった。第一子(女兒)出産後妻は出産休暇六カ月をとり、さらに一年間休職していたが結局退職。専業主婦となった。しかしその間子育てのみでは満たされず第二子(男児)を出産した頃はパートで働いていた。このパートの仕事につくときのパムのエピソードは、ドラマチックである(次号参照)。その後異例の昇格と、会社の急成長故に、弁護士である夫ダンを上回る収入をここ二年程で得るようになっていく。パムは仕事にやりがいを感じ仕事をしているとき、自分がとても生き生きできるという。夫はハワイ出身の日系アメリカ人で、苦勞の末税理士になった父の期待を一身にあつめ、近年妻の援助もあつて自分の法律事務所をもてるようになった。しかし仕事は決して楽ではなく事務所開設時の出費故、家計に収入を回せないこともあつた。しかし仕事は順調に増えている。最近特に多いのは離婚の際に子の養育権を要求する父の増えたことだという。家事分担は今ではほぼ半々になっている。夕食は常に夫が準備している。週末の夕食のみ妻が分担している。このような分担もかつては妻が全てやっていたが、過重で病気になることから変化してきたという。今

は週に一回家事をしてくれる女性を雇っていることと、子供は下が三歳になり保育園に行くようになりベビーシッターは雇ってはいない。しかし乳児の頃にはフルタイムのベビーシッターに来てもらっていた。妻の収入が夫をはるかに越えている事例であるが、妻の心の中の二重役割への炸裂感強い。これがどこから生じているのかは興味深いところである。また夫の方は家事、子育てに深くかわっており、仕事も家庭役割故にかなりペースを落としている。ダンの場合収入が妻の方が上であることを多くは語らないが相当気にしている。そして妻の方がここ二年程で自分の収入を上回ったことを親戚や、夫の同僚には全く話さないという。妻の企業管理職としての仕事ぶりをダンは高く評価しパムは高収入に相当する仕事をしていると賞める。しかしそれを他の人に言わない、という屈折したところをもっている。妻が就職↓出産↓退職↓再就職に至る状況を語っている部分を以下に紹介してゆこう。

◎

RⅡパム 妻 QⅡ調査者(女性)

QⅡもし子供が病気になるたら夫が家において子供の世話をするということがありますか。

RⅡいいえ、ほとんどありません。夫は法律事務所をもつていて、法廷にも週三回行きます。予定がカッチリ決まって

いて、急に変更できません。だから私の方が予定を変えて病気の子供をみます。

Q―子供に対して罪意識をもっている働く母はとても多いのです。するべきことを十分にしていないという感覚をもつようです。十分にうまくやっている場合でも。

R―それはよくわかる感覚ですね。六年前に上の子を産んだときがそうでした。私はその頃子供ができたら仕事はやめようと思っていました。

Q―そうだったの。

R―私の母が働くことを父はダメだといったし、私の二人の姉達も働きたがったのに父は許さなかった。だから姉二人とも専業主婦です。私はビジネスアドミニストレーシヨンの修士をもっていたのですが……六十年代でその大学でこの資格をとったのは女性では二人だけでした。

Q―えっ二人だけですか？

R―そう、でも私は教職につく気はなかったし、ビジネスに向いているとは思ってた。それでも当時は女は子供ができたら家にいるべきものと信じていた。

Q―ビジネスアドミニストレーシヨンの修士の資格をもっているながら、最初事務の仕事にいたのですか？（意外そうに）

R―そうよ一九七〇年はまだそんなものでしたよ。企業の管

理者レベルは全て男性でね。

Q―男たちをはじめは事務職レベルから始めるのですか？

R―いいえ。私の仕事も事務職として採用されましたが実際の仕事は工場地開発、社員の保障等いろいろ。その間私が仕事をどんどん拡大したので昇格も早かった。

Q―全力投球したわけね。

R―そう、でも十一年前（七〇年代前半）はそれでも月収、六百五十ドルをくれと上司に要求したら、彼がそれは高すぎる、あなたはその給料に相応の仕事をしていると思うかと聞くわけね。

Q―ほー。

R―それで私は言ったの『夫が今法学部で大学院に行っていて一単位七十ドルかかるのでそれを支払うのは私だ』ってね、そしたら上司が『じゃあなたはじきこの会社をやめるでしょ、夫が弁護士になったら子供でもつくって退職するでしょ』というわけ。とにかく最初の職を得るときはこんな具合で、タイピングテストを受けるといふの。だから私はタイプを打つ仕事をする気はないからそれは受けないといつてやったのよ。そこで二年間仕事をして……第一子の出産でそこを退職したわけ。つまり面接のとき上司が尋ねたとおりになったわけ。その後ね、社会も私も大きく変わったのは……。一九七五年の初めの頃だったわね。

春香伝

李朝第四代の王、世宗の提唱でハングルが創られたのは、学問のない民衆のためにという願いからだだったが、民衆が実際に読み書きの恩恵を受けられるようになったのは、ずっと後のことだった。とはいえ民衆は、文字によらず、口で語り耳で聞くという強力な意志表現と伝達の手段を持っていた。

たとえば、李朝民衆の最大の娯楽の一つにパンソリがある。パンとは場所、ソリとは音のこと、つまり人々の集まる場所で催される大道の語り芸だ。出演者は二人。広大（クワンド）とよばれる歌い手が、扇を一本持っただけで、声音と手ぶり身ぶりで物語を語り、プクという太鼓をたたき相方が、微妙なリズムに合わせ、かけ声をかけながらテンポを創ってゆく。聴衆もまた単なる聞き役に止まらず、物語の進行につれて笑い、泣き、時に「いいぞ!」とかけ声をかけながら劇の参加者となるのである。

パンソリの全盛期、その代表的演目が「春香伝」である。現存するのは五種、その代表的演題が「春香伝」である。

全羅道南原の府使の御曹司、李夢竜が、妓生の娘春香を見

歴史の窓

岡 百合子

すめ、契りを結ぶ。しかしその後李夢竜は、榮転する父について都に去った。残された春香は、新しく赴任して来た府使に目をつけられ、妾になれと迫られる。春香は李夢竜に操を立てて獄につながれ、あわや殺されようとする時、李夢竜が現れる。李夢竜は都で科挙に合格し、暗行御使という不正官吏を取締まる役人に出世していた。悪徳役人は罰せられ、二人は涙の再会をとげる――。以上が粗筋だが、あくまで粗筋に過ぎず、語り手は筋にそいながら種々の歌、時にアドリブを入れて劇を盛り上げる。李朝政府はこの「春香伝」を、操を守った烈女、儒教道徳の模範として推奨したというが、民衆の愛した春香とは、むしろ人間としての主張を貫いた、一人の女としての春香だったと言えまいか。

最初私は、本でこの「春香伝」を読んだ時、その露骨な性描写や、わき役の下層民のえげつないユーモアに、いささか驚いたものであった。香りの高い「古典」を予想していたからである。しかしよく読みこめば、それは民衆のおおらかなエネルギーの現れである。特定の作者のいないこの作品は、まさに民衆が優しさやバイタリテイの表現として創り上げた作品なのだ。それは、文字を頼りに感動を得ようとした私には、入ることの出来ない世界なのだった。

(26) **第一次及び第二次「女子学生亡国論」** 女子学生の増加への批判とその後

昭和三十七年「婦人公論」三月号に早稲田大学教授暉峻康隆氏が「女子学生世にはばかる」と論じ、続いて翌月の同誌に慶応大学の池田弥三郎教授が「大学女禍論」を発表された。私学の両雄の教授たちによる女子学生への痛烈な批判は、男性支配のマスコミの恰好の餌となつて、「女子学生亡国論」にエスカレートされた。戦後の教育民主化により大学の女子への門戸開放後、年々女子の大学進学が増加し、特に文学部、中でも文学専攻学科における女子学生の占有率は急増し、男子学生を凌駕する勢いとなつていた。暉峻教授の論旨は、女子学生は本来結婚志向で、単なる教養のための進学であり、従つて勉強態度も甘く、学問の後継者が育たない。また教える側も教養番組に出演する気分で張り合ひがないということであり、池田教授はより辛辣な切り口で、女子には学問の将来を期待出来ないのみでなく、経済的にも損失だと言ひ、その理由として、彼女等の場合、父兄も熱意が薄く、大学への寄付が少ない。また卒業後も女子は社会的活動が乏しい上に、結婚後は一層母校への寄付が報待出来ないから、私学にとつては大損失であるとして、女子学生の増加を「女禍」とまで極論した。これらの

暴言に対し、女子を学問の後継者又は社会の戦力に育て活用しようとし側問題があるとの反論や、夫の母校へは寄付するが妻の母校への寄付には消極的な男のエゴを指摘する論、さらにたとえ社会的活躍をせずとも賢い母を多く養成すれば社会文化全般の向上になるなど、多くの女子の大学教育擁護論が展開されて、「女子学生亡国論」はいつしか衰滅してしまつた。ところが昭和四十一年、熊本大学の柳本学長が、産学連繫の立場から女子の大学進出、特に薬学部における女子優勢を批判し、女子の入学制限をほのめかしたことから、再び「女子学生亡国論」がマスコミの題材となつたが、今回は世論も沸かず、すぐ消失してしまつた。

そして昭和五十六年「女子学生亡国論二十年目の回答」と題したシンポジウムが、各界で活躍中の女性達によつて開かれ、多くの職業的・社会的障壁を乗り越えての実績が紹介されて、女子の大学教育は亡国どころか社会進展に寄与したことが証明されるとともに、まだ残存する女性軽視の壁に対する女性側の積極的努力と自覚をも促したのである。

ワンポイント 近代日本女子教育史 秋枝蕭子

子 育 て そ の 4

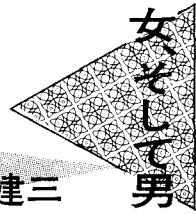
子育ての命題として、早く自立できる子にしたいということについては、すでに述べた。もうひとつの、男女の区別をしないで育てるという考え方をどうして持ったのか、あまりはつきりしない。女姉妹三人の中で育ち、小学校三年から大学出るまで、女子だけの集団で成人したという生い立ちからなのか、何かの本で得た知識なのか定かでない。「男の子はいつまでも泣かないのよ」「女の子はそんな遊びをしないのよ」「男の子は……女の子は……」という社会通念上の言葉を、いっさい使わないで育ててみようという実験を試みた。ただし、母親である私がそうしようとしたのであって、父親である夫に協力を頼むほどの自信や信念があつてのことではなかった。

一人っ子のせいか、二、三歳ごろまでは、家の中で人形遊びをすることが多かった。自動車や積木などでも遊んだが一人遊びが比較的多い子であつ

た。人形を自分の立場に、自分を母親の立場に置きかえての一人芝居を演じている風であつた。人形に対するしぐさや、声かけは、私が日常何気なくやっていることの再現のように思えた（父親像があまり出てこなかったのは問題でもあるが）。このことは、親としての私の反省に十分なりはしたが、男の子が人形遊びをするのはおかしいとか、やめよとか言うことは一度もしなかった。

信州は冬寒いところである。子どもたちは冬中長ズボンをはき、厳寒時にはズボン下も身につけているのが常であつた。春先のボカボカと暖かな午後、戸外で数人の子どもたちが遊んでいるのを何気なく眺めていた時、一人の女の子が、「私、スカートはいてこようつ」と言つて自分の家の方へ駆けて行つた。そうしたら他の女の子も「私も」「私も」と言いながら、それぞれの家へ帰つていった。その光景を見ていたわが息子は、私のところへ来て、「お母ちゃん、僕もスカートはく」と言つたものである。これにはさすがの私も弱つたと思つたが「あなたのスカートは、まだ作つてないのよ」と切り抜けた。「男はスカートをはかない」というのは、私の口からは言えないことだつた。その後、スカートのことをねだられたことがないということは、いつしか、本人にもわかつたのだろう。

フィリピンで かわした会話



田川建三

六月末から七月はじめにかけて九日間フィリピンに行ってきたので、そこでかわした会話を少し御紹介することになります。と言つても、現在のフィリピンの状態はその経済構造の重苦しさをぬきにしては何も語ることはできず、従つてまた、その重苦しさを押しつけているのが日本経済である以上、我々の責任をぬきにしてそのことを語るわけにもいかないのですが、それはまた別の場所です。書くこともあるでしょうから、ここでは、そこで出会つた人々の言葉を紹介することにします。そしてまた、ほんの九日間居ただけでその国のことがわかるはずもないので、ここではただ、たまたま出会つた何人かの人々とかわした会話をそのまま紹介するだけです。

ある小さな漁村に泊めてもらつて、その村の男たち六、七人の話を聞いていた時のことです。村でも社会的・政治的な問題に取り組む活動をしている人は多いのですが、その男たちに、同行のイス人の青年がたずねたものです。ヨーロッパではそのような活動にかかわる男たちは、自分の妻や恋人が同じ活動に参加するのを好まないが、あなた方はどうですか、と。彼らは一瞬その質問の

趣旨がわからなかったみたいでしたが、ちょっと考えてその趣旨を理解すると、すぐに笑いだし、どうしてそんなつまらないことを気にするのか、あなた方はぜひ分と男中心主義者だ (male chauvinist)、と答えたものです。日本ではごく少数のフェミニストの女性だけが知っているこの英語の単語を、ひなびた村の男たちが普通に使っている、ということに私は驚きました。女性問題についての彼らの意識の高さがよく示されていると思います。

また別のもっと小さい村 (人口二百人ほど) では、男たちの組合と共に女たちの組合も組織されていて、そこでさまざまな社会的・政治的問題について話し合うとのことでした。そして、両者は日時をずらして集るので、子供の世話や食事の仕度なども、妻が集会に出ている時には夫がする、という具合に、ごく当り前に夫婦で協力してやっている、とのことでした。竹で作った、ほとんど小屋と言つていいくらいの貧しい家でしたが、ちやうど夕方のスクールで、薄暗がりでの雨の音を聞きながらその話をしてくれた平和な夫婦の姿を、私は忘れることはないだろうと思います。

警察

アメリカには交番がありません。ですから私は非常の場合しか警察に会いませんでした。子どものころのある日、友達とうちのそばで遊んでいると、犯罪者を捜している警察官が私たちの方に叫びながら、走ってきました。彼はピストルを持っていたから怖かったです。そして、私はアメリカの警察は大体怖いと思っています。けれども東京では交番のそばに住んでいるので、毎日警察官に会いますし、あまり怖くありません。それで、東京では人々が警察を好きでないのでびっくりしました。警察が失礼だということです。それに新聞によると、そういう人は時々正直じゃないそうです。たとえば、このごろ、ある警察官は銀行強盗をしました。けれども私の経験では警察官はいい人なので、そういうことは珍しいと思います。

うちに近い交番にいる警察官は優しそうです。ある晩遅く帰ると、よっぱらい二人があばれて交番に入って行きました。アメリカならその二人は警察官に撃たれたでしょう。しかし、東京の警察

不思議の国ニッポン

クイトン・ナフ

官は、よっぱらいによく話すことでなめました。他の日、私が新宿駅で山手線を待っていると、馬鹿な人が女の人を叩くのを見ました。警察官がす早くきて、その人の手をしっかりと持つと、彼はかんだり蹴ったりしました。けれども、そんなに乱暴な人にでも、警察官は逮捕するまでピストルを撃ちませんでした。私は感心しました。なぜ、人々は警察が嫌いなのだろうかと思いました。

それから、歴史の本を読んでいくうちに、わけが分かりました。戦争前や戦争中に警察がみなを圧迫したそうです。人々は警察のせいだ自由がほとんどなかったそうです。アメリカでは昔、警察が弱かったから、犯罪者は普通にくらしている人を圧迫しました。ワイルドウェストやシカゴのアルカポネなどが今でも有名です。

このごろもドラッグを売るマフィアの犯罪者が強くなってきました。ですから、アメリカの警察が怖いのに対しても、人々は彼らの努力に感謝しています。日本の社会は大体平和ですが、もし警察がやくざをよくおさえることができれば、人々は批判のかわりにもっと感謝するだろうと思います。

一人の若者が、広島原爆資料館にある、三人の中学生の遺品でできた「三位一体の人形」の話に心打たれ、その時浮かんできたイメージをもとに映画を作った。ある日、人形が、ヒロシマという名の少年になって現代の広島にやみがえり、朝鮮の少女に助けられながら、一日だけ、母を捜す旅に出るという話。

彼は今まで特にヒロシマに関心があったわけではないので、必死で勉強。翌年、大学四年の夏、30万円で買った中古の16ミリカメラを携えて広島へ。友人等の協力を得て一月ほど撮る。出演者は、地元の少年と少女。たずねあてた、遺品の主のお母さん達も、俳優を雇うゆとりがない様子を見て、依頼に応じてくれた。フィルムはギリギリしかなかったが、不思議にきれいに撮れた。が、そのあとが大変だった。市場などのアルバイトで資金を稼ぎながら、原爆・朝鮮人強制連行のフィルム・原爆の絵（子どもの反応を考えて、生々しい写真とは避けたかったという）などの当時の資料を挟み、四年がかりで編集。でき上がったとき、語りや音楽はプロの、それも「一流」の人に頼みたいと思った。語りー吉永小百合。音楽ー武満徹、ポスター・和田誠。ビデオと手紙を送っての、体当たりの依頼に、

三人共、無償で応じてくれる。かくしてこの幾重にも幸運で贅沢な試みは完成した。

菅田良哉。'58・9・13生、青森県八戸市出身。小学校卒業後、一人で上京、全寮制の男子校（中・高）へ。入寮式で「青森出身」を笑われて以来、自分は何もできず、周囲に受け入れてもらえないと思い込む、鬱々とした日が続く。高校を出たとき、トンネルから出

青春ZIGZAG



「ヒロシマという名の少年」

を作った

菅田 良哉さん

られたような解放感。周囲が初めて「ひと」として扱ってくれる。当時のことを思うと口惜しいが、あれがなければ、今の自分もまた、無かつたろうと思う。

岩手から広島まで、中・高合わせて22校回った。最初はふざけていた生徒たちも、途中でシーンとなり、上映後の彼の話にも、静かに聴き入るといふ。来年の夏には、二作目――

「信号ばか」――母を交通事故で亡くして以来、交通ルールを守ろうと周囲に説いて回り「浮いてしまう」少年の話（七〇分）――の完成を待って、二本立てで上映する予定とのこと。

菅田君に初めて会ったのは、中学のPTA主催で映画会を企画したときのこと。澄み切った明るさでも形容したいような、抒情的で心に響く映像や、挿入された資料（教材としても秀逸）の選び方に、並々ならぬセンスと才能を感じた。どこか突き抜けたような明るい彼の持ち味がそのまま映像になっているようで、日頃、戦争のことを描いた子ども向けの本に多い、湿っぽさと思い入れの過剰ぶりに、どこか違和感を感じていた私、これなら若い人の心に素直に届くだろうと、その新鮮な感覚が眩しかった。

映画を作り、観せることによって、いろいろな人と出会えたことがうれしく、もっといい作品を作りたくなると菅田君。七作目まで構想が既にできていて、十五年計画ぐらいで劇場経営などもやってみたいと目を輝かせる。

映画の上映時間は48分。出張・フィルムの貸出しの問い合わせは左記まで。

菅田事務所 ☎044-866-4101

稲邑恭子

もうちょんぼ、がんばらいやー

「夏、帰郷、ふるさと」

何かと慌たらしい夏休みだった。アルバイトをやめ、引越しをし、そして帰郷、帰京。半年ぶりの帰郷はハプニングだった。荷物をまとめ高速バス「キャメル」に乘ろうと浜松町駅へ行くと満席。出発時刻までねばってみたけどキャンセルもなし。それなら寝台列車「出雲」に乘ろうと東京駅へ。みどりの窓口で切符を買おうとしたらこれまた満席、キャンセルもなし。途方にくれたのも一瞬、次の瞬間には入場券を手にもうへ。そして車掌さんと直接交渉。車掌さんの胸には「米子車掌区」のネームプレートが。思わず方言：。「どげしてもこれに乗りたくないけん、なんとかしてござん」

「とりあえず乗っちゃよきない。二号車の車掌が寝台券持つちよーはずだ

けん」

なんとか列車に乗りこみ、出発。横浜駅をすぎたところで別の車掌さん。「乗車券と寝台券を拝見します」

おそろおそろ入場券を差し出し、「ここに乗ーよーに言われたもんで」「そげかね、ちょんぼしここでまっ

ちよきない」

約五分後、無事に寝台をあてがつてもらい、翌日松江に着いた。

その日のうちに、今回の帰郷の第一目的の自転車を購入。その自転車に慣れるために市内をぶらぶら。気がつくくと、小学生時代の通学路を走っていた。近所の友達と野球をして遊んだレンゲ畑が：ない！！下校途中ザリガニをとった池が：ない！！

道端一メートルしかなかったジャリ道の通学路が：舗装になつてゐる！！車まで走つてゐる！！そして小学校へ

：あれれ木造校舎がない！！ちよつと足をのばして中学校へ：あれれ

れ、学校がなくなつてゐる！！

わずか半年のあいだに変わったわけではない。しかし、わずか十年ちよつとのあいだにこれだけ変わってしまったのだ。

幼い頃の思い出を目で確かめることはもうできない。しかし心の眼には強烈に焼きついて残っている。

「あんだ、いまなにしちよー」

「バイトやめてなんもしちよらんが」

「これからどげすーね」

「どげすーだ」

「どげすーだじゃないわね」

会話をするとほつとする。景色はもう故郷じゃないけれど、人々はまだ故郷である。

時の首相じやないけれど、「ふるさと」を「ふるさと」のないうところ

に広めたい。「自然」も取りもどしたいけれど、それよりもつと、どこかゆとりのある豊かな心を人間の心に取りもどしたい。

はなにつき

藤

尾

知

子

くず

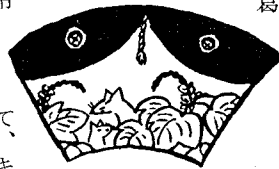
あしや どうまん おおうちかがみ
蘆屋道満大内鑑

恋しくば 尋ね来て見よ和泉なる 信田の森の恨み葛の葉
これは享保十九年（一七三二）竹田出雲によって書かれた
浄瑠璃、通称『くずの葉』の子別れの段のクライマックスに
出てくる歌である。あらずじを少し紹介してみる。

昔、陰陽師安倍保名に助けられた白狐が、保名が敵のため
に怪我をして、これまでと自害しようとした時、恋人葛

の葉に身をかえて介抱し、いつしか夫婦となり、息子
もさずかり、貧しいながらも楽しく暮して六年がたつ
た。ところがほんものの葛の葉が、保名の消息を知つ
てたずねてきたのである。素性を知られてはもはや人
間世界にいることはできない。別れに、眠る我が子の
枕元で母の情を切々と訴える。

「手習い学問精出して、さすがは父の子ほどある。器用
ものと褒められてたも。常々父御のお詞にも、虫けらの命を
取る、碌な者にはなるまいと、ただ飯初のお叱りも、母が
狐の本性を受け継いだるか浅ましやと、胸に釘針刺すこと
く、何ぼう悲しかりつるに、成人の後かならず無益の殺生し
やんな。何と夫や子に対する愛情にあふれた言葉だろう。



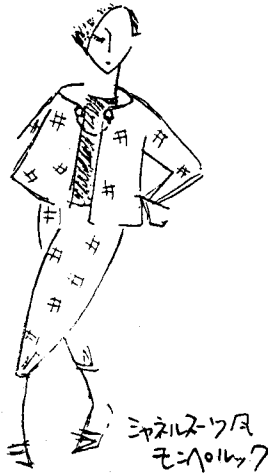
そこで名残りに書くのが「恋しくば」の歌である。葛の葉は
風が吹くと白い葉のうらがみえるというので、うらみは葛の
葉の縁語となっている。この狐葛の葉の恨みとは何であつた
のだろう。私は狐の身に生まれあわせたことへの恨みであり
悲しみであつたと思う。

この話は狐を主人公にした『しのだ妻』の伝説をも
とにしたものであるが、狐葛の葉にくらべ人間葛の葉
のなんと生彩なく描かれていることか。狐と狸のばか
しあいなどといって、良い意味で狐を使うことがなく
なっているが、昔、人間と動物達はもっと近い関係で
助けあつて生きていたのではないだろうか。子供を動
物園に連れて行った時、人に水を吹きかけるゾウがい
て、キャアキャアと逃げまわる人間を見ておもしろがって
るように見えた。トラのオリの前には「このトラはオシッコを
かけますので注意して下さい」と書いた札が立てられていた。
人間も動物もイライラとしているのだろうか、それとも地球
は自分達人間のためにだけあるように、思いあがっている人
の傲りを教えてくれているのだろうか。（カット・宮永由美子）

よそおい

まだまだ日差しは強くても、なんとなく秋の気配がして、今まで大好きだったTシャツが急に元気をなくしてしまふ。そんな時のための「よそおい」発、秋冬コレクション特報。と言っても秋冬コレクションは3月6日のミラノがスタートなのです。もう3月で冬ものとは、なんてせっかちな、だから暑くてフウフウの時にショーウィンドの中はウールの長袖というより暑い光景になってしまふ。今回の特徴はなんといっても

パンツの復活、これはうれしいナという気持ちと当たり前という気持ちが半々ずつ、なにしろ前回のコレクションが色鮮



やかなミニ、ミニのオンパレード。今話題のボディコンシャス(通称ボディコン)も流行元のアライアさんの、女性の身体に対する思い入れが強すぎちゃってね。まあ思い入れはなによりあった方がいいと思いますが。ちなみにアライアさんは男性です。流行って生活の中のスパイスとして欲しいけど、一振二振で十分でしょう。スパイスのききすぎたパストラミ

ビーフなんておいしくありませんよ。そんな訳で前回コレクションの反動というるか、思った程流行の服が売れなかった反省というるか、今回は着る側にたったスタイル、着る事を重視したデザインが特徴だそうですが、日本は今だにボディコンの威力はすごい。モンペパンツで登壇した京都府向日市議の飛鳥井さん、この普通さがいい。議会事務局が女性議員はスーツ、というなら、一度ボディコンスーツで登壇なさって諸先生方の反応を見られたらいいかがでしょう。意外と受けちゃったりして、私は怖い。一見シャネルスーツ風のかすりモンペルックというのでもいいかもしれませんよ。尊敬する先輩女性がコレクションを着たら? 女性だけの出版社としてもWeの大先輩、青鞥社関係では、元氣印の尾竹紅吉さん、若々しいアイデアいっぱいのアツキ・オオニシがいいかな。この服着たら最後まで元氣しましうね。伊藤野枝さんは、ニューヨークの働く女性が好んで着る、活動的なペリー・エリス。渋目だけど粋な色使い、大人のコシノヒロコは与謝野晶子さん、大柄な山田わかさんは、貫禄で着るハナエ・モリがお似合い。平塚らいてうさんは、ワイズかコム・デ・ギャルソンがいいな。低く無造作にたばねた髪に、袴を男のように低くはいていた、らいてうさん流の「アンコンベンショナル」な着こなしが、昔も今もキラリと光ります。

波

……
'88年 夏

私のテーマをこそ

……
半田 たつ子

いつとき、人々を沸かせた「甲子園」に幕が下り、夏が翳る。この夏、自然のリズムはおかしかった。異常な天候、大小の地震、人間の傲りに対する天と地の警告ではないかと嘯き合いました。

八月六日、九日、十五日、人間の愚かさとその犠牲になるいのちを思い巡らす夏、さらに三年前の日航機事故からは、フォーラムを終えた後、参加された方の無事帰宅を祈らずにはいられなくなった。今年の夏もまた、衝撃的な事件が相つぎ、厳然たる人間の死があった。

そして私たち家族は、愛くるしさそのものだったマルチーズ、ジョンを死なせてしまった。忙しい五人の二家族が、ようやく日程を合わせて、十年來の夢、黒四ダムを見に行つた。九月一日、アメリカに発つ下の娘へのプレゼントをかねて、その留守中のことだった。十二年前の春浅い夜、ふわふわの白い小犬を抱いて夫が帰宅した。二人の娘は歓声をあげ、長女の生まれた月と次女の生まれた日を

合わせて、彼の誕生日を七月二十五日と決めた。十三歳になるその日の零時一〇分、彼はペットホテルで冷たくなってしまった。見知らぬ獣医は傍にいたけれど、限りなく彼を愛した家族は、旅の快い疲れでぐっすり眠っていた。朝になつたら、きれいにトリミングをすませた彼を迎えに行く手はずだった。

七月二十四日、ほんとうは予定より早く帰京できた。でも、列車の指定席はとってあることだし、大好きな松本をゆっくり散索し、おいしいものを食べようということになったのだ。もし早く帰っていたらとか、でも迎えには行かなかつたらうとか、花で飾つた冷たいむくろを前に繰り言を並べたけれど、彼はもう帰つてはこない。人間が見ることのできる世界の何という狭さ。いのちの放つ光の前には、この世のすべてが色あせることを知った。雷に打たれたように。

いのちに人がまむかう時、人ははじめて己れの無力にたじろぎ、おののく。そのみが人間の傲りを打ちのめす。その痛恨を経ずに

は、人間は「生」のありがたさをわかり得ない。「生」と「死」を超えるほどのテーマは、人間にとってあり得ないと思うのに、私たちはそこを見ることが逃げている。どうでもよいことに気を紛らして。



ジョンの死をとつおい考えながら、長崎・大分・長野・大阪・鳥取…を訪ねた。旧知・未知の方々との豊かな出会い、それは鮮烈に、'88年夏を私の中に刻んだ。私が感動したのは、決まって「自分自身のテーマ」をもつ活動に接した時だった。

長崎から大分・海と山を訪ねる旅に、私は羽生楨子さんの『木、鳥、娘たちとわたし』を伴った。長崎は看護婦さんたちの研修会。日々、いのちに触れる仕事をしていらつしやる方たちに出会うには、木や鳥のいのちに心通わせる羽生さんの助けがほしかったから。

北九州をぐるっと回って津久見に向かう車中で、高校野球県予選で津久見高校が優勝したことを知った。迎えて下さった地元の先生

は「津久見みかん」の凋落ぶりを、高校生のほとんどが地元就職できず県外に出ていくことを話して下さった。子どもたちにどう希望を語るか悩むということ。(甲子園での津久見の精悍な闘いぶりを、私はムキになって声援してきた。)

青い南の海辺から、九州山脈に分け入り、緑の山の町玖珠へ。羽生さんがどんなにかほつとされるだろう。ここは、大切に木が守り育てられ、湯の宿には、なつかしい家庭科の先生方が待っていて下さった。その一人諫元正枝さんは、市議員二年生、家庭科で取り組んできたすべてが政治に通ずると語り、山本紀子さんは、ヘトヘトに心身をすり減らした日々から、「絆」をテーマにしたことでよみがえった、と語った。二〇年近く、父母と教師が教育を考える集まりを育ててきたこの町は、日米合同演習場に近く、戦車が轟音を響かせて通る。「平和」がみなこのテーマだった。

長野の南佐久で有機農業を始め、わずかに月半。もう地元で溶け込んで、八千穂夏季大学の運営委員になっている仁ノ平尚子さん。彼女を応援できるならと訪れた会場は、夜の闇にあかあかと灯が輝き、昼の労働に日焼けした方たちが集まった。金あまりニッポ

ンの観光に、農業を身売りしたくないと、学習を重ねている方たちだった。

能勢で開いたWeのフォーラムがどんな豊かさを紡いだか。それは冬増刊号一二二頁を費してもなお納まりきれないだろう。わずかなスペースに到底書けるものではない。実行委員の方たちは献身的なお働きの中に、お一人お一人がご自身をくつきりと描かれた。実にみごとだった。実行委員長の入江一恵さん自身「はつきり言って、お引き受けした時は、これほどの協力態勢が組まれるとは、思ってもみなかった」と述べられたほど。そして顧みて、一番大変だったのは「テーマが決まるまで」だったという。そうかもしれない。安易な思いつきのテーマではなかったからこそ盛り上がりだったのだ。関西でフォーラムを開く。私は、何をやりたいのか。自分のテーマが明確な人たちであれば一層、一つに収斂する難しさがあつたのだろう。

やることになっていくから、やらねばならないからではなくて、「やりたいから」が出发点になってこそ、人は元気づくのだと思う。家庭科の先生から「情報がほしい」「授業報告に頁を割いて」の便りをいただくたびに、それが私の役目と知りつつも、首をかしげて

きた。知らなければならぬ情報から目かくしされて、ニセの情報信じ込まされてきた悔しさは骨身に沁みているけれど。

数多の情報を取り込むのは何のためだろう？ 無知の愚かさに自分を安住させたくないから？ でも、知らなければならぬ情報入手する手段を知れば、それから先は自分の問題だ。ほんものの情報を精選し、それをどう授業に組み立てるか、その人の力量だ。ハッピ、みそ、原発、性、ライフサイクル、家族……「ひとまね」で生徒をひきつけることはできない。

私のテーマをつかむまで、人は右往左往し、つまづき、自他を傷つけもする。テーマも変転しつづけるだろう。でも「私はいま、これに燃えている」というものなしに、あり余る情報を手ぎわよく処理するだけでは、授業にいのちを吹き込むことはできない。

生後三か月にみえない赤ちゃん、ちっちゃなお姉ちゃんを抱えながらの西本和代さんの奮闘は、フォーラム参加者の目を奪った。限りなく「食」にこだわるという西本さんのテーマが、彼女をあそこまで駆り立てたのだろう。「食と環境といのち」、家庭科のテーマにあなたは燃えているだろうか？



半田 たつ子

『家教連20年のあゆみ』

家庭科の男女共学ひとすじ』

家庭科教育研究者連盟編

◆66年八月、75名で出発した家教連は、家庭科研究の民間団体として20年、官制研修会ではあき足らない意欲的な家庭科教師のよりどころとして、確実な足どりを続けてきた。いまようやく男女共学が確定したけれど、いち早く実践してきた家教連会員の先駆的な働きは大きい。本文と資料編の二部構成で、その地道な歩みがまとめられたことを喜び、会員諸氏のご努力に感謝したい。

(ドメス出版 三三〇〇円)

『大きな顔した調味料』

グループ「食」編

◆東南アジアでは「アジノモト」は「日本人」の同義語としても使われているという。そしてこの会社の広告がマスメディアにのって頻繁に流され「七十一歳のおじいちゃんから、ちっちゃなエリンまで：私たち大好きです!」というコピー付きたという。

誰一人物書きのプロでなく「グルタミン酸ナトリウム」についての専門家でもないグループが、三年間、「能率」という尺度で測ったらほとんど信じられない位ムダな時間を費して、この一冊をまとめ上げた。

「生活者にとって真に知りたい必要な情報は企業や政府からすすんで提供されることはむしろない。知りたいこと、知らなければならぬことは、自分たち自身で追求し、明らかにしていくこと、そのことの大事さをみなさんに示唆する役割を果たせたらうれしい」と担当編集者の「あとがき」にある。

いま径書房では「サラリーマンの生き方を考える会」を二年近く続けているとのこと。出版社の意欲的な「試み」にも、多くを学んだ。

(径書房 二七〇〇円)

『同時代子ども研究・1巻
食べる・飲む』

斎藤次郎・高橋恵子・波多野諠余夫編

◆子どもの食生活についての包括的研究、というと言葉は固いが、たいへんにおいしい栄養になる本だ。学校で教える「食」が、どうしても子どもの現実にはフィットしない、と嘆いている人たちにぜひ読んでもらいたい。私は「子ども味覚の文化史」「子どもの食嗜好とファストフード」「学校給食の思想」「食事の困らんの現在」をききぬ興味で読んだ。全6巻の筆頭を「食」とした編者の見識がうれしい。

(新曜社 一六〇〇円)

『こみち通信臨時増刊 原発あたりがとう!』

小原良子・日高六郎・柳田耕一対談鼎談

◆伊方原発の出力調整実験を契機に、反原発の行動はかつてない盛り上がりを見せた。その言い出しっべ、大分の主婦小原良子さんが日高六郎、抑田耕一氏を相手に明快に語る中に、新しい運動論がある。原発なしで暮したいをメジャーコピーにすること、マスコミとの対等な関係ということ、私にもやれるという気を起こさせるということ、などなど。スゴイ本だ。

(径書房 六〇〇円)

『麦 14号』

種—食糧と人生—

一条ふみ編

◆赤い表紙をめくるなり飛び込む「麦の地こ
とば」。ヒデ子婆ちや、ハギ婆さま、金太郎
さん、北上の百姓だつの言葉が胸を打つ。そ
して「大地の深部」と題した堀忠三氏のグラ
ビヤは、厳しい北上の山間部で黙々と土地を
守る老人と、昭和の初期を思わせる子どもを
写し出して圧巻。軽々しいことは何も言えな
くなくてはなう。

一条ふみさんが、生活記録文集「むぎ」を
出してからも二十十年になる。本号執筆を機
に「麦」と改めた14号を贈って下さった。久
しぶりの再会。一条さんは健在だった。

人間は、自身が生きようとして、ひたすら
種を蒔き育てて収穫をし、それを食み、再び
種を大地にもどして暮らしを守ってきた。そ
の単調、複雑な作業が人間の食糧として、人
間の種としての生命を守った。私達は今その
基本を守りきれず、人まかせ他国まかせにし
てしまい、種をよく守り育てている他民族を
軽蔑したりする。大地にしっかり根を張った
健筆11編がまぶしい。(発売 菩提樹小屋)

『月夜に消える』

佐々木赫子著

◆一人ぐらしの気難しそうな和田老人は、思
いがけないことに団地の夜ふけ、のらネコた
ちにえさをやっていた。小学校四年生のぼく
と和田さんとネコのふしぎな友情。怪我をし
て入院した和田さんが、月夜に現れてネコた
ちとともに遠ざかりやがて消えた—和田さん
は死に、グレタ、マレーネ、モーリス……個
性的なねこたちを二度と見かけることはな
くなった。あらすじを書いてしまうと味も素気
もなくなくなるのだが、これが冒頭の「月夜に消
える」だ。「登る」「遠い声」「たて笛ふこう」
と続く三編もまた、小さな人間の条理を
超えた世界を描き、限りなくひきつけられる。
生きるものの哀しさ、いとおしさ、生きて
あるということの不思議さ、ありがたさ。こ
の作品の世界に浸った目に、俗世でもてはや
されるすべてのものから光が失せる。

十三年間、私たち家族の一員であったマル
チーズのジョンが死んだ。その悲歎を、佐々
木赫子さんなら、どういう作品に結晶させる
のだらうか、と思うことで、私はやっと耐え
た。

(小峰書店 一一〇〇円)

『菜っぱのおいしい店へようこそ』

正木美津子・吉田みゆき著

◆とびきりすてきな二人の女が、京都に自然
派レストランびお亭を開いた。オープンのコ
ろ、私も訪ねたことがある。それから四年余
り。美津子さんの入院・手術というアクシデ
ントも乗り越えた。めし屋の労働ってどんな
の!?!に始まり、「新しい働き方を実現するん
だー!」に至る日々がハツラツ。スタッフが
語る美津子&みゆきの実像も。写真もイキイ
キ。(ブレインセンター 一三〇〇円)

『生活クラブ・ブックレット』

1 放射能と食品 2 輸入食品の安全性

◆生活クラブの食べものから、チェルノブイ
リ原発事故の放射能が検出された。生活クラ
ブは早速五つの方針を出す。その一つ、私た
ちの食べものと放射能、原発をどうしていく
のか、その具体的な活動を展開するための資
料としてつくられたのが1、シンポジウム
『食の国際化と私たちの食生活』の記録をま
とめたのが2、ともに非常に平易で、中・高
校家庭科の副読本にもおすすしめしたい。

(生活クラブ生協連合事業部 各三〇〇円)

わたくしからあなたに

◆四月号、平井雷太さんの「なぜ、行くのか 学校へ」を読んで、自分とおなじだなあと思いました。私もどもりだったからです。

中学校時代、卓球部の部長と体育部長をやっていたが、試合の翌日の月曜日がともいやでした。朝礼のあとにやる試合の結果報告がとても苦痛だったからです。言わなければならぬ言葉がなかなか出てこなくて、いつも全校生徒の前で恥をかいていました。

試合の前日にある壮行式で応援団から激励されて全校生徒の前でお礼を言うという場面があり、それでも最初の言葉がなかなか出てこなくてとてもつらくて死にたい思いをしました。自分はあたり前であって死にたい思いをしませんでした。自分はいやでたまりませんでした。

高校時代もそうだったし、社会人になってからもずっとそうでした。電話の応対がうまく出来なくてとても苦勞しました。「もしもし」の「もし」が出ないのですから。なんで俺はこんな境遇に生まれたんだと自分がぐちゃぐちゃしてしまいました。

しかし、二四歳のころ、高石ともやさんの

影響でトライアスロン（水泳、自転車、マラソン）をやるようになってから自分が変わりました。自分がどもりであるということをとんとおぼえなくなったのです。誰に勝つかか負けるとか、そんな小さな世界をこえて大自然と闘い、大自然と遊んでいるうちに体と心が丈夫になりました。「私はこんなに元気なんだ」、最近では、そんなあたり前のことに大よろこびしています。

林竹二先生は、口癖のようにして「絶望のないところに本当の優しさはない」と言っていました。私は自分がどもりだったということである意味で絶望を感じました。ですから私は他人に対して優しく出来るのだと自分に言いかせています。

『人間って不思議』の中で、「私が四歳の時、兄はかりそめの病いで亡くなったから、兄にまつわる記憶は、まぎれもなく私の三、四歳のころのものであるのに、兄の言動や母の介抱、死の前後のできごとは、あざやかに私に印されている。そしてこの原記憶は、私を本能的に弱きもの、病めるものの側に立たせ

……」というところがとても気に入っています。

私は生きることがあまり上手な方ではないので、いろいろといやな思いをすることもありますが、二四歳で会社をやめてから、私の仕事は「衣食住家」だと言うようにしています。

私の夢は、日本海の見える鳥海山の麓にグリーンピース村を作ることです。四〇歳ぐらいまでには、なんとか作りたいと考えています（あと一〇年と三ヶ月）。

減農薬米ササニシキと無農薬野菜を作っていますのでほしい方、ご連絡下さい。

GREEN PEACE VILLAGE

〒808 山形県酒田市西野町4-27

TEL 0234-33-8697 (今井和彦)

◆七月号の「はなにっき、奥のほそ道」で象潟きまぐたのことが出ていてうれしかったです。私の生まれた地です。芭蕉の話は知っていましたが書いているのは初めて読みました。文中「むやむやの関」というのが私の本籍地で、いま

は有耶無耶^{うやむや}の閑と書きます。私のつれあいはうそだと言って聞きませんが本当です。藤尾さんに、喜んでいたことをお伝えください。

(市川・横山れい子)

◆七月号「海の輝く日」、佐藤さんの文章に、古川女子高、高橋都先生とあり、懐しくペンをとりました。

仙台高校の先生というだけでも、何となく一方的にですけど親しみを感じて、ずっと読んでおりました。高校時代、物理部に在籍し担当の先生が仙台高校に転出された折、会いに行ったところだったからです。私が大学の頃ですが。

高橋都先生は、私が高三の時、二時間程度でしたが、臨時で保育の授業をなさったことがあります。私のコースは、家庭科の授業時間数が少なかったのですが、妊娠・出産についての予備知識、いわゆる性教育としての特別の授業だったのかもしれない。

(東京・鈴木まき子)

◆七月二十一日は、泊まで行ってきました。八月六・七日の泊キャンプは残念ながら行けませんでした。市内を走る幌延から泊まで

の反原発リレーを応援しました。

原発一色ですが、脱原発が成った時、置きざりにされた(?)教育、差別の問題が世にはびこっていた、などということになっては大変と「北沢杏子さんの講演会」も企画しました。八月二十二日は泊・とまり記念日、東京からも家族二組がわが家に泊まる予定です。居ながらにして、友と夜つびいて話ができるのはいいものです。

(札幌・高橋芳恵)

◆夏季フォーラム、がんばって家族そろって参加させていただこうと思います。Weに対する知識も四月号以来の浅いものですし、全く先入観なしで、興味を持って行かせていただきます。ただし子どもたちが少しご迷惑をおかけするのではないかと、今から心配しています……。

私は、七月二十五日から八月三日、八月十五日から八月二十四日を東京で過ごします。日本女子大のスクーリング出席のためです。

より深く家族のことを考えたいと思い、始めた家庭科の勉強でした。昨年は結婚以来、はじめて別々に過ごす夏は、私たち夫婦に新しい風を運んでくれました。24日間、一日も欠

かさず手紙を書き、別々の地ですぐす夏を共有するのだと、お互いに言いかけました。

そんな中で(通信教育の勉強の中で)Weを知り、なんとなく定期購読を始めるようになり、今年は少しハードすぎるスケジュールながら、夏季フォーラムに出ようと思いましたが、(私の生活を、どうぞゆさぶってくださいように！)

現在、大阪の府立高校で英語の教師をしている私は、今一番「シユタイナー教育」に興味を感じています。自分自身その教師をしてみたいという思いと、わが子をそこに通わせたいという思いで一杯です。その一方で、目の前の生徒たちの顔を思い浮かべ、わが子の現実を直視するなら、自分が少しでもよい教師になっていく以外に道はないのだと感じています。

とにかく、夏季フォーラムでの新しい出会いに期待してがんばりたいと思います。

(泉南・南野忠晴)

◆夏増刊号読みました。ああ、座談会はこのなふうだったのか。重要な発言がいくつもなされているけど、「私」の「今」をどう生きるかに響いていない、という印象。

若竹さんの「レッテル論」、ウン、ウンと思
いました。そうだったんだ。私は自分に貼る
ためのレッテルを決められないで(むしろ、
決めることから逃げて)いる。そこに私の問
題があったんだ。問題点がわかったのだから、
あとは解決方法を見つければいい……と、ほ
んど独り言になりました。

(田無・姫野順子)

◆「教育はどこへ」の増刊号、大変関心を持
って読みました。Weという雑誌は、一人一人
の言いたいことを言える場であることが、読
み手によく伝わってきます。そして大きな流
れとしては、極端に走らず、少し(かなりで
しょうか)先の時代を見通して、好ましい方
向をめざしているのだということが理解でき
ます。

座談会―春の公開ゼミナールを受けて―は
勉強になりました。PTAや子ども会活動を
していく上でも、討論は欠かせませんので、
武田さん、半田さん、西内さんのご意見は傾
聴させていただきました。小沢牧子さん「お
訪ねしました」の対談インタビューもよい内
容でした。

We 8・9月号「コンピューター、何をどう

変える」も、7月号にひきつづき、Weのコンピ
ューター拒否反応(?)がだんだん柔軟にな
ってきていることに感心したりしています。

Weを子どもの通う学校の先生にお見せしよ
うかなと思いついたためらっています。私
は一介のPTA会員で、やはり親は教師であ
る先生より下である方(水平関係になってい
いものでしょうか、よくわからなくて)が無
難という私自身の偏見のせいでしょう。

そういう視点のせい、か、「こだま」の三枝
さんと竹見さんのそれぞれの信念のある考え
方に接して、いくつかのことを考えさせられ
ました。結局はどういうやり方であれ、人
動かすのは人であるのだらうと。だから、私
も自分がこたわりなく、先生にすつと「こ
ういう雑誌を私とっているんですよ」と差し出
せるようになる時を待ってみようなんて思っ
たりしています。

(仙台・加藤弘子)

◆8・9月号の「コンピューター何をどう変
える」、自分の視野を広げるのに役立ってい
ます。増刊号、読みたえないうしり感じていま
す。鈴木さんの最後の六行、自分のあれこれ
と合わせて考え、本当にそうすることでは

「教育のゆくえ」はつかめないと我身に言
いかせて読みました。半田さんの「人間同士
が心を通わせることができれば何も始ま
らない」は、今の状況にぴったりの思いで
す。考えを同じくする人同士のかかわりさ
え、困難を感じていますので……。

(清水・加藤千恵子)

◆半田さんの「コンピューターと生活の質」
を読みながら、先日の中二年生の事件を思
い出しました。私は現在、週刊「エコノミ
スト」を読んでいるのですが、その本の中に感
じるのは、社会の流れの速さです。ハイテク
社会がどんどん社会の流れを速くします。そ
して、その情報が社会の中に流されていきま
す。

教育は、その情報の流れをこなせるような
人間を社会に送り込まなければならぬと子
どもに高度な教育を求めます。

しかし、あまりの時間の速さに、子どもの
頭脳がついていけないためにトラブルが起き
ているように思います。ふつうの人がこなす
情報としては、時間の流れが速すぎます。

(岩国・森章二)



〈We市川の会〉

◆五月に行われた「市川女性のつどい」に参加しました。「We市川の会」として、婦人問題の部に加わったのですが、初参加ということもあり展示だけに終わってしまいました。写真をごらん下さい。

展示の内容としては、Weってこんな雑誌、去年のWe誌のテーマ、女性民教審の提言抜粋、平和問題について等です。We誌そのものの良さは、実際に読んでいただくのが一番と、二十冊程さしあげてみましたが、欲しいとおっしゃる方は皆高い関心を示したように思います。

会社をやめたのを機に地元での活動をもちたいと考え、始めた市川の会でしたので、参

加してみて得たことはたくさんありました。ただ広告取りをしたり展示したりで個人的な動きが主だったことが反省点です。

細々ながら続いている市川の会ですが、自身はいつもおしゃべりの。それでもいつも力づけられ、元気しています。(横山れいこ)



〈We岡山の会〉

◆We岡山の会を次のように呼びかけました。

「このWeの会は、自立する女と男・人間らしい暮らし・差別のない社会を願う人々が集い、語り合い、ともに考えます。そして、その願いを現実のものとするため、身近なところからまず自分自身が変わり、日常生活を変えていきたいと思っています。男女の人間形成に大きな意味をもつ、家庭科男女共修の具体化等にも、強い関心を持っています。」

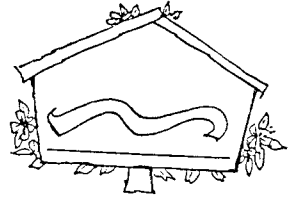
一九九〇年、岡山でも「移行措置」がとられる予定です。これまでの「女と男」「暮らし」を再生産するような内容では困ります。

生きる場、岡山で何とかしたい……」

こうして、四月6名、五月7名、六月23名七月14名の参加で、毎月末の土曜日に、まきび会館で開いてきました。通信も出しています。虫明雅子さんには、ノートルダム清心女子大の研究室で打合せをさせていただいたり、児童学演習の講義を二度担当させてもらったり、お世話になりつ放し。農文協の吉瀬正彦さんの毎回の参加が励みです。

八月例会は夏休みにしてホッと一息。次回は九月十七日(土)二時半〜五時、まきび会館洋室で開きます。(丹原恒則)

Weに なんでも言おう なんでも聞こう



◆このところ、教育に関する本に拒否反応を示していた私ですが、ハロラン美著『ティーンエイジブルースールポルタージュ・米国の教育改革』という本（かなり厚め）を、長い年月!?をかかって、あと少しという所まで読み進んでいます。本文中の「父兄」という言葉に舌うちしながらも「家庭科」に関する記述が、男子も学んでいるとかいないなどの関心が全くないのをはがゆく思いながらも公立の教師の忙しさと、トコロテンのように教室に押し出され、ベルとともに教室から流れ出、次の教室にドロリと押し込まれる生徒など、一人で三〇〇人〜四〇〇人も担当するカウンセラーの実態（本来の相談が出来ず、生徒ひとりひとりのカリキュラム作りへの手助けと進路相談に終始）などに、息苦しさを

伴った、ああアメリカも苦しんでいる、という思いで、珍しく「教育」の本を読んでいました。

今日届けられたWe「なぜ、家庭科にコンピュータ」を通読しました。昨年の春ゼミのモゴモゴ、モヤモヤしていたものが、いくつかの報告で、そうだったのかという思いがしています。飯田さんの技術科の教師としての発言、とても共感を覚えます。福田さんの論は、家庭科のとらえ方が違うなと思いました。家庭科教育の柱が、生活を豊かにする手段となる最先端の知識・技術を平等に広めるというのは、どうかと思います。それに、教科内容にミシンの使い方等等書いてあるんだもの、エーッ、違うよと思ってしまう。でも、ガマンして読み進むと、生活に必要な技術・知識の原理的な部分を教えるためには、コンピュータがなければダメのように書いてあっておかしい。マイコン炊飯器がなくとも、「おいしく炊く」ことの原理は教えることが出来る。「思考の道具としての使い方が出来るようになることが、コンピュータを教えることの目標」だとしたら、家庭科でやる必要はない。別の科目でやることだと思ふ、などとブツブツ言いながら読む。

みなさんの文、なんか混乱しているみなさん、という感じがする。家庭科の教師になってからのみなさんの考えていることを、またもう一度聞いてみたいなあ。

そして、福地絵子さんの「申し立てせずにはいられなかった―蕨山高校における男女差別」、ずしんと重みがある。こんなひどいと知らない人がいっぱいいるのは、学校がクレイジーになっているから。こんな顕著な形ではないにしても、私の職場にも、ある種のムードはある。「いいがっこう」に教師も生徒ものまれている。

この間から、私一人で教育実習生二人かかえて、毎日八〜九時まで学校という日が二週間、その後すぐH・Rの生徒面談がまた二週間以上続く。うんざりする日々の中で、夏休みは、学校や教育のこと、ぜんぶ放りなげて過ごしたいと思っている自分。しかし、そうはいかないことも確かだと半分あきらめている自分。

でも、福地さんの文は、少なくとも職場の二人位にはコピーして渡したいと思う自分。たった二人位しか思い浮かばないことに、ふがいなさや情けなさと、くやしさと、入り混じった気分。でも「とにかくやるんだ」と思

っている自分。

夏休みには、中込さんの「地球の子どもの家」や長野の仁ノ平さんを訪ねたいな、と思ってみたりもします。(東京・菅谷薫)

◆佐藤通雅さんの「海の輝く日」、心豊かな方だなあとはい拝読していますが、ちよつと気になったことがあります。「女性解放運動」が出産も家事もジャマなんていいだしたとき『そんなにいらぬなら、オレにください』という気持ちでした」というところですよ。

ヤユしてのご発言でないことはわかります。また実際一時、一部の主張にそういう過激(?)な発言もたしかにあったと思います。

でも、でもです。女性の言う「出産」も「家事」も、決して、それぞれがそれ自体だけでは存在しないのです。だからこそその拒否発言であつたと思うのです。

出産によって受ける半人前扱い、子育ての間に受ける世間の重圧(母親のスキンシップが大切、母原病、○○をすると非行になる、親の顔が見たい云々)、様々な家事をまかなうと同時に、インフォメーションセンター、留守番、秘書、雑用処理も随時お任せ、とされることのしんどさ。それをわかっていただきたいのです。まして、大家族の中の「嫁」

であつたら——自分のくらす場でありながら自分の家と言えない気持ち、自分の24時間がまったく他の者次第で動かされること。家事のひとつひとつをいとうのではなく、そのことを、もうごめんだと言いたかつたのではないでしようか? 自分で選びとるのでなく、他者に決められる人生を。男性がひとこと「家事」というとき、ちよつと歯がゆさを感じる私です。

(藤沢・杉山百合子)

◆夏増刊号、最後まで読みおえて、今ふつと思ひ出してしまったんです。「永山則夫がいる」って、李喜奉さんが言ってたなあと。夏増刊号を読んでも全く思ひ出さなくて、どつかの中学に乱入した男のことは思ひ浮かべたのですが。

25頁で鈴木さんが「わたしの共同住宅でも、韓国人の方がいるんですが、自分たちを守り過ぎることで、かえって日本人とのつながりを切ってしまう、そういう傾向もあるんですね。子どもたち同士で遊んでいても、その韓国の子どもはすぐく乱暴で」と言い、29頁で大西さんが「先ほどの鈴木さんのお話で、韓国の子どもが乱暴という話がでしたが、ほんとうに日本の子どもっておとなしいんですよね。外国の子どもが乱暴だつていう

のも、文化の差でしかないと思うんですけれども」と言っています。

ぼくは「チガウ!! チガウ!!」と思ひました。どつかの中学校に乱入した男は、一年(?)も前から、その中学生にいじめられてたそうじゃないですか。それで、あの乱暴を働いたんじゃないですか。ぼくは100%あの中学校の生徒が悪いと思つてます。

ぼくの学校にも乱暴な六年生がいます。台湾から来た「外国の子」です。実に乱暴です。でも、ぼくには見えてますヨ。そのクラスの日本人の子たちが悪い!! つてこと。

でも、ぼくにはどうしようもなくて、目にいたら止めるだけです。

だいたい、今いじめが陰湿化してきてるって言われていますが、そのいじめをやつてる日本人の子たちは乱暴じゃないんですか!! と鈴木さんと大西さんに言いたいんですね。

永山則夫が連統射殺という大乱暴を働いたのは「日本」によって差別されてたからじゃないですか。差別されりゃあ、日本人だって外国人だって、誰だつて乱暴になるつて、李喜奉さんは言つてたんじゃなかったですか。

(横浜・鈴木正美)

むすびあおう 子どもの手、父母の手、教師の手

「父母の教育権とPTA」研究会

〈高橋 雅子〉

一九八八年六月、子どもの人権を守るための公開研究会が東久留米市（東京・多摩）で生まれました。よびかけは今橋盛勝茨城大教授を中心に、母親、小・中校教師、弁護士、ジャーナリストなど様々な層の人達で、いま、学校教育の中で苦しんでいる子ども、悩んでいる父母を少しでも元気づけられるような会にしたいとの深い願いがこめられています。

発足会には、ふりしきる雨の中、東京、千葉、埼玉、静岡から約百五十名が参加、わが子やその友達が……と具体的な人権侵害の訴えが相次ぎました。二回目も同じような状況が展開され、この活動に参加する中から、子どもの人権が損われた時、親や地域の大人たちが学校や教育委員会に対してどのように父母の権利を主張出来るのかを掴みたいとの熱意がひしひしと伝わってきました。三回目は二日間のプログラムを組み、テーマは体罰、内申書、父母と教師の連携などです。

この研究会の誕生にあたり、激励や期待が多数寄せられています。子どもや私たち父母が、人間として生きる権利を獲得するまでには、なお多くの時間とエネルギーが必要だと思っています。毎月第四土曜日、午後二時から。沢山の事例に学びながら、これから私たちのしなければならないことを一緒に考えていきませんか。あなたの発言をお待ちしています。

連絡先 〒203 東久留米市中央町 5-4-8 ☎0424-74-9125

いきいきグループ 自己紹介

「海外キヤラバン隊」

〈河内みどり〉

四月に生まれたばかりの、まだ、湯気たちこめる、ホヤホヤのグループです。

日本の昔話や歌を影絵にして、それを在日外国人の方に見ていただき、メルヘンの世界で心なごませてもらえればと思っています。ささやかながら、「影絵劇」という文化を通して、心暖まる国際交流を深めていきたいという気持ちです。

まず第一作目として、現在「さるかに合戦」を制作、練習中です。影絵劇に関して、会員のほとんどは、素人ですが、光と影の織りなす影絵劇の美しさに魅せられ、何とかして美しく楽しいものを創り上げようと、知恵と力を寄せ合っています。

秋の旗揚げ公演を目ざし、会員も募集中。訪問先は、在日外国人学校、難民の方や中国からの引き揚げ者の方が生活している施設などを予定。また、最近とみに多くなっているアジアからの出稼ぎ労働者の方々にも見ていただき、ホッと童心に返るひとときを共に過ごせればと思っています。

そして将来は海外公演も！と、夢は限りなく広がるばかり。そんな夢から「海外キヤラバン隊」と名づけました。興味のある方、ご連絡下さい。

連絡先 〒136 江東区亀戸 5-28-5 ☎03-637-9440 河内（夜間のみ）、☎03-675-9904 井口

泉

● 情報のページ

◆ 女性民教審と話しましよう

——臨教審から一年。この息苦しさはなんだ!——

「臨教審解散から一年。答申にそっていろいろな施策や法改正が行なわれました。その後、学校・子どもたち・私たちのくらしはどう変わったでしょうか。臨教審改革のその後を点検する私たちの会に、ぜひおいで下さい。そして発言して下さい」(チラシより)

○九月二十三日(金) pm 一時半～五時

主婦会館ホール(東京・四谷駅前) 千代

田区六番町15 ☎03-265-8111

○プログラム

第一部 「何がどう変わったか」——臨教審改

革の意図を読む 小沢牧子

第二部 自由発言「近ごろ、わたしのところでは……」(司会 奥地圭子・駒野陽子

第三部 シンポジウム (発言者) 佐々木

賢、俵萌子、永畑道子、半田たつ子、吉

峯康弘 (司会) 樋口恵子

○参加費 五百円

問合せ先 女性による民間教育審議会

〒164 中野区弥生町4-35-1 俵萌子方

☎03-384-3216

◆ ミニコミ・トークイン、ミニコミ交換会

十月八日(土)・九日(日) オリンピック記念青少年センター(渋谷区代々木)

松下竜一氏の講演、パネルディスカッションの他、ミニコミの交換会、展示即売会があります。

問合せ先 住民図書館 〒158 世田谷区玉川

1-2-3 ☎03-709-4335

◆ 「新しい学校——きのくに子どもの村学園」設立にご支援を!

「日本にもニイルのサマーヒルのような自由な学校を、そして、わが子に幸福で創造的な子ども時代を、と願う親を中心に精力的に活動をし、ようやく、最近和歌山県で休校中の小学校を払い下げてよいという意向を得ました。

日本で私立学校をつくるのは、法的にも、資金的にも大変な困難をとまいますが、みんな怖いもの知らずの楽天主ばかり。あせらず、あきらめず、しつこくがんばります」

(代表、堀真一郎氏より)

○設立基金援助のお願い

一口一万円(できれば五口以上)

問合せ先 新しい学校をつくる会 事務局

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪

市立大学、生活科学部、児童教育研究室

☎06-605-2842 振替(大阪)40260)

銀行(大阪信用金庫・杉本町支店 397323)

◆ 半田たつ子著の新刊本『生命とくらしをい

とおしむ——家庭科新時代へのまなざし』

『家庭科』の新しい時代をむかえて、「やあ、窓を大きく開いて、太陽と薫る風を招き入れよう」と、いのち、くらしに深くかわりながら「生きる」事実にせまる。著者の家庭科教育観と、家庭科新時代へのまなざしが一冊の本にまとまり、国土社から出版されました。

B6判 二一〇頁 定価一三〇〇円

発行所 国土社 (〒112 文京区目白台1

17-6 ☎03-943-5721)

十字路

〈北海道〉病死牛肉密売事件(北海道6/24)

病死牛肉を食用にされると承知のうえで食肉ブローカーに密売していた根室管内と紋別市のへい獣処理業者が、六月二十日、道警と警視庁に摘発された。悪質な犯罪だが、へい獣の処理は環境衛生上の規則があるだけで、食品衛生法は適用外、営業停止などの処分も受けない。

(高橋芳恵)

〈群馬〉進路対策費など使途不明朗(朝日6/17、20)

高崎市立高松中(碓井秀夫校長)の三年生の父母で作る三年学年委員会は昨年「進路対策費」などの名目で生徒一人当たり一万四千四百円ずつ総額約三百三十万円集めたが、「使道が不明確」との声が上がった。十八日明示されたものによると、総支出は三百五十八万四千円、うち七十七万円が教職員への謝礼や接待費、約六十三万円が、本来公費で支払われるべき支出に充てられている。

(林田初恵)

〈長野〉「生活科」教科書づくり(信濃毎日7/11)

信濃教育会教科書編集部では、十二月の新学期指導要領告示を控え、六十五年度の教科書検定に間に合わせるために、「信州の四季」「自分史」の単元をもうけ、「生活科」の教科書編集作業を進めている。「生活科」は小学校の一、二年生の理科と社会科を統合する新科目で、「しつけ」や道德的な要素が出てくると懸念されている。

(宮崎春美)

〈千葉〉制服着用で大揺れ(毎日7/14)

八年ほど前から夏は男子が紺色半ズボン、女子は紺色スカート、ともに白いシャツ、夏以外は男女とも緑色のジャージを制服と決め、着用を指導してきた香取郡大栄町立前林小学校で、転入生の父母の「制服の指導は納得できない」をきっかけに揺れている。同小PTAはアンケート調査を行い、七月十三日総会を開いた。調査では支持派が六十九人、反対派が二十二人。学校側は「当面は現状維持でいくが、自由服着用を含め検討は続ける」

としたが、論争は尾を引きそう。(木田直子)

〈愛知〉はたらく婦人県集會に400人(朝日6/27)

自治労県本部、新婦人県本部、私教連が主催する「はたらく婦人の県集會」が六月二十六日開かれ約四百人が参加した。挨拶、講演のあと、男女雇用機会均等法の下で、賃金や昇格に格差がある現状が報告された。中部電力の女子職員は「原発推進の安全宣伝に、女子職員が利用されようとしている」と述べ、浜岡原発見学の計画を報告した。(平野利依)

〈京都〉もんぺ姿は議員の品位汚す?(朝日6/21)

向日市議会で、「日の丸を議場内に常時掲揚すべきだ」という請願を審議した六月二十日、社会党女性議員飛鳥井佳子議員はもんぺ姿で登壇した。かすりの上着には住所、名前血液型、生年月日がりつけであり、反戦の思いを込めたという。これに対して「品位を保てない」との発言があり、紛糾、議長裁定で「服装は各議員の問題だが、名札はふさわしくない」となった。飛鳥井議員もこれに同意した。なお、日の丸常時掲揚は不採択とな

った。

(塚崎美和子)

〈奈良〉女性の意識改革望む(朝日6/28)

奈良女子労働懇和会の初会合で「男女雇用機会均等法施行後の女子労働者の動向」が語られた。「四年制大学の女子を雇わなければというムードが出ており、大卒女子用の仕事を工夫し、女子の就業分野が広がっている」など、施行後に変化が出ていることがわかったが、全般的には女子労働者自身の意識改革が必要と指摘する声があった。(乾庸子)

〈兵庫〉住環境、子に影響は?(赤旗5/13)

尼崎市教職員組合は、子どもの発達にとって住環境がどのような影響をおよぼしているのかと「子どもの発達と住環境調査」にとりくむ。教育と住環境を多面的、科学的にとらえ、住みよい町づくりも提起する。教職員組合でのとりくみは全国初。今年末に結果を発表する予定。(由良サダコ)

1) 〈鳥取〉国策修正した住民運動(日本海6/

鳥取、島根両県の最大課題となっている中海・宍道湖の淡水化問題に五月三十一日、「延

期」の決断が示された。84年に農水省から淡水化試行への同意を求められてから四年、「試行やむなし」から「延期」に軌道修正させたのは粘り強い住民運動と世論だった。(前田享子)

〈徳島〉県教委―現代っ子に原始生活体験を(徳島5/15)

ファミコン遊びや塾通いでたくましさを失っている現代っ子に「野性味」を取り戻させようと、県教委が今年初めて「フロンティア・アドベンチャー事業」を実施する。小学五年生から中学二年生までの男女五十人が、無人島の大島で、八月十七日から二十七日まで原始人さながらにテント生活をする。事業予算は四百八十万円。(棚上節子)

〈香川〉考えよう無意識の男女差別(毎日、四国6/19)

高松市女性行動計画推進フォーラムが、六月十八日開かれ、「無意識の男女選別」に目を向け、「たかが名簿、されど名簿」について討論、さらに固定観念をくずし、「男女ともに生き合う社会」を実施するために考えた。(岡内須美子)

〈長崎〉玄海原発事故に備え(長崎6/15)

県は六月十四日、原子力発電所の重大事故に備えて県地域防災計画の中で、万一の際の避難態勢など原子力災害対策を策定することを明らかにした。県消防防災課によると原子力災害対策は、対策本部の設置、情報の伝達方法、住民への避難命令の指標など具体的に定めたもので、今年中に策定県地域防災計画に盛り込む。(河野瑞枝)

〈沖縄〉超党派で実行委結成―県民大会(沖縄タイムス7/13)

県労協がバラシユート降下訓練、原潜寄港湖水訓練などの軍事演習に危機感を募らせ、県民大会の開催を呼びかけ、七月二十日の「軍事演習反対県民大会」(仮称)に向けた各団体代表者会議が七月十二日開かれ、政党五労働団体五、民主団体四からなる超党派の実行委員会結成を確認した。構成団体の規模では復帰後最大の県民大会となる。在沖米海兵隊は十三、十四日、ハンセン演習場で実弾砲撃演習を実施し、米軍読谷補助飛行場では滑走路損壊査定訓練をする。これら二つの訓練が同時実施されるのは初めて。(大嶺麗子)

あんな

★首都圏で登校拒否生徒の専門学級が急増 ——切り捨て懸念の声も★

情緒障害の特殊学級で、登校拒否児が増え、主に中学校で登校拒否児専門の学級を設ける自治体が首都圏を中心に広がっている。今年度は千葉市、川崎市、町田市などが始め、設置自治体は25以上にのぼる。より専門的な対応を求める父母、教師らの切実な声にこたえたものだが、「受け皿の整備は、かえって普通学級からの安易な切り捨てにつながる」と懸念する声も出ている(6・23付朝日夕)。

★中2少年、両親・祖母殺す ——金属バット、包丁で★

7月8日早朝、東京・目黒区の住宅街で、中学校2年の男子生徒が就寝中の両親、祖母の三人を包丁でメッタ突きに刺し殺す事件が起き、警察は殺人容疑で逮捕した。この生徒は前夜、期末試験の成績低下を両親に叱られ、包丁、金属バットを用意して寝たという。この事件は学校関係者や家庭に大きな衝撃を与えた(7・9付各紙)。

★授業中、オノを持った男乱入 ——生徒8人が重軽傷★

7月15日、神奈川県平塚市立山城中学校に、29歳の男が草刈がまとオノを持って乱入、切りつけ、男女生徒8人に重軽傷を負わせた。犯人は「普段から同中学生に石を投げられたり、ツバをはきかけられるなど、いじめられていたので復讐した」と供述しており、生徒の「弱者」に対するいじめが、学校を舞台にした惨劇に結びついたもので、教育関係者に大きなショックを与えた(7・15付各紙夕)。

★プロレスいじめ、60人負傷 ——中3の2人、児童ら襲撃★ 人目が届きにくいマンションなどの屋上

に小、中学生を連れ出し、プロレスの荒技をかけて計60人に重軽傷を負わせ、金を奪うなどしていた東京都板橋区立中学3年生2人が、7月16日までに、警視庁少年二課と練馬署に傷害の疑いで逮捕され、身柄を東京地検に送られた。2人は自分たちより弱そうな相手だけを狙っており、「技が面白いようにかかるので気持ちがよかった」と供述している。被害が集中していた地域では、チラシで「2人組に注意」と呼びかけていた(7・17付朝日)。

★子ども置き去り蒸発10か月 ——押し入れには幼児死体★

東京・豊島区で、母親が家をあけ、戸籍がなく学校にも通わない14歳の少年と幼い妹2人が10か月間も3人でマンション暮らしを続けていたことがわかり、7月22日までに福祉事務所に保護された。母親は保護者遺棄の疑いで逮捕(7・23付各紙)。さらに長男と友人らが3女(2歳)を死なせ、遺体を埼玉県内に捨てていたことがわかり、傷害致死と死体遺棄の疑いで逮捕された(7・25付各紙)。

★指導員に殴られ、精神薄弱児施設入園者失明 ——園側はひた隠し★

全国で唯一の国立精神薄弱児施設「秩父学園」で昨年7月5日、入園中の重度障害児の少年(18)が布団を破いたことで男性指導員に殴られ、右目が失明に近い状態になった。園側は当初約3か月間も暴行があったことをひた隠しにし、最近になって改めて両親に謝罪した(7・13付朝日夕)。

★文部省、新学習指導要領の要点を公表★

1990年度の幼稚園から小、中学校と順次導入される新学習指導要領づくりを進める文部省は、7月23日、これまでまとめた改善の要点を「教育課程講習会・資料」とし

て公表した。道德教育の充実、国際化への対応、個性重視などが主な柱となっている(7・27付各紙)。

★内申書訴訟の上告棄却

——最高裁、学校の裁量権広く認める★

内申書に「全共闘」と書かれ、5つの高校入試で不合格となり、卒業式にも出席できなかった東京都千代田区立麹町中学校の卒業生が都と区を相手取り300万円の損害賠償を求めた「内申書訴訟」の上告審判決が最高裁第二小法廷で言い渡され、香川保一裁判長は「違憲主張は理由がない」と上告を棄却した(7・15付各紙夕)。

★日本医師会の脳死見解を批判

——日弁連、臓器移植で意見書★

日本医師会生命倫理懇談会が今年1月に公表した「脳死および臓器移植についての最終報告」を検討してきた日本弁護士連合会は、7月15日理事会を開き、「同報告の見解に基づいて脳死を判定、人の死と認めて臓器移植をすることは人道上問題がある。また、この見解を根拠に、安易に臓器移植をすべきではない」とする意見書を採択。患者の基本的人権を重視する立場から最終報告を批判しており、日医報告で高まりつつある心臓や肝臓の移植手術再開機運にブレーキをかけることになりそう(7・16付各紙)。

★和歌山県日置川町長選、反原発派勝利

——今年3度目「原発ノー」★

関西電力の原子力発電所立地計画の賛否を焦点にした和歌山県西牟婁郡日置川町の任期満了に伴う町長、町議選が7月3日、投票、即日開票され、町長に「反原発」を訴えた三倉重夫氏が現職の町長を破り、初当選した。今年に入って高知県窪川町、和歌山県日高町に続く3度目の「原発ノー」(7・4付各紙夕)。

★「原発反対」という人は冷蔵庫・クーラ一使うな ——宇野外相、講演で発言★

宇野外相は7月21日、都内で開かれた日本経営者協会主催の「全国経営者大会」で

講演、原子力発電問題に触れ、「原発反対の人は冷蔵庫やクーラーを使わないで欲しい」と述べ、原発反対運動を強く批判した。発言の趣旨は原発なしには現代生活が成り立たないというものだが、原発反対グループは反発(7・22付朝日他)。

★海上自衛隊潜水艦と大型遊漁船が衝突

——漁船の30人が死亡★

7月23日、東京湾・横須賀港沖の浦賀水道で、伊豆七島・新島へ向かう大型遊漁船「第一富士丸」(154トン)は浮上航行中の海上自衛隊潜水艦「なだしお」(2200トン)と衝突し沈没、釣り客や乗員のうち18人は救助されたが、1人が死亡、29人が行方不明(7・24付各紙)。29日までに行方不明者全員が遺体として収容された(7・30付各紙)。

★海自、米軍と共通の戦闘指揮体系に

——集団的自衛権に抵触も★

空と海、水中からの複合脅威に備える米海軍の「戦闘指揮システム」が海上自衛隊に導入され、日米共通の海上戦闘原則となっていることが8月8日、明るみに出た。同システムは、米空母機動グループの戦闘能力を十分発揮させるため、各任務部隊の裁量権を大幅に認めた現代戦の基本マニュアル。海自は1982年以来、環太平洋合同演習(リムパック)を通じて同システムを習得、「指揮命令系統は別」としてきた日本近海での日米共同訓練のみならず、海自独自の演習にもその考えを取り入れていた(8・9付毎日)。

★対南ア貿易13%増

——政府の自粛要請、効果なし★

今年上半期(1～6月)のわが国の対南アフリカ貿易額が21億5100万ドルとなり、昨年同期より約2億5000万ドル、13.3%増え、このなかで輸入は減ったものの、輸出は対前年同期比で45.3%と急増したことが7月12日、明らかになった。今年前半を見るかぎり、円高の影響も大きいこともあるが行政指導の効果は上がっていなかったわけで、国際的にも大きな反響を呼びそうだが、わが国政府が国連などで強い批判を受けるのは必至とみられる(7・13付毎日)。

北海道

〈旭川〉京栄堂、樋口〈札幌〉
北東京堂、維新堂〈島根〉グ
アイヤ、吉小牧、熊谷、伊達、新
生堂、函館、神田、森文化堂
育楽堂
〈青森〉成田本店、遠藤、八
戸、伊吉書院、弘前、とよはら
〈三沢〉好文堂
岩手県
〈盛岡〉東山堂、花巻、誠山房
〈水沢〉松山
宮城県
〈仙台〉八重洲、萩書店、高山
千忠、宝文堂、古川、高山
〈泉〉ホビット館
秋田県
〈秋田〉加賀屋、たかのずや、
荒川、大館、石川、湯沢、
おびきゅう
山形県
〈酒田〉八文字屋、遠藤、山形、
高陽堂、ばんべい、教育用品
〈鶴岡〉阿部久
福島県
〈福島〉岩瀬、西沢、郡山、松
文堂、すばる、会津若松、ニ
シザワ、いわき、BSオオスカ
〈梁川〉第二大竹
群馬県
〈藤岡〉川島朝日堂、前橋、ア
ルプス社、遊書館、中之条、
島村、渋川、正林堂
栃木県
〈宇都宮〉杉山、足利、関口
〈栃木〉福田屋
茨城県
〈水戸〉ツルヤ、B.C、土浦、白
石、マゼン
埼玉県
〈浦和〉岩淵、須原屋、川口、
新井、ブックスサトウ、越谷、日
野屋、東松山、比企文化社、
和光、山屋、狭山、楓書房、志
木、宮川、大宮、阿里書房、
岩井、飯能、安藤芳文堂、入
間、ヤマトウ、熊谷、神田弘
文堂、鴻巣、奥沢
千葉県
〈船橋〉前原かつば、西武、B.C、
はつらつ書房、松戸、元山、津
田、大和屋、佐原、多田屋
〈市川〉大杉、千里堂、成田、
中台書房、四街道、モンジ堂、
千代田、東葛飾郡、ブッ
スきさい
東京都
〈千代田〉日成堂、書肆アク
セス、三省堂本店、書泉グラ
ンデ、東京堂、八重洲、B.C、芸
能、笠原松文堂、文京、ビッ
ピ、豊島、池袋、紀文堂、四
季書房、墨田、文栄堂、杉
並、木風舎、新愛、プラサード、

たつみ書房、西荻、結、大正
堂、みどり書房、山口、新宿、
紀伊國屋、模索舎、風書房、
伊野屋、渋谷、すべーす、えい
がさい、練馬、いずみ、葛飾、
宏精堂、中村、稲田、大和、
世田、やまべ、江崎、山下、ド
ン、書房、北、愛京堂、大田、三
州堂、藤乃屋、荒川、昌栄堂、江
東、吉田書籍部、品川、雄文
堂、目黒、中川、足立、ブッ
クスアオキ、吉祥寺、ウニタ
書房、三鷹、第九書房、た
べもの村、武蔵野、いからし
、調布、神代、小松、小金井、
かごや、府中、国府書店会、
一三書房、国分寺、吉野、国
立、増田、増田富士見台店、リ
ー、ウル三樹、立川、オリオン書
房、オリオンワイルド、泰明堂、
石井、小平、和、中、明文堂、大
島、清瀬、マル、オカ、飯田、
省文堂、町田、久美堂、日野、
南友堂、ブックス伊藤、東久
留米、黒目書房
神奈川県
〈横浜〉有隣堂、栄松堂、とも
だち、みど、書房、有文堂、博修
堂、水野、蓬萊堂、和田書房、
川崎、北野、早川、大塚、
大塚読売ランド店、ホーエ
イ川崎、相模原、中村、書房、
鎌倉、大船書房、相模大
野、相模書房、藤沢、東松堂、
茅ヶ崎、文泉堂、小田原、
伊勢治、平塚、サクラ、大和、
中央、厚木、内田屋書房、
相田、大和、いずみ
静岡県
〈静岡〉吉見、江崎、外商部、
磐田、あつみ、浜北、谷島
屋、浜松、遠州堂、稲勝、沼
津、マルサン、ランキ社、清水、
戸田、下田、村上、焼津、谷
島屋、富士宮、小長谷、榛
原郡、大石
愛知県
〈一宮〉文正堂、資然堂、名古屋
のフニタ、谷口正文館、白樺
書房、西店、白揚、竹中、中日書
房、きたやま、丸山、ちくさ正文
館、兼松、青森、前田、ポラン
の広場、江南、青雲堂、豊橋、
文教、耕文堂、豊田、鈴彦、
岡崎、カマクラ文庫、尾張
旭、活人堂、瀬戸、三浦、西
尾、黒部、愛知郡、日進書房、
刈谷、酒井日進堂
岐阜県
〈岐阜〉文光堂、恵那、松林堂
新潟県
〈新潟〉栗山、万松堂、文信堂、
上越、玉川、春陽館、新津、英
進堂、長岡、愛媛、松尾、稲豊

富山県

〈富山〉清明堂、高岡、清文堂、
永見、有瀬、新漢、川辺
長野県
〈岡谷〉笠原、松本、新光堂、
りょうん堂、長野、平安堂、上
田、英文堂、飯田、平安堂、
伊那、矢島、須坂、山下、上
水内郡、穂屋
石川県
〈金沢〉うつのみやセールスセ
ンター、北国書林、鹿島郡、
千間
福井県
〈福井〉ひまわり、品川
奈良県
〈天理〉海老山、奈良、広谷屋
南都書林、たけだ、
三重県
〈松阪〉中村、伊勢、古川、桑
名、潮
大阪府
〈大阪〉紀伊國屋、ユーゴー、
樋口書籍、米原、六堂、藤川、
学友、西坂、呼文堂、もり、
富士、頂文信堂、飯田、集英館、
山、青泉社、東大阪、ヒバ
リヤ、栗林、和泉、かつらぎ、
豊中、昌文堂、豊文堂、
セニリ、豊中文学館、高槻、
コーベックス西武、タイハン
書房、池田、春江、岸和田、
斎藤、堺、ワールド、西村、清
城堂、三教堂、登美屋、みい、
カツヤ書房、茨木、サノヤ、寝
屋川、中村、興文堂、寝屋川団
地、八尾、西川、吹田、ツルヤ
京都府
〈京都〉松香堂、オデッサ書房、
中島書院、洛陽、ジュンク堂、宇
治、大久保、京都書院、井田、
長岡京、恵文社、神足店、龜
岡、亀岡書房、舞鶴、舞鶴堂、
和歌山県
〈和歌山〉宇治、有馬、新宮、
荒尾成文堂
兵庫県
〈神戸〉流泉書房、日進堂、文
進堂、幾久、明文館、漢口堂、
中山書房、西宮、イカロス書房、
尼崎、宣文堂、塚新西武、B.C、
姫路、姫路九善、浅野八代、
明石、学友書房、原、豊岡、
ひさや、三木、三木ブックス
サンテラ、龍野、伏見屋、加
古川、ユーカリ、多紀郡、小山、
穴栗郡、安井
岡山県
〈笠岡〉池田成章堂、井原、金
森、岡山、福島かねつき堂、
九善岡山、倉敷、ニビスヤ
鳥取県
〈米子〉今井MC本店、鳥取、

富士

島根県
〈出雲〉武田、〈鹿足郡〉金山
文具店、〈松江〉ブックス文化
の友、園山、浜田、吉田屋、
邑智郡、森脇
広島県
〈広島〉やまびこ、いづみ、紀
伊國屋、ニシヤ、黙乎堂、尾
道、花本、啓文社、福山、岡田
山口県
〈山口〉文栄堂、厚狭郡、佐々木
香川、
高松、みやたけ
愛媛県
〈川之江〉トウヤ、おおくぼ、
松山、丸三、北条、片山
徳島県
〈徳島〉雄徳堂、徳野、森住、九
善
高知県
〈土佐市田〉依光、高知、金
高堂
福岡県
〈北九州〉北九州、白石、黒崎
、いつり、B.C、福岡、金文堂、
積文館、金進堂、尾崎堂、高
橋、丸山、筑紫野、丸山ス
コーレ、直方、みやはら、田川、
石川、久留米、菊竹、金文堂、
江頭、筑後、吉田、大川、山口、
粕屋郡、尾崎堂
佐賀県
〈唐津〉まつら、佐賀、金華堂
長崎県
〈長崎〉好文堂、童話館、松浦、
丸屋、佐世保、金明堂
熊本県
〈熊本〉教育文化用品KK、三
章文庫、本渡、鶴田、玉文堂
宮崎県
〈延岡〉池田、宮崎、大山、成文
館、岩印
大分県
〈大分〉開書堂、今村、高校用
品販売、福田、日田、文化書
房
鹿児島県
〈志布志〉スズキ、鹿児島、加
世田
沖縄県
〈那覇〉朝野書房
大学生協
帯広畜産、東北、岩手、山
形、福島、新潟、群馬、宇都
宮、茨城、埼玉、芝浦、日
本女子、東京、東京家政、
成蹊、東京工、お茶の水女
子、桜美林、横浜国立、山
梨、静岡、大妻女子、愛知
教育、金沢、富山、和歌山、
大阪市立、立命館、神
戸、宮崎、高知、香川、鳴門
教育、愛媛、琉球